

2019 年度修士論文

日本人サッカー選手が
ドイツ・ブンデスリーガで活躍する為の要因と方策

The Way of Japanese Footballer to The Bundesliga

早稲田大学 大学院スポーツ科学科 スポーツ科学専攻
トップスポーツマネジメントコース

5019A310-2

長澤 和輝

Kazuki Nagasawa

研究指導教員 平田 竹男 教授

目次

第1章 背景	1
第1節 日本人サッカー選手の海外挑戦	1
第2節 ブンデスリーガ	1
第1項 ブンデスリーガの概要	1
第2項 ブンデスリーガにおける日本人選手の活動実績	2
第3項 日本サッカー界におけるブンデスリーガの重要性と課題	2
第3節 筆者の立場と問題意識	3
第1項 大学卒業後ブンデスリーガでプレー	3
第4節 先行研究	3
第5節 目的	4
第2章 手法	5
第1節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手全 41 名の調査	5
第1項 調査対象	5
第2項 対象データ	5
第2節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手のインタビュー調査	5
第1項 対象者	5
第2項 インタビュー調査内容	6
第3項 SCAT 分析によるストーリーラインの作成と共通点の抽出	7
第4項 結果の検証	7
第3節 ブンデスリーガに精通した日本人代理人・コーチのインタビュー調査	7
第4節 倫理的配慮	7
第3章 結果	8
第1節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手全 41 名の調査	8
第1項 ブンデスリーガ所属日本人選手全 41 名の試合出場状況	8
第2項 ブンデスリーガ所属日本人選手全 41 名のポジション	10
第3項 ブンデスリーガ所属日本人選手全 41 名の移籍からデビュー戦までの期間	10
第2節 日本人選手のインタビュー調査	11
第1項 細貝選手	11
第2項 内田選手	28
第3項 原口選手	48
第4項 大迫選手	64

第5項 各選手の共通点	79
第3節 ブンデスリーガで活躍した選手の共通点	80
第1項 移籍前の行動や考え方.....	80
第2項 在籍後の行動や考え方.....	81
第3項 海外挑戦に必要なこと.....	84
第4節 日本人コーチ、代理人へのインタビュー調査	86
第1項 日本人コーチのインタビュー結果.....	86
第2項 代理人のインタビュー結果.....	88
第5節 ブンデスリーガへの移籍の仕組み.....	90
第1項 ステークホルダー関係図	90
第2項 各選手の「チーム選び」の取り組み	93
第3項 海外移籍の仕組み.....	98
第4章 考察	100
第1節 日本サッカー選手がブンデスリーガで活躍する要因.....	100
第1項 ブンデスリーガのサッカーの特徴に順応すること	100
第2項 移籍後早期にデビューをして結果を残すこと	100
第3項 監督の傾向を理解すること.....	100
第4項 監督から求められることに対して柔軟に対応すること	102
第2節 ブンデスリーガへのパスウェイ	103
第1項 ブンデスリーガにおける日本人選手の活動状況.....	103
第2項 Jクラブの海外移籍に対する対応.....	103
第3項 ステップアップリーグへの移籍	104
第4項 移籍適齢期	104
第5項 評価を得る機会	106
第3節 本研究の限界と今後の展望	106
第5章 結論	107
参考文献	110

図 1 細貝萌選手 出場・欠場理由	12
図 2 細貝萌選手 チーム・監督別出欠場比較	12
図 3 細貝選手 10/11 シーズン出場時間	13
図 4 細貝選手 11/12 シーズン出場時間	14
図 5 細貝選手 12/13 シーズン出場時間	15
図 6 細貝選手 13/14 シーズン出場時間	16
図 7 細貝選手 14/15 シーズン出場時間	17
図 8 細貝選手 16/17 シーズン出場時間	18
図 9 内田篤人選手 出場・欠場理由	28
図 10 内田篤人選手 チーム・監督別出欠場比較	29
図 11 内田選手 10/11 シーズン出場時間	30
図 12 内田選手 11/12 シーズン出場時間	31
図 13 内田選手 12/13 シーズン出場時間	32
図 14 内田選手 13/14 シーズン出場時間	32
図 15 内田選手 14/15 シーズン出場時間	33
図 16 原口元気選手 出場・欠場理由	48
図 17 原口元気選手 チーム・監督別出欠場比較	49
図 18 原口選手 14/15 シーズン出場時間	50
図 19 原口選手 16/17 シーズン出場時間	51
図 20 原口選手 17/18 シーズン出場時間	52
図 21 原口選手 18/19 シーズン出場時間	52
図 22 大迫勇也選手 出場・欠場理由	64
図 23 大迫勇也選手 チーム・監督別出欠場比較	65
図 24 大迫選手 13/14 シーズン出場時間	66
図 25 大迫選手 14/15 シーズン出場時間	66
図 26 大迫選手 15/16 シーズン出場時間	67
図 27 大迫選手 16/17 シーズン出場時間	67
図 28 大迫選手 17/18 シーズン出場時間	68
図 29 大迫選手 18/19 シーズン出場時間	70
図 30 The FA 4-Corner Model	87
図 31 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図	90
図 32 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 細貝選手	93
図 33 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 内田選手	94

図 34 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 原口選手.....	95
図 35 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 大迫選手.....	96
図 36 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 長澤選手.....	97
図 37 海外移籍の仕組み	99
表 1 欧州 5 大リーグ平均観客数(2018-2019)	1
表 2 長澤選手のキャリア	6
表 3 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の出場試合数.....	8
表 4 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の出場時間数(延べ).....	9
表 5 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の平均試合出場時間	9
表 6 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名のポジション	10
表 7 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名のデビューと出場記録.....	10
表 8 細貝選手のキャリア	11
表 9 細貝選手インタビュー内容の SCAT 分析.....	19
表 10 内田選手のキャリア	28
表 11 内田選手インタビュー内容の SCAT 分析.....	35
表 12 原口選手のキャリア.....	48
表 13 原口選手のインタビュー内容の SCAT 分析	54
表 14 大迫選手のキャリア.....	64
表 15 大迫選手のインタビュー内容の SCAT 分析	70
表 16 アマチュア選手時の出身別在籍期間.....	105

第1章 背景

第1節 日本人サッカー選手の海外挑戦

日本人サッカー選手の海外挑戦に関して、かつては中田英寿選手や中村俊輔選手、高原直泰選手、小野伸二選手のように日本代表の主力級の選手に限られた機会であった。一方、近年では、欧州5リーグと呼ばれる（プレミアリーグ、リーガ・エスパニョーラ、ブンデスリーグ、セリエ A、リーグ・アン）以外にも、オランダ、ロシア、ベルギー、ポルトガル、トルコ等様々な国でプレーする機会が増えている。また、日本代表に招集されたことのない若手選手も海外挑戦をする機会が増えており、より多くの日本人サッカー選手の海外挑戦への可能性が広がっている状況である。

第2節 ブンデスリーグ

第1項 ブンデスリーグの概要

外国人枠

ドイツ・ブンデスリーグ（以下、ブンデスリーグ）は 2006-2007 シーズンに外国人枠が撤廃され、登録上の制限がなくなった。但し、ドイツ人枠があり、ドイツ国籍を持つ 12 人(そのうち 6 人はクラブの地元で育成された選手)を登録しなければならない。

ブンデスリーグは 1 部から 5 部リーグまであり、1 部、2 部は各 18 チームが登録されている。2019 年 8 月現在 1 部リーグには 546 名の選手が所属し、そのうち 285 名 (52.2%) が外国籍の選手、2 部リーグには 514 名が所属し、うち 139 名 (27%) が外国籍選手の状況である。このようにブンデスリーグは、外国籍選手に対する間口が広いリーグである。

シーズンと開催試合数

1 部、2 部ともに 8 月から翌年 5 月までの 1 シーズン制で試合数は 34 試合である。

観客動員数

2018-2019 シーズンの 1 部観客動員数平均は 43,467 人であり各国リーグの観客動員数 1 位であった。(表 1)

表 1 欧州 5 大リーグ平均観客数(2018-2019)

順位	リーグ	国	動員数(人)
1	ブンデスリーグ	ドイツ	43,467
2	プレミアリーグ	イングランド	38,188
3	ラ・リーガ	スペイン	27,112
4	セリエ A	イタリア	25,051
5	リーグ・アン	フランス	22,808

第2項 ブンデスリーガにおける日本人選手の活動実績

日本人選手のプレー状況

1977年にFCケルンに移籍した奥寺康彦選手がブンデスリーガでプレーした最初の日本人選手である。ヘルタ BSC、ヴェルダー・ブレーメンでのプレーを含め 1986 年まで 9 年間ブンデスリーガに在籍した。1983 年に尾崎加寿夫選手がアルミニア・ビーレフエルトに移籍した。

1987 年に風間八宏選手が 2 部リーグの LL Niederrhein-Gr. 1 へ移籍するまで 2 部リーグへ移籍する日本人選手はいなかった。

その後 2002-2003 シーズンまで日本人選手のブンデスリーガへの移籍は無かったが、2003 年に高原直泰選手がハンブルガーSVに移籍した。2007-2008 シーズンになると長谷部誠選手（以下、長谷部選手）、稲本潤一選手、小野伸二選手が移籍、1 部リーグ登録の日本人選手は 4 名となり、徐々に日本人の登録選手が増加した。日本人選手が最も多かったのは 2014-2015 シーズンの 15 名（1 部リーグ 13 名、2 部リーグ 2 名）であった。

このようにブンデスリーガは欧州 5 大リーグのひとつであり、世界中からトップレベル選手がプレーをしている。2000 年代に入ってから 41 人と増えており欧州 5 大リーグの中で最多のリーグある。（2018-2019 年シーズン終了時現在）。

ブンデスリーガにおける日本人選手の成績

また人数だけでなく長谷部選手が 2008-2009 年シーズン、ブンデスリーガ優勝を経験したり、香川真司選手（以下、香川選手）が 2011 年に優勝し上半期の MVP 選手に選出されたり、現在も日本代表選手である大迫勇也選手をはじめとし日本人選手の活躍は目覚ましい。

第3項 日本サッカー界におけるブンデスリーガの重要性と課題

日本サッカー界の発展に選手個人のレベルアップが不可欠であり欧州リーグでの成功は今や必須条件であるが、このような輩出人数や実績からもブンデスリーガでの活躍する選手を増やすことが重要であるのではないだろうか。

しかし、ブンデスリーガへ移籍した選手の全てが活躍できるわけではない。日本国内でトップレベルのパフォーマンスを発揮し、日本代表での主力としてプレーしていた選手でも、ブンデスリーガで結果を残すことができず、志半ばで帰国する選手も少なくない。

第3節 筆者の立場と問題意識

第1項 大学卒業後ブンデスリーガでプレー

筆者は2013年に大学選抜のドイツ遠征をきっかけにJリーグを経験せず、22歳でブンデスリーガのFCケルンというチームで3シーズンプレーし、2016年浦和レッズに移籍した。

筆者は大学所属のアマチュア選手であったこともあり、既にドイツでプレーしている日本人選手たちとの繋がりもなく、ブンデスリーガ移籍直後は何に気をつけるべきかなど事前の情報がほとんどなく全てが手探り状態であった。ケルンへの加入が決定してからドイツへ渡る期間が非常に短く、渡独後の住居も決まっておらず、当初はケルン体育大学の寮に宿泊し、生活環境の準備をしながら練習に参加していた。チーム加入後もチームメイトや監督との関係作りや、チームのサッカーに馴染むことにも非常に苦勞をした。ブンデスリーガでのプロサッカー選手のキャリアをスタートすることになったが、プレーの面もさることながら、プレー以外の面での環境に馴染むことに大変苦勞をした。このような経験は私自身に限ることかと考えていたが、同時期にブンデスリーガで活躍した選手も同様に苦勞を経験していることが分かった。

日本サッカー界の発展の為には、ブンデスリーガのように世界のトップレベルのリーグで活躍する日本人選手を増やすことが重要であるが、上述したように、多くの日本人サッカー選手がブンデスリーガでプレーしているにも関わらず、知識や経験が蓄積されておらず、ピッチの内外での齟齬により本来の実力が発揮されず、不本意な結果に終わることを未然に防ぐための整理が必要であると感じている。

第4節 先行研究

ブンデスリーガに関する研究は、三浦ら（2012）は、ブンデスリーガ監督のステップアップについて述べており、釜崎（2017）はブンデスリーガの基本構造とRBライプツィヒで、ブンデスリーガに関してスポーツビジネスの観点から述べている。

また、日本プロサッカーリーグ（以下、Jリーグ）に関する研究では、Jリーグのホームグロウン制度導入に際するJクラブユースと高校および大学の育成環境について、能智ら（2016）は、「Jリーグは、高校や大学といった特徴的な選手育成の環境を持っている。」また「日本は大学が重要な育成機関である」と述べている。

また、海外移籍に関しては、高橋（2004）が海外移籍に関する心理的要因、技術・適応能力的要因、社会・制度的要因について分析を行っている。栗山（2013）は、より多くの日本人選手が、欧州において最もレベルの高いリーグでプレーする状況を実現するために、いずれのリーグを最初の海外移籍先とすべきかを明らかにしている。

一方、Richardson ら（2012）が、その国のサッカースタイルへの適応のみならず、文化的適応の重要性を主張している。以上のように、ビジネスサイドまたは、適応能力的な要因についての内容は明らかになっているが、海外でプレーした選手の経験は個別の情報に留まっている状況である。また、Ivon Carballo は海外へ移籍した動機について報告しているが、移籍先で活躍するための指針を目的にした研究は見当たらない。

第5節 目的

本研究の目的は、日本人選手がブンデスリーガで活躍するための移籍の準備段階及び移籍後において、必要となる知識と対策を明らかにすることである。

第2章 手法

第1節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手全41名の調査

第1項 調査対象

2000年以降のブンデスリーガ所属日本人選手41名

第2項 対象データ

対象者は2000年以降ブンデスリーガでプレーした全41選手で、調査内容は平均出場時間、海外移籍時の年齢、デビュー戦までの日数、在籍期間、これらのデータを在籍期間が3年以上の選手（n=21）と3年未満の選手（n=20）で比較した。

第2節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手のインタビュー調査

第1項 対象者

ブンデスリーガで3年以上プレーした選手のうち細貝萌選手（以下、細貝選手）、内田篤人選手（以下、内田選手）、原口元気選手（以下、原口選手）、大迫勇也選手（以下、大迫選手）の4名から協力を得られた。

細貝萌選手

細貝選手は、1986年6月10日生まれで、中学時代はFC前橋ジュニアユースに所属し、3年次にはU-15日本代表に選出された。前橋育英高校在学中にU-16、U-17、U-18に選出された。2年次にはAFCアジアユース選手権、全国高校選手権出場し、静岡国体準優勝している。2005年に浦和レッドダイヤモンズに入団しプロサッカープレイヤーとなり、その後、2011年にブンデスリーガのチームに移籍した。細貝選手は日本ではミッドフィルダーとして試合に出場していたが、ドイツではミッドフィルダー以外にもサイドバックやセンターバックでも起用されていた。公表されている身長は177cm、体重69kg、利き足は右足である。

内田篤人選手

内田選手は、1988年3月27日生まれで、中学時代は函南町立函南中学校、高校は清水東高校、2006年に鹿島アントラーズに入団しプロサッカープレイヤーとなり、その後、2010年にブンデスリーガのチームに移籍した。ポジションはディフェンダー。公表されている身長は176cm、体重67kg、利き足は右足である。

原口元気選手

原口選手は、1991年5月9日生まれで、6歳から12歳は江南南サッカー少年団に所属し、2004年から浦和レッズジュニアユース、2007年から浦和

レッズユースに所属、2008年に浦和レッズダイヤモンドズに入団しプロサッカープレイヤーとなり、その後、2014年にブンデスリーガのチームに移籍した。ポジションはウィンガー。公表されている身長は177cm、体重68kg、利き足は右足である。2006年にU-16日本代表に選出され、その後U-18, U-19, U-20, U-22, U-23日本代表に選出、2011年に日本代表に選出された。

大迫勇也選手

大迫選手は、1990年5月18日生まれで、中学は鹿児島育英館中学校サッカー部に所属、高校では鹿児島城西高校サッカー部に所属し、U-16に選出された。第87回全国高等学校サッカー選手権大会において大会最多得点(10得点)記録を樹立した。

長澤和輝選手

長澤和輝選手（以下、長澤選手）は、1991年12月16日生まれで、中学時代は三井千葉SC、高校では八千代高校サッカー部に在籍、その後専修大学サッカー部では関東大学リーグ三年連続優勝を果たし、大学生アマチュア選手としては初めてブンデスリーガへの移籍を果たす。身長は172cm、体重72kg、利き足は右足である。プロとしての所属チームは、2013-2015年はドイツ1.FCケルン、2016年はジェフユナイテッド市原・千葉、2017年からは浦和レッドダイヤモンドズに所属した。(表2)。

表2 長澤選手のキャリア

チーム名	国	所属シーズン
FC ケルン	ドイツ	2013-2015
ジェフユナイテッド 市原・千葉	日本	10/11-17/18
浦和レッドダイヤモンドズ	日本	17/18-

第2項 インタビュー調査内容

インタビューガイドは、①選手：移籍の経緯・チーム選択の基準、チーム加入後に意識すること、②代理人・コーチ：ブンデスリーガの特徴、海外クラブが日本人選手に求めるものとした。

第3項 SCAT分析によるストーリーラインの作成と共通点の抽出

分析には、大谷(2008a, 2008b, 2011)が開発した質的データ分析手法の SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。SCAT による分析の特徴は、比較的小規模な質的データ分析にも有効であり、分析の過程が四つのステップで明示的に残し、意味の繋がりを持ったストーリーラインを記述すること可能である。本研究では、各選手のインタビュー結果を SCAT 分析の手法に則り、各選手の海外挑戦の要点をストーリーラインにまとめ、更に各選手のストーリーラインから共通する事項をまとめた。

第4項 結果の検証

香川選手へのインタビュー調査及び高原直泰選手(以下、高原選手)、長谷部選手、酒井高德選手(以下、酒井選手)、岡崎慎司選手(以下、岡崎選手)、清武弘嗣選手(以下、清武選手)、乾貴士選手(以下、乾選手)の海外挑戦に関する文献調査を行い、SCAT 分析によって抽出された共通項と香川選手はじめとする他の選手の認識との整合性を取ることで論の補強を行った。

第3節 ブンデスリーガに精通した日本人代理人・コーチのインタビュー調査 代理人 A 氏

多くの日本代表選手を担当し、ドイツのクラブはもちろんヨーロッパの各国クラブとの交渉も豊富に経験している日本人代理人。

コーチ T 氏

ドイツで15年以上の指導経験を持ち、ドイツサッカーに精通しているブンデスリーガクラブのコーチ

インタビュー内容

①選手：移籍の経緯・チーム選択の基準、チーム加入後に意識すること、②代理人・コーチ：ブンデスリーガの特徴、海外クラブが日本人選手に求めるものとした。③近年のブンデスリーガの特徴等

第4節 倫理的配慮

インタビュー対象者には、個人情報保護、公表の方法について説明を行い、同意を得た上でインタビューを実施する。また、インタビューした内容を論文にする前に対象者の承認を取り、公表の範囲の合意を得ることとする。

第3章 結果

第1節 ブンデスリーガでプレーした日本人選手全41名の調査

第1項 ブンデスリーガ所属日本人選手全41名の試合出場状況

表3はブンデスリーガ所属日本人選手41名の試合出場状況を、10試合ごとに区切り、全体、3年未満、3年以上で分類をしたものである。3年未満の選手は出場試合数が10試合以下の選手が14名おり、最も多く試合に出場した選手も50試合以下が2人の状況である。3年以上プレーしている選手は、30試合以下の選手が2名、50試合以下の選手が1名いるものの、60試合以上出場している。

表3 ブンデスリーガ所属日本人選手41名の出場試合数

出場時間	全体	3年未満	3年以上
～10試合	14	14	0
～20試合	2	2	0
～30試合	4	2	2
～40試合	1	1	0
～50試合	3	2	1
～60試合	1	0	1
～70試合	1	0	1
～80試合	0	0	0
～90試合	3	0	3
～100試合	1	0	1
～110試合	2	0	2
～120試合	2	0	2
～130試合	1	0	1
～140試合	2	0	2
～150試合	1	0	1
～160試合	0	0	0
～170試合	0	0	0
～180試合	0	0	0
～190試合	1	0	1
～200試合	0	0	0
201試合～	2	0	2
合計	41	21	20

表 4 は、ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の試合出場状況を、出場時間数で 450 分毎に区切りまとめたものである。3 年未満の選手は 450 分以下の選手が 15 名つまり 5 試合分にも満たない時間しかプレーできていない。一方 3 年以上プレーした選手で 3601 分以上プレーしている選手が 16 名おり、40 試合分以上プレーができている状況であった。

表 4 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の出場時間数(延べ)

出場時間	全体	3年未満	3年以上
～450分	15	15	0
～900分	1	1	0
～1350分	2	1	1
～1800分	3	2	1
～2250分	1	0	1
～2700分	0	0	0
～3150分	3	2	1
～3600分	0	0	0
3601分～	16	0	16
合計	41	21	20

表 5 はブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の試合出場状況を、15 分ごとの平均出場時間でみたものである。3 年以上プレーしている選手は 60 分以下 5 名、75 分以下 7 名、90 分以下 7 名おり前半からスターティングメンバーとして試合に出場していることが分かる。一方 3 年未満の選手は、15 分以下が 3 名、30 分以下が 6 名おり途中出場が多いことが分かる。ただし 60 分以下が 4 名、75 分以下が 5 名おりスターティングメンバーとして試合に出場できている選手もいた。

表 5 ブンデスリーガ所属日本人選手 41 名の平均試合出場時間

出場時間	全体	3年未満	3年以上
～15分	3	3	0
～30分	6	6	0
～45分	2	1	1
～60分	9	4	5
～75分	12	5	7
～90分	9	2	7
合計	41	21	20

第2項 ブンデスリーガ所属日本人選手全41名のポジション

表6はブンデスリーガ所属日本人選手全41名をポジション別にまとめたものである。3シーズン以上在籍した選手のポジションは9名（45%）がフォワード、7名（35%）がミッドフィルダー、4名（20%）がディフェンダーで対象選手全体の割合と大きな差はなかった。在籍3シーズン未満の選手の場合はフォワードが8名（38%）、ミッドフィルダーが9名（43%）、ディフェンダーが4名（19%）でミッドフィルダーの割合が多かった。

表6 ブンデスリーガ所属日本人選手41名のポジション

ポジション	全体	3年未満	3年以上
フォワード	17	8	9
ミッドフィルダー	16	9	7
ディフェンダー	8	4	4
ゴールキーパー	0	0	0

第3項 ブンデスリーガ所属日本人選手全41名の移籍からデビュー戦までの期間

表7は、ブンデスリーガ41人のデビューと出場記録をまとめたものである。

表7 ブンデスリーガ所属日本人選手41名のデビューと出場記録

項目	全体	3年未満	3年以上
平均出場時間（分）	70	52	72
移籍時の平均年齢（歳）	23	23.1	22.8
デビュー戦までの平均日数（日）	65	82	47
平均在籍期間（年）	3.2	1.3	5.2

出場時間

3シーズン以上在籍した選手20名の1試合の平均出場時間は72分で全体の出場平均時間と大きな差異はなかったが、在籍シーズンが3シーズン未満の選手の1試合の平均出場時間は52分であった。

3シーズン以上在籍した選手の移籍時の平均年齢は22.8歳で、3シーズン未満在籍選手の移籍年齢は23.1歳でどちらも全体の平均年齢と差異はなかった。3シーズン以上在籍した選手の平均在籍期間は5.15シーズンであった。在籍期間が一番長いのは長谷部選手の12シーズンで3シーズン以上在籍した20選手のうち13名（65%）が4年以上在籍していた。それに対し、3シーズン未満の選手の平均は1.33シーズンで、1シーズンのみ在籍選手が14名（66%）であった。3シーズン以上在籍した選手の移籍からデビュー戦までの平均日数は47日だったのに対し、3年未満の選手の平均日数は82日だった。

第2節 日本人選手のインタビュー調査

第1項 細貝選手

1) プロフィールとブンデスリーガでの活躍の概要

プロとしての所属チームは、2005-2010 年は日本の浦和レッドダイヤモンズ、2011-2012 シーズンはドイツの FC アウクスブルク、2012-2013 バイエル 04 レバークーゼン、2013-2015 はヘルタ BSC ベルリン、そしてヘルタ BSC ベルリンからのレンタル移籍で、2015-2016 はトルコのブルサスポルでプレーした。翌年には再びブンデスリーガに復帰し、2016-2017 は VfB シュトゥットガルトに所属した（表 8）。

表 8 細貝選手のキャリア

チーム名	国	所属シーズン
浦和レッドダイヤモンズ	日本	2005-2010
FC アウクスブルク	ドイツ	10/11-11/12
バイエル04レバークーゼン	ドイツ	11/12-12/13
ヘルタBSCベルリン	ドイツ	13/14-14/15
ブルサスポル	トルコ	15/16
VfBシュトゥットガルト	ドイツ	16/17
柏レイソル	日本	2017-2018
ブリーラム・ユナイテッドFC	タイ	18/19-

シーズンごとの出場時間と出場試合数

1 年目は冬の移籍市場で FC アウクスブルクに移籍し、ブンデスリーガ 2 部で 7 試合出場、出場時間の合計は 491 分だった。2 年目は FC アウクスブルクがブンデスリーガ 1 部に昇格し、1 部で 1 シーズンプレーした。32 試合に出場、出場時間の合計は 2727 分だった。3 年目は 1 部レバークーゼンにレンタルバックという形での移籍をし、17 試合出場、出場時間合計 874 分だった。4 年目は 1 部ヘルタ・ベルリンに移籍をし、33 試合出場、出場時間合計は 2881 分だった。5 年目も引き続きヘルタ・ベルリンでプレーをし、20 試合出場、出場時間合計 1431 分だった。6 年目はレンタルという形でトルコ、

ブルサスポルへ移籍、7年目はVfBシュトゥットガルトへ移籍をし、10試合出場、出場時間合計597分だった（図1）。

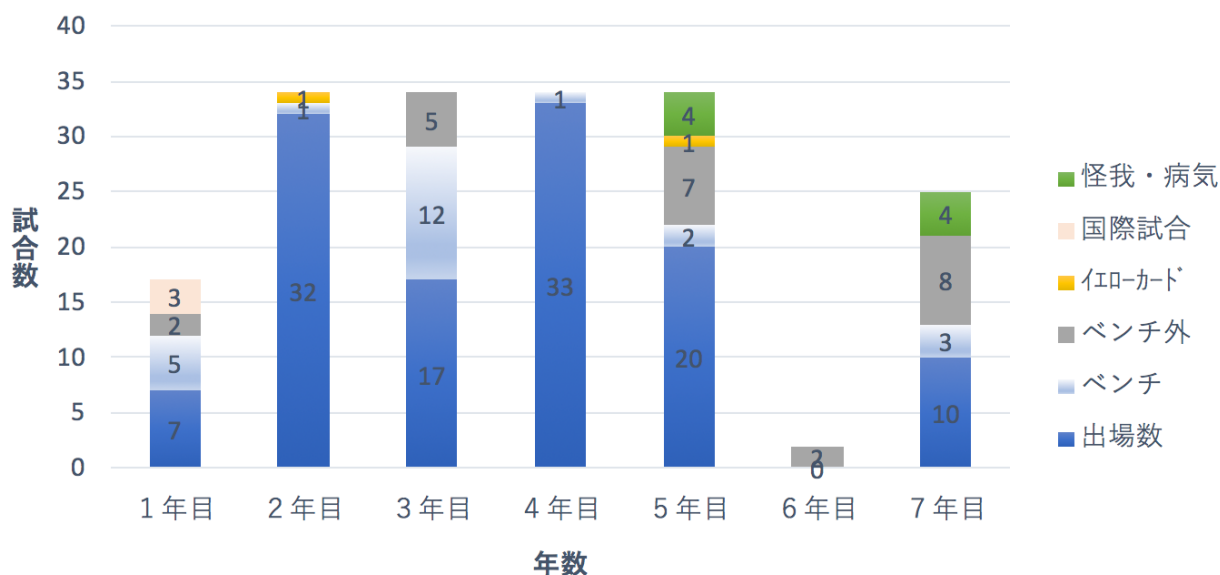


図1 細貝選手 出場・欠場理由

ブンデスリーガでの活動状況

細貝選手は7年在籍し、6年目の1年間はトルコへのレンタル移籍をしていた。ブンデスリーガでの6年間のうち在籍したチームは4チームで関わった監督は5名（うち2名は共同監督）だった（図2）。

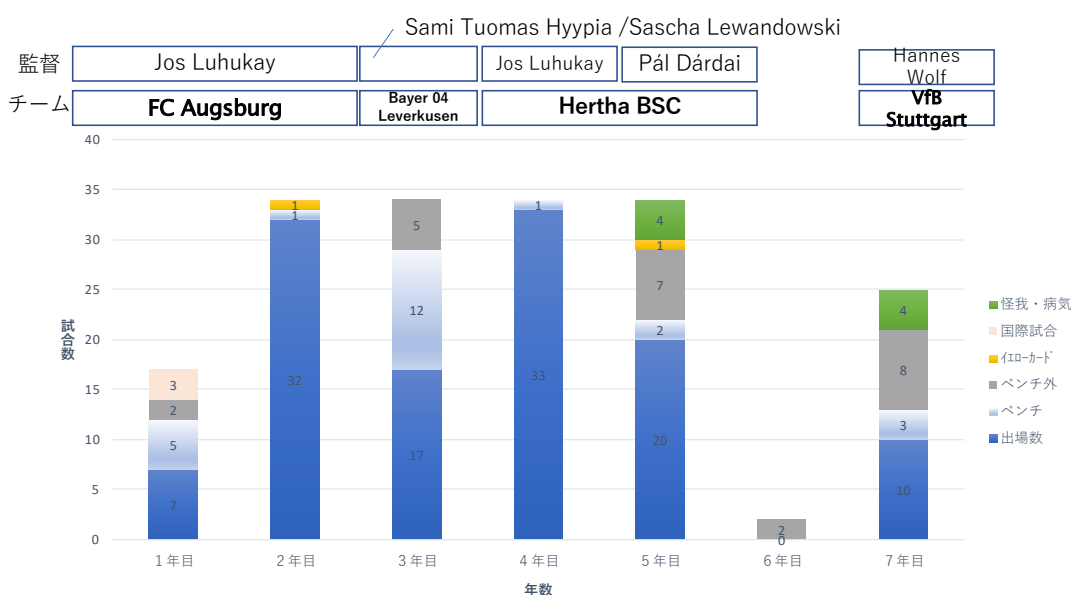


図2 細貝選手 チーム・監督別出欠場比較

インタビュー結果

以下に各年の試合の出場状況の監督との関係や身体状況などの量的データと本人のインタビューで語った内容を記述する。

最初のシーズンは合流が遅れたということもあり、試合に出ることができなかった。しかし監督は評価してくれていたという。1 シーズン目は半分くらいしか試合に絡めていないが、監督の信頼を感じていることもよかった点だ。このコメントを反映するように、細貝選手が移籍後初めて試合に出たのは、移籍から約 15 日後で、後半の 4 試合にはフル出場している試合もある。しかしながら、ベンチ入りしていない試合も 2 試合あり出場機会は多くはなかった。

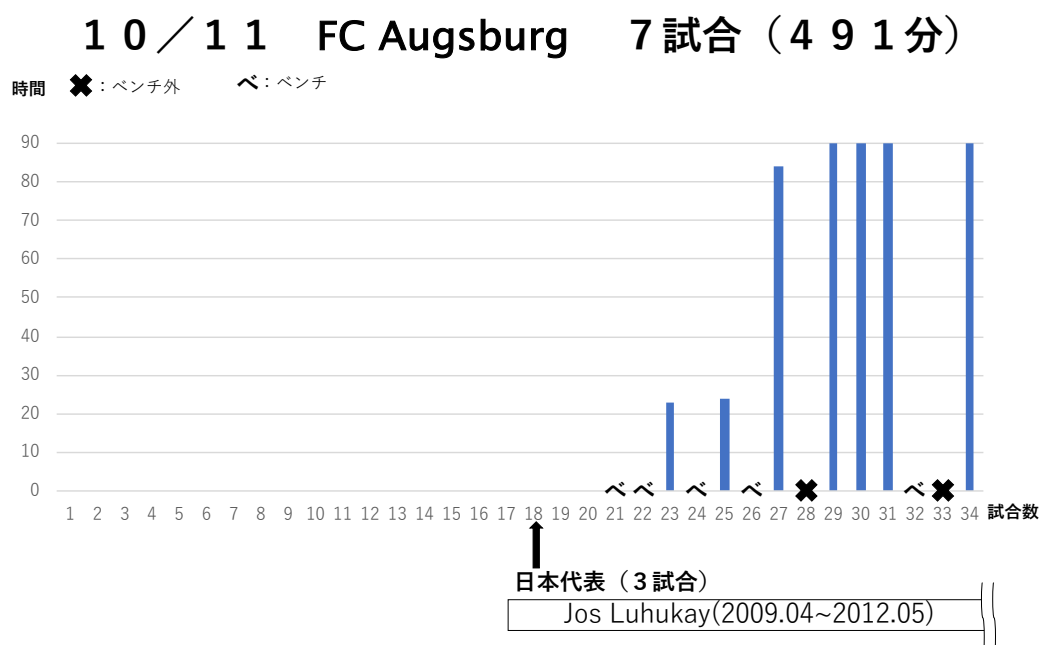


図 3 細貝選手 10/11 シーズン出場時間

2 シーズン目は、チームとしても初のブンデスリーガ 1 部ということもあった。このシーズンはほぼスターティングメンバー (以下、スタメン) として試合に出場している。1 シーズン目に監督が言っていた 1 部に上がったらず活躍できるという言葉通りの結果となった。監督は諦めず真面目にするタイプの選手を好むということもあり、細貝選手のプレースタイルを非常に好んだと思われる。また本人も監督との相性に恵まれたというように、移籍直後にすぐいい監督との出会いがあった。通訳を付けなかったことも監督の助言を聞いてのことであった。こういった姿勢からも監督は、若い時の自分を細貝選手に投影しており彼自身が印象をあげた要因となったようだ。

11 / 12 FC Augsburg 32 試合 (2727分)

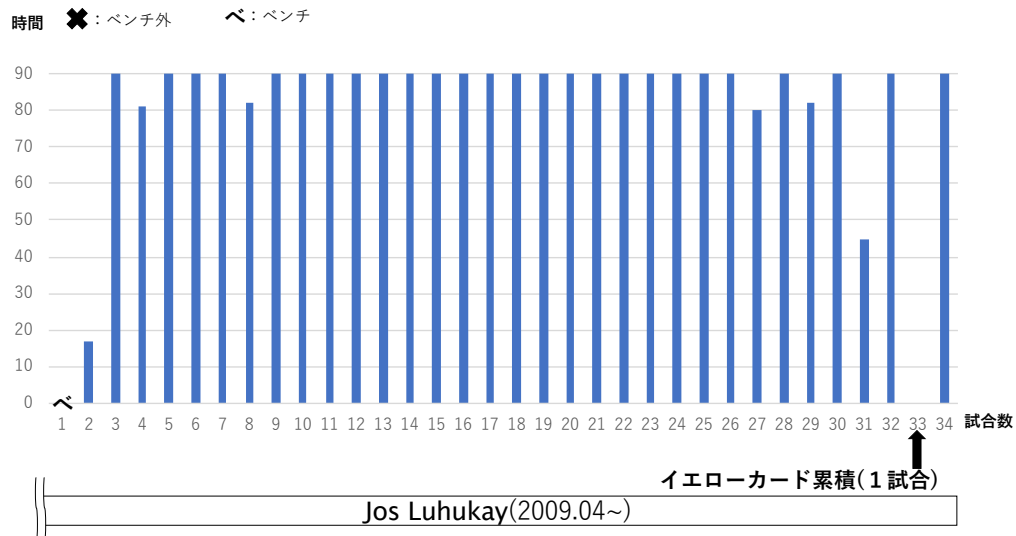


図 4 細貝選手 11/12 シーズン出場時間

その後 3 シーズン目はレバークーゼンにレンタルバックを果たしている。しかし当時のレバークーゼンはレベルの高い選手も多く在籍しており、チーム順位も高く、上位チームであった。したがって自ずと出場機会は減少していった。監督とのコミュニケーションという点に関しても、当時二人が監督を一緒に行うような状況であり、どちらの監督にフォーカスしてプレーすればいいかわからないという問題を感じていた。レバークーゼンでは出場はサイドバックがほとんどだった。サイドバックで出場していた選手が怪我をしたということが出場に繋がったが、その選手が復帰を果たすと、また出場機会に苦しんだ。

1 2 / 1 3 Bayer 04 Leverkusen 1 7 試合 (8 3 7 分)

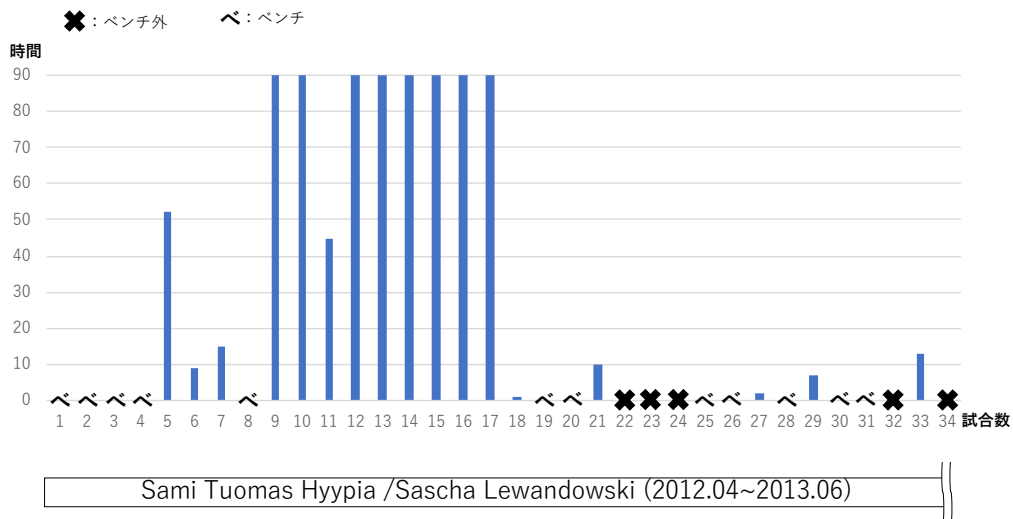


図 5 細貝選手 12/13 シーズン出場時間

4 シーズン目は、レバークーゼンに残るという選択肢もあったが、結局はヘルタ・ベルリンに移籍をした。レバークーゼンからもチームへの残留を希望されており、チームとしてもチャンピオンズリーグもあるということで、そういった部分は選手としては非常に価値を感じる。しかし、アウグスブルグでも一緒に仕事をしたルフカイ監督からの誘いであったために移籍を決断した。実際に監督から信頼されて、起用されるということは選手としても非常に誇らしいことであり、そういった部分を考慮して移籍を決断する選手は多くいるのが現状でもある。監督としても一緒に仕事をした信頼のおける選手がチームにいとやりやすいということもある。ベルリンでは複数のポジションをこなしていたが、どのポジションでも監督からの信頼を感じており、高いモチベーションにも繋がっていた。

1 3 / 1 4 Hertha BSC 3 3 試合 (2 8 8 1 分)

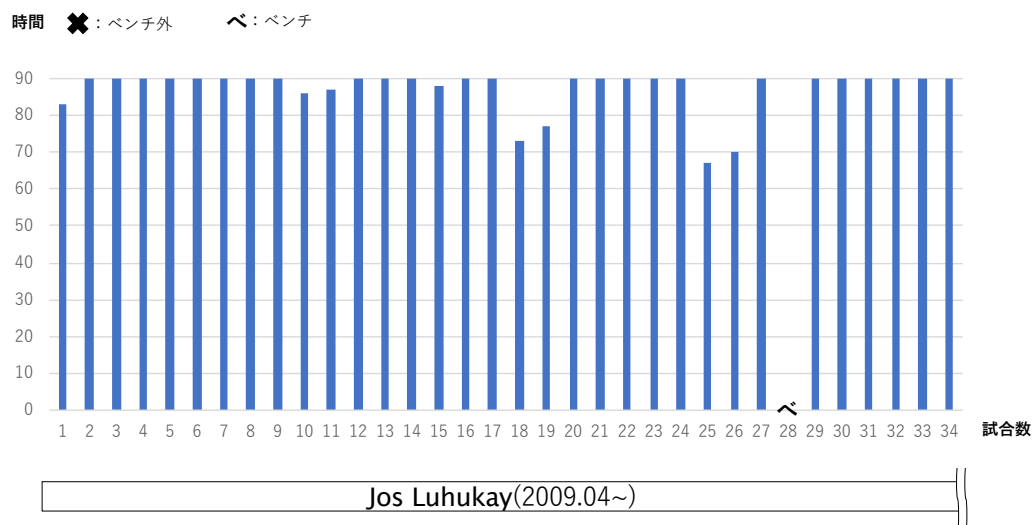


図 6 細貝選手 13/14 シーズン出場時間

その後ダルダイ監督に変わってからは、練習を見ることもほとんどない状態でスタメンを外されてしまった。チームの流れを変えるという意味もあったようだが、細貝選手としては監督へのフラストレーションを強く感じる状況になってしまったと言える。本人も述べるように監督からの評価や信頼が直接プレーに影響してしまっていた。そういった意味では監督の評価や信頼が大きく選手のパフォーマンスに影響している。

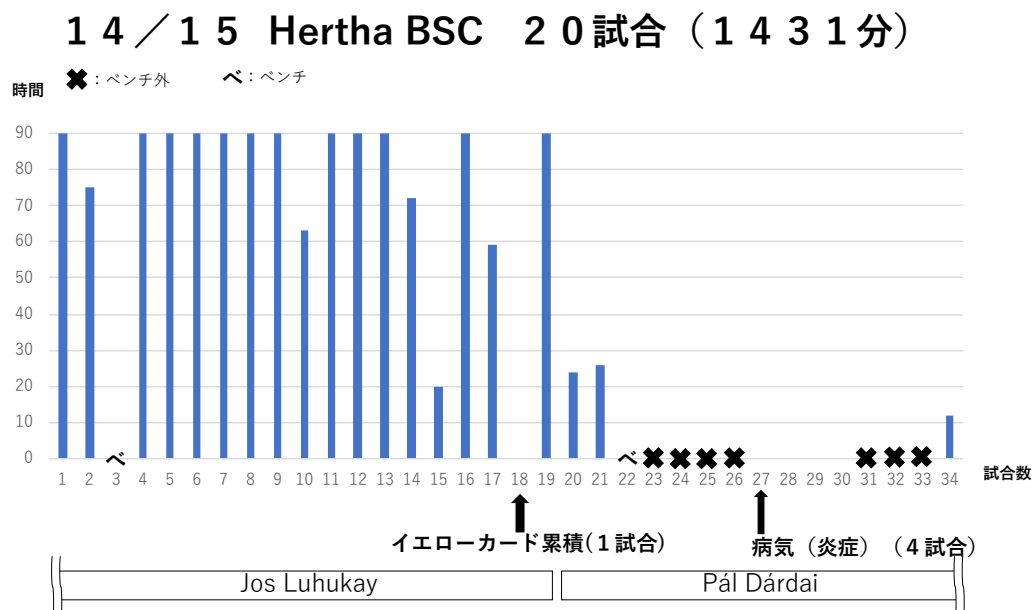
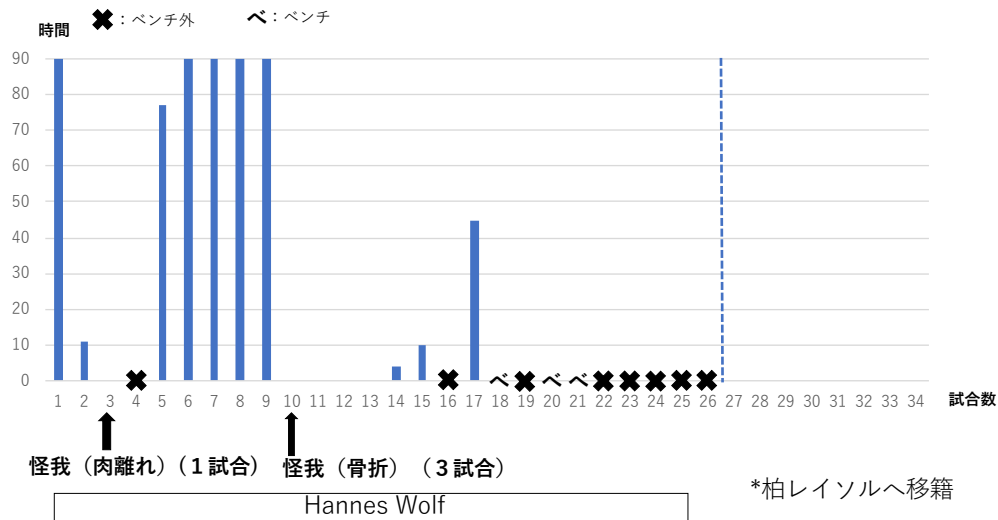


図 7 細貝選手 14/15 シーズン出場時間

その後、トルコへの1年間のレンタル移籍を挟み、翌年再度ヘルタ・ベルリンでシーズン前のキャンプに参加するが、監督も同じということもあり、やはり状況は変わらなかった。前チームでもいい関係を築けていたルフカイ監督から直々にオファーをもらいそのシーズン開幕前にシュツットガルトへの移籍を果たしている。しかし、結局シーズン開幕前にルフカイ監督はチームとの方向性の違いで辞任してしまい、出場機会を減少させた。

1 6 / 1 7 VfB Stuttgart 1 0 試合 (5 9 7 分)



*Jos Luhukay監督から直接オファーを受け移籍したが開幕前に方向性の違いから辞任

図 8 細貝選手 16/17 シーズン出場時間

細貝選手も移籍の重要な点として監督との関係が大切であると述べている。

ドイツでのシーズンを振り返ると、ルフカイ監督との出会いが出場機会に繋がったといっても過言ではないくらいに重要な点であると言える。また監督との関係性が自分のパフォーマンスに影響を及ぼすという細貝選手の特徴も、ルフカイ監督のいるチームへの移籍に関係している。

2) インタビュー内容の SCAT 分析

細貝選手のインタビュー内容をストーリーラインで示すと以下の通りであった。

細貝選手は<チーム加入前に監督との話し合い>の機会があり<信頼できる監督>の下でプレーできる確証が得られたことから移籍を決断し、実際に移籍後も試合出場機会を得ていた。また、複数の監督の下でプレーをしたが試合機会を得る為に<自分のプレースタイルを客観的に把握>し本職はボランチだがサイドバックでプレーする等<臨機応変に監督の求めるプレーをすること>を心がけた。他チームへの移籍先もルフカイ監督がいるチームへの移籍を希望し<監督との相性>をチーム選びにおいて重要視していた。

ストーリーラインを生成につながつた SACT 分析の内容を表 9 に示す。

表 9 細貝選手インタビュー内容の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念	〈5〉疑問・課題
1	聞き手	最初に行ったチームは？					
2	細貝選手	レバークーゼンと契約をされていて、しかし、すでに契約をしているボランチがいて、正直言って、日本人の評価が上がっているタイミングで移籍が決まった。ボランチの人数はすでにオーバーしていたけど、それでも取りたいと言ってきて、レンタルで行ったって感じだね。	ボランチの人数はすでにオーバーしていたけど、それでも取りたいと言ってきて	選手の数には足りているにも関わらず獲得したいという熱意	レバークーゼンが獲得したいという熱意を感じる	獲得したいという強い熱意	
3	聞き手	監督はルフカイですよね？					
4	細貝選手	アジアカップへ行ってから合流したから、冬の移籍だったので結構遅れての合流だった。なので最初は試合に出ることはできなかったし、しかし、監督が評価してくれていたの、それが長く在籍していた理由かな。この監督との相性は本当に重要だと思っている。初めて、アウクスブルグが1部に上がってね、その時期に1部で1シーズン戦って、1部に残ったんだけど、そこで方針の違いにより、ベルリンに引き抜かれて移籍した。私は、そのタイミングでレバークーゼンから戻るように言われて、戻った。2部の終盤になって使ってもらえるようになった。しかし、監督からは、1部に昇格したら、プレーのスタイルとして活躍できる、と言われててね。いやいや、2部でも使ってもらえないのに、1部に昇格した時に活躍できるわけがないと思ってね、だから、この監督は言ってるんだと思っていたら、1節1試合は出られなかったけれど、それ以降は試合に出ることができてね。もちろん調子も良くてずっと使ってもらえた。	監督が評価してくれていたの、それが長く在籍していた理由、監督からは、1部に昇格したら、プレーのスタイルとして活躍できる、と言われてね	監督の評価の高さがチームへの在籍期間に関与、監督の言葉が1部昇格した後に実現、監督との関係がより強固に	監督との関係が在籍年数に影響、監督のアドバイスが実現	監督との関係性、在籍年数に関与	
5	聞き手	ルフカイ監督の特徴や好みはありましたか？					

6	細貝選手	好みというより、戦術がどうというよりは、ハートをベースにする感じの監督だった。諦めず、真面目にする選手を好む監督だった。監督自身のプレースタイルも同様だった。「昔の俺に似ている」と監督に言われたことがあってね、なのでプレースタイルなのか、なんなのか、監督との相性に恵まれたよね。	「昔の俺に似ている」と監督に言われたことがあってね	監督の求めるタイプの選手、監督の昔のプレースタイルと似ている点も多かったことが、評価に繋がっていた	監督の求めるタイプの選手、プレースタイルが似ている監督との出会い	プレースタイルが似ている監督との出会い
7	聞き手	プレースタイルの変化は？				
8	細貝選手	プレースタイルの変化はほとんど意識をしていなかったね。それよりもコンディションが悪く、アジアカップで優勝してから参加という形だったけれど、アジアカップは途中から出場で、アウクスブルグへ合流しても、言葉もわからず、1月だったので寒かったし、環境に適應できず、自分の良さを出せなかった。	コンディションが悪く、言葉もわからず、1月だったので寒かったし、環境に適應できず、自分の良さを出せなかった	移籍直後にコンディションがうまく整えられないと出場機会獲得に時間がかかる。	コンディションの重要性	コンディションの調整と出場機会との関係性
9	聞き手	通訳はいなかった？				
10	細貝選手	ピッチでは通訳をつけなかった。書類等の事務的なサポートでは語学のわかる人に介入してもらった。監督は「コミュニケーションは大変だろうけれど、通訳がいない方が君のためになる」と言われた。通訳がいない方が、選手のためにはなるという考え方。なので、今まで通訳をお願いしたことがない。タイでも通訳はつけていない。トルコの時はチームに5ヶ国語を話せる通訳が2人いて、その通訳が外国人選手たちをサポートする感じ。英語とトルコ語との会話だけれどね。ドイツでは通訳は一人もいなかったから、長期的に考えると私にとっては良かった。短期的に考えると、早急に戦術を理解して早く自分のアピールをしないといけないけれどね。	ピッチでは通訳をつけなかった、長期的に考えると私にとっては良かった、短期的に考えると、早急に戦術を理解して早く自分のアピールをしないといけないけれどね	チーム加入後は戦術理解やアピールが重要であるが、チームの中でコミュニケーションを取れるようになるには通訳の存在は必要ない。	通訳を付けないメリット	通訳は必須ではない

11	聞き手	アウグスブルグは3 2 試合出場していて、ほぼスタメンですが、レバークーゼンは最初に出場して、しかし中盤に出られなくなった時期がありますが、その時期はどのような感じでしたか？				
12	細貝選手	監督はザシャとサミーとの2 人の監督で行うスタイルだった。ミーティングを行う監督がその日によって異なる。しかし、どちらの監督の評価を意識していけばいいのか混乱した。	ミーティングを行う監督がその日によって異なる。しかし、どちらの監督の評価を意識していけばいいのか混乱した。	チーム体制が一貫していないと選手にも混乱が生じる。	監督が二人存在することで生じる混乱	監督の重要性
13	聞き手	具体的には、どのようなことを意識していた？				
14	細貝選手	戦術がしっかりしていた、ボランチは外に開かないといけないなど、ポジショニングの指示が細かかった。普段は左サイドからはあまり出ないんだけど、左サイドバックから多く出場した。左で出て、活躍して連勝してから、ずっと使ってもらっている。折り返し時点でもととの左サイドバックの選手たちが復帰して、そこからは、フェイドアウトしていった感じだった。	左で出て、活躍して連勝してから、ずっと使ってもらっている	サイドバックでの出場	活躍することで出場機会の獲得、ポジションの確率	活躍することの重要性、出場機会・ポジションの獲得
15	聞き手	その時の中心選手は？				
16	細貝選手	カストロ、ラース・ベンダー、キースリング、オルフェスなど。ベテランばかりだった。シュレーレンもいたからね。本当にレベルの高い選手ばかりで能力の高い選手が多かった。				
17	聞き手	その後はベルリンへ行ったの？				

18	細貝選手	レバークーゼンとの契約も残っていたから残ることを推してくれていたが、ベルリンにいるルフカイから使う、使わないは別として、どうしても欲しいと電話で言われた。アウクスブルク時代のプレーをしてくれたらいいと。電話でそのように懇願してくれたことは今でも覚えているね。 アウクスブルグ時代はほぼ言葉がわからず、その後レバークーゼンへ行ったが、その時はチームメイトからはアウクスブルクにいた選手ということで、ドイツ語で話されることばかりで、やっとドイツ語に慣れてきて、そんなタイミングでベルリンへ行って1年間話していなかったルフカイ監督と久しぶりに会話をしてみたら、監督とこんなにも話せるようになったって嬉しかったね。このころからドイツ語がやっと話せるって感じになってきたかな。	どうしても欲しいと電話で言われた。アウクスブルク時代のプレーをしてくれたらいいと。電話でそのように懇願してくれたこと、	監督の評価がチームを移籍する際の判断に大きく関わっている。監督との直接のコミュニケーションの重要性。監督との人間関係が構築されている、監督の信頼を感じる	監督からの獲得したいという熱意、監督との信頼関係の確立	特定の監督との出会い
19	聞き手	この時期のベルリンは何位だった？				
20	細貝選手	ベルリンは2部から1部に上がってきた時期。その後1年で降格してね、また、その1年後に昇格した。その時期のベルリンでは主力選手は、トーマスクラフト。ロニーというブラジル人がいたり・・・そこまで有名な選手はいなかったかな。ブンデスでも目立つ選手はいなかった。何よりもルフカイとの信頼関係がとても偉大だった。だからベルリンへ行ったという感じだった。 もしルフカイ監督からのオファー出なければ、レバークーゼンに残っていたと思う。レバークーゼンでも評価はしてくれていたしね。チャンピオンズリーグもあったしね。	ルフカイとの信頼関係がとても偉大だった。だからベルリンへ行ったという感じ、ルフカイ監督からのオファー出なければ、レバークーゼンに残っていたと思う	レベルの高いチームでのプレーより監督との信頼関係の方が、優先順位が上である。	監督との信頼関係が最優先	特定の監督との出会い
21	聞き手	ベルリンでのポジションは？				

22	細貝選手	ベルリンの時はほとんどボランチで、怪我で欠場する選手がいれば、スライドしてセンターバックをしたりしていた。どのポジションでも監督が評価してくれているから、どのポジションでも出してくれるし、監督の期待に応えなきゃという思いで頑張っていた。	どのポジションでも監督が評価してくれているから、どのポジションでも出してくれるし、監督の期待に応えなきゃという思いで頑張っていた。	監督への信頼が良いプレーへのモチベーションの一つとなっていた。	監督からの絶対的な評価	特定の監督との出会い
23	聞き手	次のシーズンでは？				
24	細貝選手	そのままルフカイ監督のもと同じように試合に出ていたが、折り返しの時点で監督が変わって、変わって2試合目以降はダルダイとは合わなくて全くだった。前監督のお気に入りだったので、新監督としてはチームの流れも変えるという意味でも使ってもらえなかった。また、成績不振にもなり、あっさりと出られなくなった。練習もさほどしない状況でどのような選手かを見ることもなく、スタメンから外されて、きつかった。	折り返しの時点で監督が変わって、変わって2試合目以降はダルダイとは合わなくて全くだった、どのような選手かを見ることもなく、スタメンから外されて、きつかった	チームの主軸として活躍していた状態から、チームの方向性の違いで出場時間が激減した。監督の采配が大きく関わってる。ダルダイ監督は評価していなかった。急な方針転換による出場時間の減少は当然選手としては精神的ダメージが大きい	監督の移籍に伴い出場時間・評価の低下	監督の移籍に伴い出場時間・評価の低下
25	聞き手	その監督はどのような監督でしたか？				

26	細貝選手	結果は出すし、いい監督だと思う。まだ若い監督だったし、うーん、個人的には合わなかった。練習にも参加できない時もあったから正直いい印象はないが、元ボランチの選手で活躍してきた監督だったから、尊敬はしているけど、信頼関係を構築できないまま終わったから、あまりいい印象はない。 新しい監督のもとでも頑張ろうと思っていたが、監督の評価は自分のプレーの良し悪しにもつながった。ルフカイ監督の時は、監督が評価してくれていると確信していたら、プレーの質も向上していた。 どんな監督でも頑張る気持ちがあっても、結果的に、監督からの評価が自分のプレーにもリンクしてしまい、プレーの質は向上しなかったように思う。その後、トルコヘレンタルで行って、レンタル期間が終わってベルリンへ戻ったら、キャンプに参加して頑張ってみたが、この監督のもとではやはり無理だなと限界を感じていた時に、VfB シュトゥットガルトにルフカイが就任してルフカイが引っ張ってくれた。しかし、ルフカイが早い段階でチームとの考え方が合わず、自分からやめてしまった。その後、ウォルフ監督が来て、その監督は当時34歳で若いし、どんな人なんだろうって思っていたけど、人間性はとてもいいし、途中から怪我しこともあり、使われなかったけど、コミュニケーションはしっかりとってくれる監督で、チームのマネジメントという面では、メンバー外の選手に対しても積極的にコミュニケーションをとってくれた。日本に帰る際にも、「使ってあげられなかったけれど、人間性の良さは理解していたし・・・」的な声かけがあり、人間的には魅力的な人だと思った。	尊敬はしているけど、信頼関係を構築できないまま終わったから、あまりいい印象はない、っていたが、監督の評価は自分のプレーの良し悪しにもつながった。	監督との信頼関係が選手のパフォーマンスに大きく影響している。	監督との信頼関係の重要性	特定の監督との出会い
27	聞き手	話は変わって、チームに溶け込んでからはチームに対するアピールの仕方は変わっていった？				

28	細貝選手	アウクスブルグでは個人的な調子は良かったので、チーム自体の調子はあまり良くなって、自分がチームを引っ張っていく気持ちが強かった。しかし、チームが変わってからは、選手の質も異なり、まずは自分のプレーをアピールしないといけないという気持ちになった。レバークーゼンではサイドバックで使ってもらっていた時は、このままサイドバックの選手として頑張ろうと思っていたし、で使われなくなったりしたら、まあ今思い返せば、浮き沈みの多い時期だったなと思うけれど。	チームが変わってからは、選手の質も異なり、まずは自分のプレーをアピールしないといけないという気持ちになった	チームのレベルに応じて、チームでの立ち位置が変わるために求められる行動が変わってくる	自身の立ち位置の客観的評価の重要性	自己の客観的評価の重要性
29	聞き手	色々な国を経験されていると思いますが、ドイツに関していうと、若い選手に対して言いたいこと。				
30	細貝選手	1年目2年目では挫けない、先を見据えて行動していくということが重要。通訳を付けないということの良さを伝えたい。ルフカイ監督がそう言ってくれたから、もし別の監督ならば、早く理解して、早く順応して、早く活躍したいからと通訳をつけていて焦っていたらひょっとしたら今がなかったかもしれない。	通訳を付けないということの良さを伝えたい、	コミュニケーションを取れるようになることが選手として長く活躍していく上で非常に重要である。通訳に頼ることではなく、言葉を覚えてコミュニケーションをとっていくことが重要である。	コミュニケーションの重要性	コミュニケーションの重要性
31	聞き手	日本人選手の良さは？				
32	細貝選手	戦術を理解する能力が高い。私はそういうタイプではないけれど、求められたことを確実にすることができる、気がきくとかは日本人の良さだと思う。ブンデスリーガでは能力だけでカバーしている選手がほとんどだし、まあ能力があるからカバーできるわけだけでも、日本人はそれ以外の場面での能力が長けているように	求められたことを確実にすることができる、気がきくとかは日本人の良さ	監督の指示に応じてプレーを変えることができる賢さが日本人の特徴	順応性の高さ、賢さが特徴	順応性の高さ、賢さ

思う。

- | | | | | | | |
|----|------|--|---|--|------------------------|------------------------|
| 33 | 聞き手 | 日本人選手が活躍するためには？ | | | | |
| 34 | 細貝選手 | コミュニケーションが一番重要。でも、試合に出場してはじめてチームに馴染んで、活躍できるが、いくらコミュニケーションに長けていても試合に出場しなければそれ以上のことはないので、難しいね。だから、結局はどうやって試合に出場していくかが重要かな。移籍当時に中山選手という選手と色々と話していたが、やはり監督って重要だよなって。監督に求められてそのチームに入るべき。本当に監督が欲しがってくれているかが重要。私の場合はそういう監督がいたから、本当に自分のプレーが発揮できた。試合に出場してはじめて、コミュニケーションもとれるようになってきたと思う。 | 監督に求められてそのチームに入るべき、試合に出場してはじめて、コミュニケーションもとれるようになってきた | 長期的なコミュニケーション能力の向上が必要。監督の移籍前評価が大切。いかに評価されているかを分析することが必要。 | 移籍時の監督の評価に値する分析の重要性 | 監督からの評価の重要性 |
| 35 | 聞き手 | チームメイトとの、コミュニケーションは？ | | | | |
| 36 | 細貝選手 | ボランチでプレーすることが多かったから、とにかく選手と話すように心がけた。ジェスチャーや、話していることをわかりやすく示していた。とりあえず、私が今発言しているということをアピールしていた。普段は穏やかなのに、試合中はどうしてもあんなに積極的なんだ！っていじられることもあったが、それは褒め言葉として嬉しかった。 | とにかく選手と話すように心がけた。ジェスチャーや、話していることをわかりやすく示していた。とりあえず、私が今発言しているということをアピールしていた。 | 言語能力が低い段階でもコミュニケーションを自発的に図っていくことがチームの中心的なポジションでは求められる。 | 積極的なコミュニケーション・意思表示の重要性 | 積極的なコミュニケーション・意思表示の重要性 |
| 37 | 聞き手 | プライベートでは？ | | | | |
| 38 | 細貝選手 | 誘われたらまあ行くようにはしていた。会話はわからないし、ストレスも多かったが、誘ってくれた場にはなるべく行った。 | 誘われたらまあ行くようにはしていた | チームに溶け込もうとする意思表示 | 積極的なコミュニケーション・意思表示 | 積極的なコミュニケーション・意思表示 |

				の重要性	の重要性
39	聞き手	今後、攻撃の10番タイプの選手が日本人にはいないですかね？			
40	細貝選手	ドイツレベルにはいけてないよね。どうやったら日本人から生み出すかな。もっとわがままじゃないと無理だよね。うーん。	ドイツレベルにはいけてないよね。どうやったら日本人から生み出すか	性格的にもなかなかチームの攻撃の中心的選手は日本から生み出せていないのが現状	性格面から攻撃的な日本人選手不足 日本人選手の売りとなる特徴の未確立

第2項 内田選手

1) プロフィールとブンデスリーガでの活躍の概要

プロとしての所属チームは、2006-2010年は日本の鹿島アントラーズ、2010-2017シーズンはドイツのFCシャルケ04、2017-2018はユニオンベルリンでプレーした。2018年には再び鹿島アントラーズ復帰した（表10）。

表10 内田選手のキャリア

チーム名	国	所属シーズン
鹿島アントラーズ	日本	2006-2010
FCシャルケ04	ドイツ	10/11-17/18
ユニオンベルリン	ドイツ	17/18
鹿島アントラーズ	日本	2018-

シーズンごとの出場時間と出場試合数

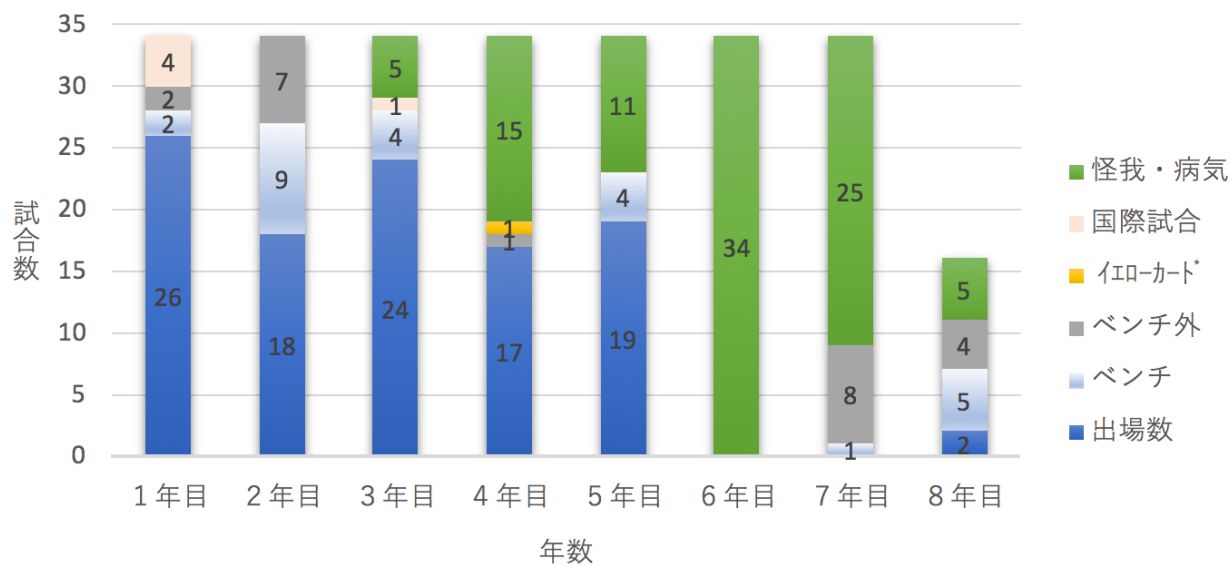


図9 内田選手 出場・欠場理由

ブンデスリーガでの活動状況

内田選手は8年在籍し、ブンデスリーガでの8年間のうち在籍したチームは2チームで関わった監督は8名だった。(図10)



図10 内田選手 チーム・監督別出欠場比較

インタビュー調査結果

移籍の経緯として、内田選手自身海外移籍への意志が強かったわけではなく、移籍は代理人に任せているという状況だった。自分の意志より代理人を信じるのが彼の移籍の判断基準だった。

ブンデスリーガで初めて加入したシャルケのことを彼は当時知らなかった。

入団前にチームからはライバルの同ポジションの選手を放出する意向を伝えられ、またマガト監督は選手を鍛えることに関しては定評があった。若い年代でマガト監督の下でトレーニング、試合を重ねることが内田選手自身の成長に繋がるという判断で代理人がシャルケを選択した。

入団の背景に、マガト監督自身が強化分野や、チームマネジメントの権利を持っていたことが影響していたと本人は述べている。

入団当時、長谷部選手からメンバーから外されても腐らずにプレーすることが重要だとアドバイスを受けたことも彼にとっては貴重だった。

入団当時から通訳はつけなかった。このことが通訳も付けずに頑張るという意思表示になり、監督の評価を上げたと本人は述べている。

マガト監督は軍隊のような激しいトレーニングをする監督で、戦うこと走ることを求められた。

戦術的には前方のファルファン選手とのコンビネーションで攻撃参加をすること、守備の対人で負けないことを指示された。

試合起用のターニングポイントとしては、バイエルン・ミュンヘン戦が挙げられた。リーグのトップのチームとの直接対決での勝利が内田選手の評価の定着に繋がった。

中心選手としてスペイン代表ラウルやオランダ代表フンテラールが同じタイミングで加入した。彼自身、出来上がったチームという印象はなく、加入した中心選手とともに試合に出場、勝利することがポジション確保につながると述べた。

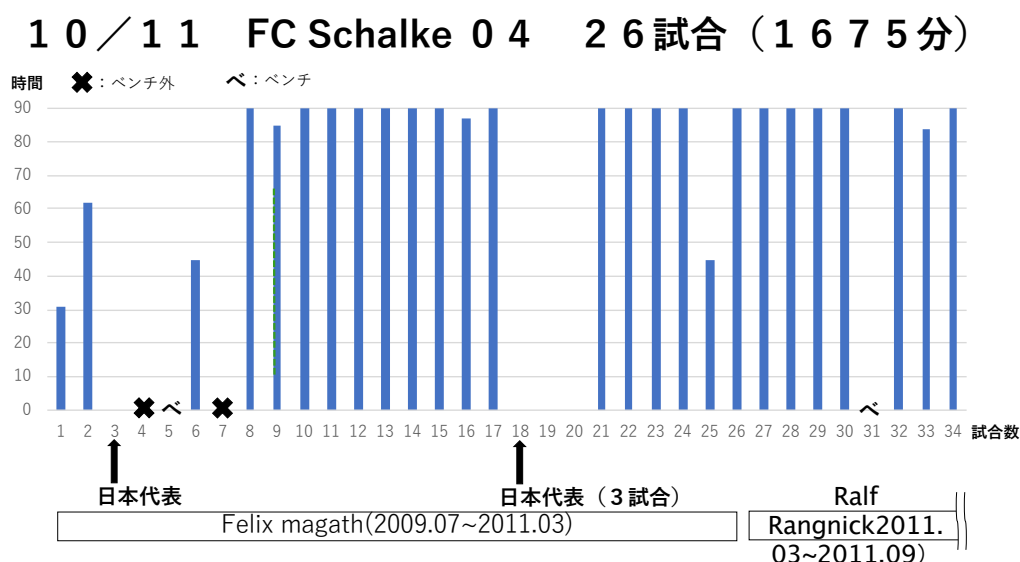


図 11 内田選手 10/11 シーズン出場時間

初年度シーズン途中にランゲラック監督への監督交代があった。細かい戦術指示が多い指導者であった。

マガト監督は走って闘うという点、ランゲラック監督は守備の切り替えの速さを求める点などトレーニングから監督の指摘の入る要点を観察し、ある程度監督のプレースタイルに合わせてプレーをした。

本人も述べるようにチーム順位の変動によって試合の出場にはあまり影響がなかった。

ライバルが移籍してから、行くことが大事であるというように同ポジションに強力なライバルがいるかどうかも重要である。

内田選手自身サイドバックというポジションということもあり自分を犠牲にしてのプレーが必要であると認識していた。ランゲラック監督は切り替えの早さを重視したゲームプレッシングを意識した守備をする監督であった。

スティーブン監督は選手の見る目はあるが厳しい監督だったと彼は分析していた。選手の波をしっかりと見極めて選手選考するので試合に出場に関わらず選手が練習をサボらなかった。

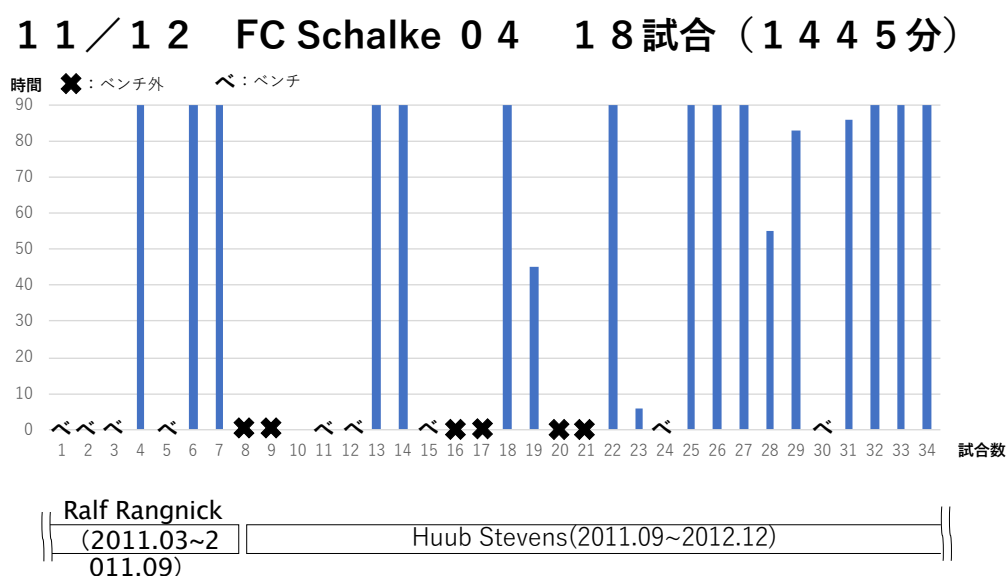


図 12 内田選手 11/12 シーズン出場時間

ケーラー監督は柔軟な監督だった。他の監督に比べて指導歴は長くないが選手に自由にプレーさせてくれるという点があった。戦術というよりは選手の配置でスタイルを変えるタイプの監督であったと内田選手は述べている。

ディマッテオ監督はあまり彼の中で印象に残る監督ではなかった。戦術的にはセンターバック 3 枚起用した守備的戦術だった。同時期にバイエルン・ミュンヘンからコーチとしてユルンスケーラーが入り、彼の指導によりトレーニングの質は向上した。

監督の度重なる交代に関しては、各監督で求めるプレーが多少違うという点に戸惑うことや、能力的な面に関して日本人選手であるということを懐疑的な目で見られることなどあったが、いずれも試合でのパフォーマンスによって解決できていたと述べている。

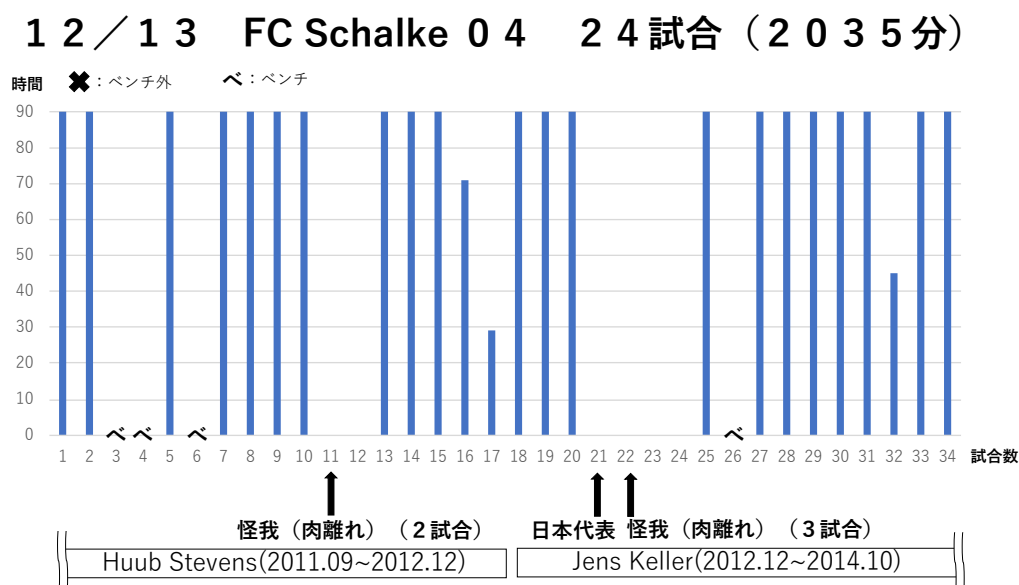


図 13 内田選手 12/13 シーズン出場時間

日本人選手で攻撃の中心選手がブンデスリーガに生まれないことに表れているように日本人の立ち位置、ニーズを理解することが活躍していく上で必要であると述べている。

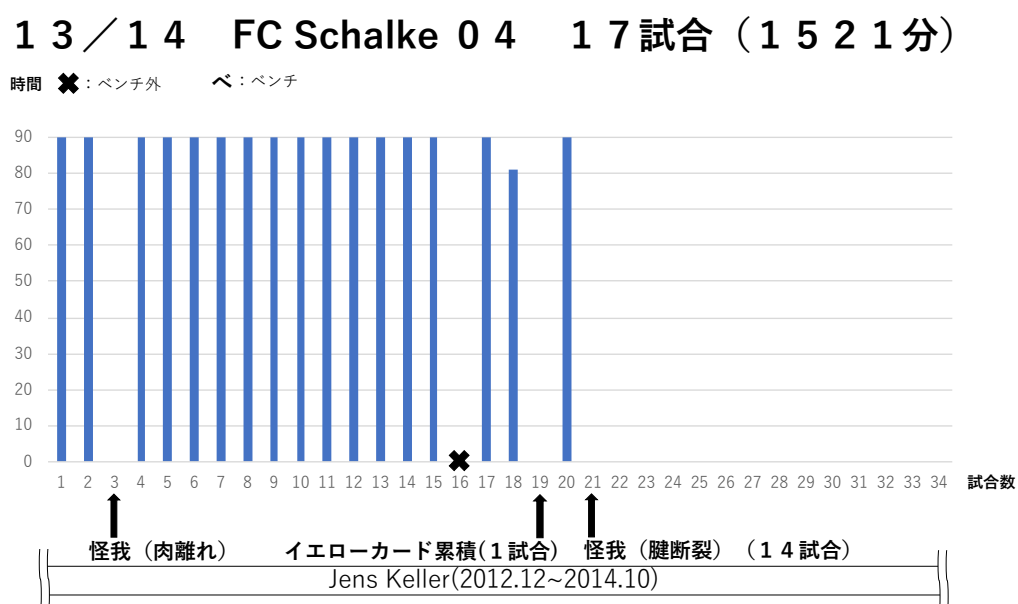


図 14 内田選手 13/14 シーズン出場時間

怪我に関しては、チームとの信頼関係が非常に重要であった。内田選手は日本代表での活動中に怪我を負ってしまったので、シャルケとして代表での活動に否定的な時期もあった。選手によってはクラブ内以外での治療は許可されない場合もあるが、内田選手は長年築いてきた信頼関係があって日本でのリハビリが実現した。また家族のサポート、近く

の日本人選手のコミュニティが精神的に助けになっていた。

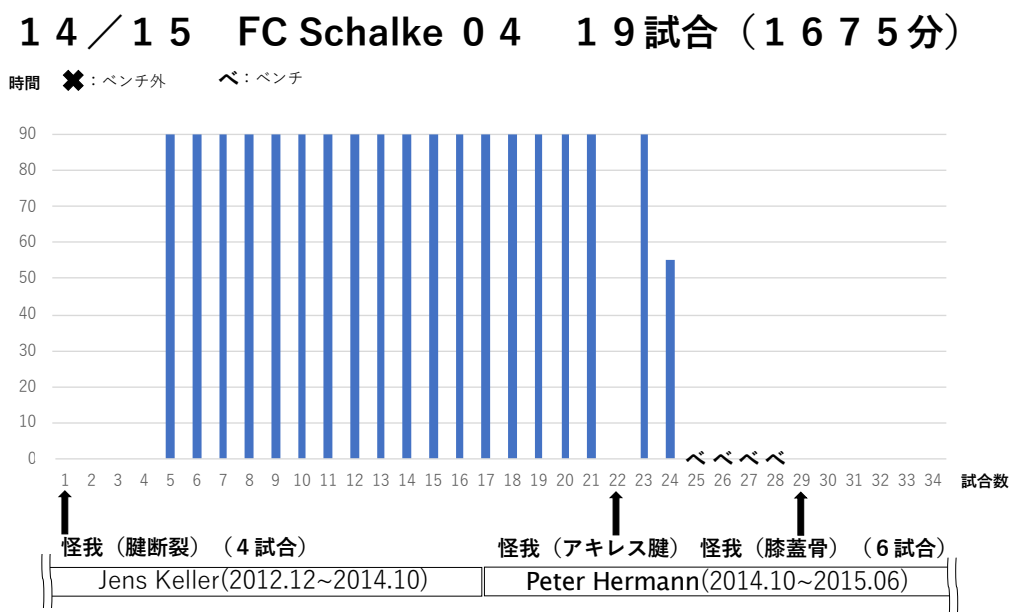


図 15 内田選手 14/15 シーズン出場時間

またメディカルサイドとのコミュニケーションにおいては、怪我の状態など細かいニュアンスをドイツ語で伝えることは難しく、リハビリをしている時期に同じポジションにいい選手を補強されてしまうこともあるので、怪我をしながら長年活躍するのは非常に大変であると述べている。

2) インタビュー内容の SCAT 分析

内田選手のインタビュー内容をストーリーラインで示すと以下の通りであった。

当初は海外移籍を考えていなかったが＜信頼できる代理人＞の存在があり、＜移籍先の情報が事前入手＞でき、移籍後に試合出場の見込みがあったことから移籍を決断した。

また、チーム加入後は事前に長谷部選手から＜腐らずに我慢して続けることが大事＞であることの＜事前情報があった＞ことでチーム加入後、厳しいマगत監督の下でもプレーすることができた。また試合に出場する為に＜監督が選手に対して何を求めているかを理解＞に努め＜監督から信頼を得る＞ことで安定して試合に出場することに繋がっ

ていた。監督が変わると戦術やスタイルが変わるがプレー面ではなくチームにおいて自分のプレースタイルを確立＞をすることで監督やチームメイトからも信頼を得ることができていた。

ストーリーラインを生成につながった SACT 分析の内容を（表 11）に示す。

表 11 内田選手インタビュー内容の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉テク スト中の注目 すべき語句	〈2〉テク スト中の語句 の言いかえ	〈3〉左を 説明するよう なテキスト外 の概念	〈4〉テー マ・構成概念	〈5〉疑 問・課題
1	聞き手	1 年目の困難はなんですか					
2	内田選手	マガトがめちゃくちゃ厳しい。軍隊のよう。一生懸命にやってスタメンから外れることもベンチ外になることもあるが、とりあえず腐らずにすることが重要だと長谷部さんから言われた。 (でもそのような事前に情報があればいいですね) マガトはバンバンお金を使う。強化分野や、マネジメントもやっていたので、移籍金もバンと鹿島に払ってくれた。それもあって、まだ無名だった日本人を取ってくれて羽振りが良かった。監督だけの権利ではなくて、マネジメントの権利もあったのでね。 マネジメントもやっている監督は珍しいよね。	マガトがめちゃくちゃ厳しい、とりあえず腐らずにすることが重要、監督だけの権利ではなくて、マネジメントの権利もあった	マガト監督は非常に厳しいフィジカルトレーニングをする。結果に左右されずにやり続けることの重要性。経験ある先駆者からのアドバイスが参考になった、印象に残った。金銭的な部分でも評価をしてくれた。自己評価以上の評価をしてくれた。マガト監督の監督兼マネジメントという立場が内田選手のような選手の発掘に繋がった。	結果に左右されずにやり続けることの重要性、先輩からの事前情報の重要性、監督兼マネジメントという立場	自己との戦い、事前情報の重要性、監督兼マネジメント	無名の外国籍選手の獲得はどういった経緯で実現されるのか。
3	聞き手	監督から何を求められる？					

4	内田選手	闘うこと、走ることを求められた。	闘うこと、走ることを求められた	監督は、フィジカルコンタクトで負けない、気持ちのこもったプレーができ、走力のある選手を求めた。	フィジカル の強い選手	フィジカル の強さ
5	聞き手	プレー面ではどのようなことを求められた？				
6	内田選手	自分の特徴を生かしなさい。ガンガン前に行って、ファルファンと絡んで前に出て攻撃すること。あとは守備、対人かな。対人はめっちゃくちゃ言われたね。私もドイツ語がわからなかったから、だから言っていることはわからなかったけど、頑張っていたから、チャンスはくれたね。	ガンガン前に行って、ファルファンと絡んで前に出て攻撃すること、対人はめっちゃくちゃ言われたね	前線のプレイヤーとのコンビネーションによる積極的な攻撃参加と対人守備で負けないことを求められた。	フィジカル の強い選手	フィジカル の強さ
7	聞き手	行ってからどのくらいで？				
8	内田選手	ごめん覚えてない。でも、この時に小指を骨折して少し休んだんだけど、この辺りでバイエルンに勝ってそこから定着した。そういう試合が必ずあるよね。ターニングポイント的なもの。	少し休んだんだけど、この辺りでバイエルンに勝ってそこから定着した、そういう試合が必ずあるよね。ターニングポイント的なもの	強豪チーム相手の対戦で結果を出すことが自分の立場の確立に繋がる。ターニングポイントの重要性。	結果を出す こと、ター ニングポイント	ターニング ポイント
9	聞き手	通訳に関しては？				

10	内田選手	いなかったんだよね。最初はつける予定だったんだけどね、ドイツ語でいるかいらないかを聞かれてね、その時怒られていると勘違いしてね、『いる』って答えたら『いるのか！！』って聞かれたから、『じゃ、いない』って答えてしまった。で、要らなくなった。 しかし、それがマガト的には良かったみたい。通訳もつけずに頑張って根性あるなって印象を与えたみたい。	マガト的には良かったみたい。通訳もつけずに頑張って根性あるなって印象を与えたみたい。	通訳をつけないことでコミュニケーションを図る努力をしているという好評価に繋がった	通訳を付けない、熱意が高いと評価	熱意が高い選手が評価
11	聞き手	最初チームメイトとのコミュニケーションはどのようにしたの？				
12	内田選手	エドゥーってFC東京へいったやつがいるんだけど、韓国でスウォンサムソンでやっててさ、あいつが助けてくれた。あとは、ノイヤーとか結構助けてくれるやつがいてね。ドイツ人でも。 どちらかと言えば、私は文句を言わずにやるタイプだからさ、っていうかやんなきゃいけないと思っていたから、だから結構真面目にやっていたから助けてくれる人がいたかね。	私は文句を言わずにやるタイプだからさ、っていうかやんなきゃいけないと思っていたから、だから結構真面目にやっていたから助けてくれる人がいたかね	日頃の行動や姿勢が選手としての評価に繋がった。自らのタイプの確立。	自己の確立	自己の確立
13	聞き手	当時の中心選手の傾向とは？				
14	内田選手	あの時は私と一緒に入ってきた、ラウルとフンテラール。結構強烈な人が入ってきたから、チームが出来上がっている環境の中に入った訳ではなく、これから作り上げる段階のところで私も加入したから。その中で試合に出て、勝っていかないといけないって。サイドバックだから点を決める訳ではないからね。ファルファンとかとコンビを組んでね。	これから作り上げる段階のところで私も加入した、試合に出て、勝っていかないといけないって	チームとしてどのようなサッカーをしていくという方向性を選手たちがまだ把握していない状態であった。中心選手の新加入により、やるサッカーのスタイルに変化が起	中心選手の変化により戦術の変化	戦術の変化、順応性の高さの重要性

きる。

- 15 聞き手 ポジションのことでチームメイトとの呼吸が合わなくてプレーを変えた？逆に自分からチームメイトにプレーについて何か伝えたことは？
- 16 内田選手 基本的に自分のプレーを変えることはなかったね。もちろん実力のある選手に言われたら従うこともあったけど、自分が間違えてないと思ったら変えることはなかったね。
- チームメイトにプレーについて何か伝えたことはほとんどないね。
ある程度自分のやることははっきりしていたので、人のことよりも自分のすべきことをしていたね。
- 17 聞き手 監督はどうでしたか？

基本的に自分のプレーを変えることはなかったね、人のことよりも自分のすべきことをしていた

自分のプレースタイルが非常にはっきりしていた。

自己のプレースタイルの確立

自己のプレースタイルの確立

18	内田選手	マガトは本当に何もない。そのあとのランゲは戦術がうるさいので、マガトはとりあえず走って闘っている。ランゲは来た時、チームメイトはめちゃくちゃ喜んでたね。ちゃんとした指導者が来たって。でも途中でノイローゼになってやめちゃったんだよね。細かな指示が多かった。守備に関してなど。	マガトは本当に何もない、ランゲは来た時、チームメイトはめちゃくちゃ喜んでたね。ちゃんとした指導者が来たって。	マガト監督は自分の戦術を明確に支持するタイプの監督ではなかった。選手によるが、当時のチームの選手たちは戦術的に明確な指示を出せることを求めている。	選手たちは戦術的に明確な指示を出せる監督	選手が求める監督
19	聞き手	最初の1年半に監督に言われたことは？				
20	内田選手	ある程度監督の好きなプレースタイルに合わせていった。守備をしっかりとしないといけない、攻撃をしっかりとしないといけないとか、監督が怒るところをよく観察していた。マガトはとりあえず走って闘う。絶対に文句を言わない、腐らない。ランゲは守備の切り替えをもっと速くしないといけないなど、現代サッカーっぽいなど	監督が怒るところをよく観察していた、マガトはとりあえず走って闘う。絶対に文句を言わない、腐らない。ランゲは守備の切り替えをもっと速くしないなど、現代サッカーっぽい	言葉を理解していない段階でも監督の細かいリアクションから求められていることを理解し実行していた。またマガト監督はプレー面だけではなく、日頃の姿勢や言動も評価する監督であった。ランゲは監督は切り替えのスピードを重視する監督であった。	監督が求めるものを分析	監督の分析の重要性
21	聞き手	移籍前にチームの分析はしましたか？				

22	内田選手	海外でプレーをするつもりがなくてね、正直シャルケも知らなくて。代理人に任せた。マガトが監督だったから、鍛えられにいこ！ってそんな感じでいった。あとはライバルを出すって言った。もともと右サイドバックだった人がマガトと仲が悪くてね。その選手が出るから去年までの主力選手がいなくなると聞いていて、それならそのポジションを狙えるかなって。基本的には自分の意思で移籍を決めたというより代理人を信じて決めた。 代理人は私のことを考えて動いてくれているから、その結果納得がいかなくとも、その点で文句の言う人はダメだなんて私は思っているから。 試合には出たいと思っていた、試合に出られなかったら日本に戻ってくることになると思っていたから。ライバルが移籍してから行くってことは、まあ大事だよな。	代理人に任せた、基本的には自分の意思で移籍を決めたというより代理人を信じて決めた。 代理人は私のことを考えて動いてくれているから、その結果納得がいかなくとも、その点で文句の言う人はダメだなんて私は思っているから	代理人との信頼関係の構築。事前に自分が加入した際の想定ポジションの情報が入っていた。監督の特徴や年齢などを考慮して移籍させる代理人の判断の良さ。代理人の選択を非常に信頼している。自分のライバルは誰になるのか、そのポジションで試合にどの程度使ってもらえる可能性があるのかを移籍前のある程度推し量っておくことが重要。移籍情報が大切。	代理人との信頼関係、移籍を考えているチームの情報的重要性	代理人との信頼関係、移籍チームの情報
23	聞き手	チームの順位の変動で、試合の出場に関係があった？				
24	内田選手	あんまりなかったね。自分が活躍していればちゃんと出られたし、一度定着してしまえばそう簡単に変えられることはなかった。定着するまでが大変だけどね。評価を得られれば、監督が変わっても結果をだし続ければ。	自分が活躍していればちゃんと出られたし、一度定着してしまえばそう簡単に変えられることはなかった	順位変動に関わらず出場できていたということは、スタメンでの立ち位置を確立していたということになる。	スタメンでの立ち位置の確立	自己の立ち位置の確立

25	聞き手	日本人のいいところは？				
26	内田選手	チームのために犠牲になることができる。目立たなくてキャラが薄いって印象になってしまう可能性もあるけれど、私の場合ポジションとして王様ではないポジションで自分を犠牲にしてのプレーがあったように思う。 ドイツではそのようなタイプをちゃんと認めてくれる。 シンジのように1年目からダービーのように活躍した場合は別だけれど、コツコツとするポジションだからね、長く出続けて認められるからね。頑張って頑張ってようやく、右内田で行こうってなる。	チームのために犠牲になることができる、	チームのために点を取る、選手をサポートするポジションの方が、全体的にみると日本人選手が試合に出場していく上でアピールしやすいと考察。また内田選手のようにサイドバックのポジションはそういったチームのためにハードワークができる選手が好まれる。	目立つよりもサポートするタイプ	目立つよりもサポートするタイプ
27	聞き手	スティーブンはどのような監督でした？				
28	内田選手	厳しい監督だった。選手を見る目はある。選手の波をしっかりと見極めて、調子の悪い選手は使わなかった。誰かの選手に頼るというよりはその時に調子のいい選手を使うって感じだったから、みんなが練習を頑張っていたね。 試合に出ていてもサボらない。結構フェアな監督だった。	厳しい監督だった。選手を見る目はある、選手の波をしっかりと見極めて、調子の悪い選手は使わなかった、フェアな監督	選手の能力や価値ではなく、その時の調子やコンディションを見極める監督。こういった選手采配が選手のトレーニングからのモチベーションやアピールに繋がりがり、練習の質が下がらな	好みよりもその時の選手を見る、選手のモチベーション維持につながる	フェアな監督、モチベーションの維持

い。

- | | | | | | | |
|----|------|--|---------------------|---|----------------|----------|
| 29 | 聞き手 | ケーラー監督は？ | | | | |
| 30 | 内田選手 | 一番好きな監督だった。自由にさせてくれたし、ドイツ人っぽくなくて、多少ミスをして怒ったりせず、柔軟性があった監督として経歴が長いとスタイルがかたくなるんだろうね。なので、経歴の浅いケーラーは柔軟性があったね。 | 経歴の浅いケーラーは柔軟性があったね。 | 監督歴が短い監督は選手のプレーの選択肢に対して自由度が高く、逆に監督歴が長い監督は、選手のプレーの選択を指定する傾向があると考察。 | 自由度が高く、柔軟性に長ける | 柔軟性の高い監督 |
| 31 | 聞き手 | 普段はどのような選手と一緒に行動していましたか？ | | | | |
| 32 | 内田選手 | 私の場合は多国籍だったね。多い時は十何カ国の選手が所属していたから、それらの選手と付き合っていた。 | | | | |
| 33 | 聞き手 | 練習は英語だったとか？ | | | | |
| 34 | 内田選手 | 一時期は英語だったね。監督がドイツ人だから、ドイツ語にしろと言う監督が多かった。 | | | | |
| 35 | 聞き手 | ディマッテオになったのは後半？ | | | | |

36	内田選手	あいつは練習が一番つまらなかった。何にもあんまり印象はないね。一番勝てなかった監督。来た時は結構期待していたけど、練習をしていたら。ユンスケーラー（ヘッドコーチ）はバイエルンからきて、おじいちゃんなんだけどインサイドとか、速いパスじゃないと怒るから、それでシャルケの練習のレベルがめちやくちゃアップして。	ユンスケーラー（ヘッドコーチ）はバイエルンからきて、おじいちゃんなんだけどインサイドとか、速いパスじゃないと怒るから、それでシャルケの練習のレベルがめちやくちゃアップして	速いパスでないと怒るコーチによりレベルアップ	パススピードの意識の重要性	指導と練習のレベルアップの関連性
37	聞き手	監督のチェンジとかで苦労した点は？				
38	内田選手	二人目三人目は結構戸惑ったかな。監督の求めるものが違いすぎた。日本人って感じで見られているところがあってね。日本人はできるのか？的な感じで見られているなって思っていた。試合に出て活躍したら使ってくれるな。始めはマイナススタートだったように思う。	監督の求めるものが違いすぎた。日本人って感じで見られているところがあつてね	監督が変更することで変更直後に出場機会が減少、日本人選手とすることが関係	日本人選手ということでマイナス評価を受ける	日本人選手としての色眼鏡による困難
39	聞き手	戦術的に何かありましたか？				

40	内田選手	ランゲニックは切り替え早くゲイゲンプレス。 ディマッテオはスリーバックにして守備的。つまらんってファンからは言われていた。 ケーラーは、戦術はあんまりなかった。戦術というよりは選手を配置することで解決していたように思う。 それって、その選手としてハマってしまえば、スタメンから外れることはない。 私のことは馬鹿にしないけど、そっとしておいてくれる、真面目にやっていることを評価してくれる立ち位置になることが一番やりやすかった。 選手とはほとんど絡むことはなかった。誘われても行かなかった。 ある程度出身地域の選手同士でかたまったりしていたが、アジア人は一人しかいなかったから。一人でいた。 正直皆で食事へ行っても話すこともなかったし。でも試合に出ていたから、それが自分の居場所になっていたかも。 プレーの面でも何も言われなかった。 相手が気持ちよくプレーができるように私は動いていた。	戦術というよりは選手を配置することで解決していたように思う、それって、その選手としてハマってしまえば、スタメンから外れることはない、試合に出ていたから、それが自分の居場所になっていたかも	監督のやりたい戦術を理解しプレーで体现することが出場時間を得る上で非常に重要。プレーで示すことで自分のチームでの立ち位置の確立。	監督の戦術を理解、スタメンの確立、スタメンの確立によるチームメイト内での自己の確立の確立	戦術の理解によるスタメンの確立、チームメイト内での自己の確立
41	聞き手	10番タイプの選手が出てこないがその点においては？	それって、その選手としてハマってしまえば、スタメンから外れることはない。			

42	内田選手	そのポジションはある程度わがままでないとできないしね、上手いだけならドイツ人をとればいいし、速くて強いだけならアフリカ人の選手を獲った方がいいし、日本人に求められているものは何かなって思うよね。 日本人とスペイン人とは似てるよね。だから、スペインへ移籍をして活躍するのは難しいよね。同じならスペイン人を使うし、スペイン人は上手いし。日本人が入る隙がないよって感じだよ。だから、乾選手はすごいよね。	そのポジションはある程度わがままでないとできないしね、上手いだけならドイツ人をとればいいし、速くて強いだけならアフリカ人の選手を獲った方がいいし、日本人に求められているものは何かなって思うよね	乾選手のドリブルやボールを扱う技術のように海外でプレーする際はストロングポイントが必要。日本人選手全体としてはなかなか特徴を見いだせていない現状がある。	日本人選手全体としてはなかなか特徴を見いだせない現状	日本人選手の売りとなる特徴の未確立
43	聞き手	怪我に関しては？怪我との向き合い方は？				
44	内田選手	怪我のタイミングが良かったと思う。延長や移籍の関係でね。代理人は膝が悪いから延長を長めにしようとか言ってくれていたね。自分ではそこまで膝の怪我を深刻に考えてなかったけど、代理人の思惑通り、延長をしておいて良かった。	代理人は膝が悪いから延長を長めにしようとか言ってくれていたね。自分ではそこまで膝の怪我を深刻に考えてなかったけど、代理人の思惑通り、延長をしておいて良かった	怪我の状態を判断する際には、代理人を始め自分ではない第三者の客観的な判断も重要になる。	代理人の的確な判断	代理人との信頼関係
45	聞き手	メンタル面ではどうだった？				

46	内田選手	代表で怪我をしているから、チーム的には何をしてくれてるんだって。だから日本に帰りたくともなかなか言えなくて。シャルケで長年頑張ってやってきていたから、チームはそれを認めてきくれて日本でリハビリ治療をすることを認めてくれた。選手によっては帰してくれない選手もいた。だから、チームとの信頼関係は大事だなと思った。 あとは家族と一緒にいてくれたから、メンタル面はサポートしてもらえた。あとは近くのチームに日本人選手がいてくれたから孤独は感じなかった。	代表で怪我をしているから、チーム的には何をしてくれてるんだって。だから日本に帰りたくともなかなか言えなくて。シャルケで長年頑張ってやってきていたから、チームはそれを認めてきくれて日本でリハビリ治療をすることを認めてくれた	日本人の存在、家族の存在など精神的な支えが怪我を治す段階では非常に助けになる。チームの判断に身を任せるのではなく、一選手としてしっかりと治療におけるセカンドオピニオンも持つべき。そういったことをチームと話せる信頼関係の構築が重要である。	チームとの信頼関係の重要性、家族のサポート	チームとの信頼関係の重要性、家族のサポート
47	聞き手	日本で怪我するのとドイツで怪我をするのでは違う？（内田夫人より）				
48	内田選手	ドイツで怪我をした方が困る。細かいニュアンスがチームやドクター達に伝わらない。しかも半年試合に出られなかったら、すごい選手が入ってくるから、お金もネームバリューもあるし。 その中でも生き残って行く術を考えないといけない。 2、3シーズン怪我をしているからね。だから、長谷部さんとかすごいよね。怪我をしながらも長年活躍しているからね。	ドイツで怪我をした方が困る。細かいニュアンスがチームやドクター達に伝わらない。しかも半年試合に出られなかったら、すごい選手が入ってくるから、お金もネームバリューもあるし。	日本での選手としての立ち位置と、ドイツでの立ち位置の違いを実感。長期の怪我はライバルの出現を意味する。	ドイツでプレーする上でリスクの大きさ	ドイツでプレーをするリスク
49	聞き手	安住タイプ、傭兵タイプ、都市主義、夢を追うタイプだとどのタイプ？				

50	内田選手	安住タイプだね。試合にも出られていたし、お金ももらえたし、このチームで長くプレーをしたいって思っていた。他からスカウトが来ても正直揺らぐことはなかった。				
51	聞き手	若い選手に対して言いたいこと				
52	内田選手	海外へ行きたいというが、日本で結果を出していないのに、よく言えるな。って思う。甘い。すごく孤独で寂しいんだよ。行ったら頑張らばって思っていたけど。今、若手が海外へ行っているけれど、私たちが移籍したころよりも勢いはないなっと思う。	若手が海外へ行っているけれど、私たちが移籍したころよりも勢いはないなっと思う。	マーケットが変わってきていることを実感。日本人選手のドイツにおけるニーズがなくなってきた。	市場の変化に伴う日本人選手の価値の変化	市場の変化に伴う日本人選手の価値の変化
53	聞き手	日本でそれほど結果を出せていない選手に海外へ行きたいのですが・・・って相談されたら？（内田夫人）				
54	内田選手	「いけば」っていう。多分何もできないよって思う。自分より能力の高い選手なんていっぱいいるし、名前も知られていないし、根性だけだね。長谷部さんも同じように根性が大切だって言っていた。	自分より能力の高い選手なんていっぱいいるし、名前も知られていないし、根性だけだよ。長谷部さんも同じように根性が大切だって言っていた。	自分よりも能力の高い選手がいるのが当たり前の世界である。大切なのはメンタル的な部分。	能力の高い選手を目の当たりにしてどのようにするかが重要	海外での自己確立の重要性

第3項 原口選手

1) プロフィールとブンデスリーガでの活躍の概要

プロとしての所属チームは、2008-2014年は日本の浦和レッズ、2014/2015から2016/2017シーズンはドイツのヘルタ・ベルリン、2017/2018シーズンはフォルトゥナ・デュッセルドルフへ（レンタル）移籍 2018/2019シーズンはハノーファーでプレーした。（表12）。

表 12 原口選手のキャリア

チーム名	国	所属シーズン
浦和レッズダイヤモンドズ	日本	2008-2014
ヘルタベルリン	ドイツ	14/15-16/17
フォルトゥナ・デュッセルドルフ	ドイツ	17/18
ハノーファー96	ドイツ	18/19-

シーズンごとの出場時間と出場試合数

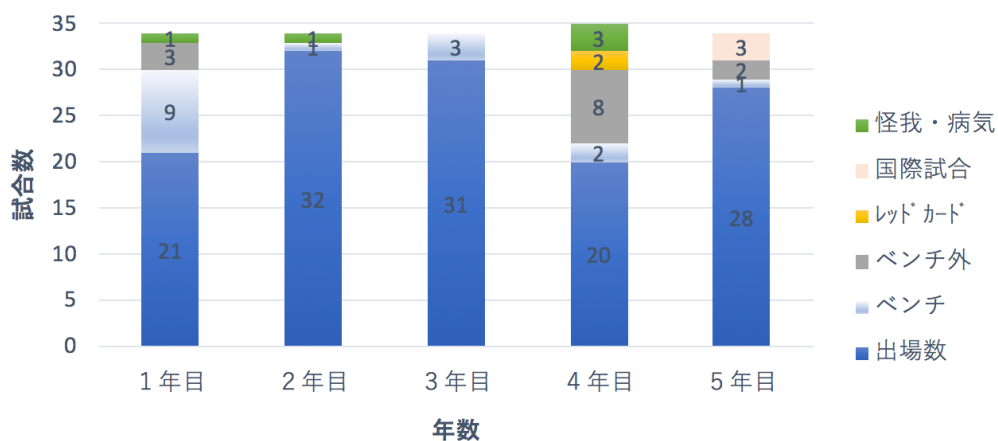


図 16 原口選手 出場・欠場理由

ブンデスリーガでの活動状況

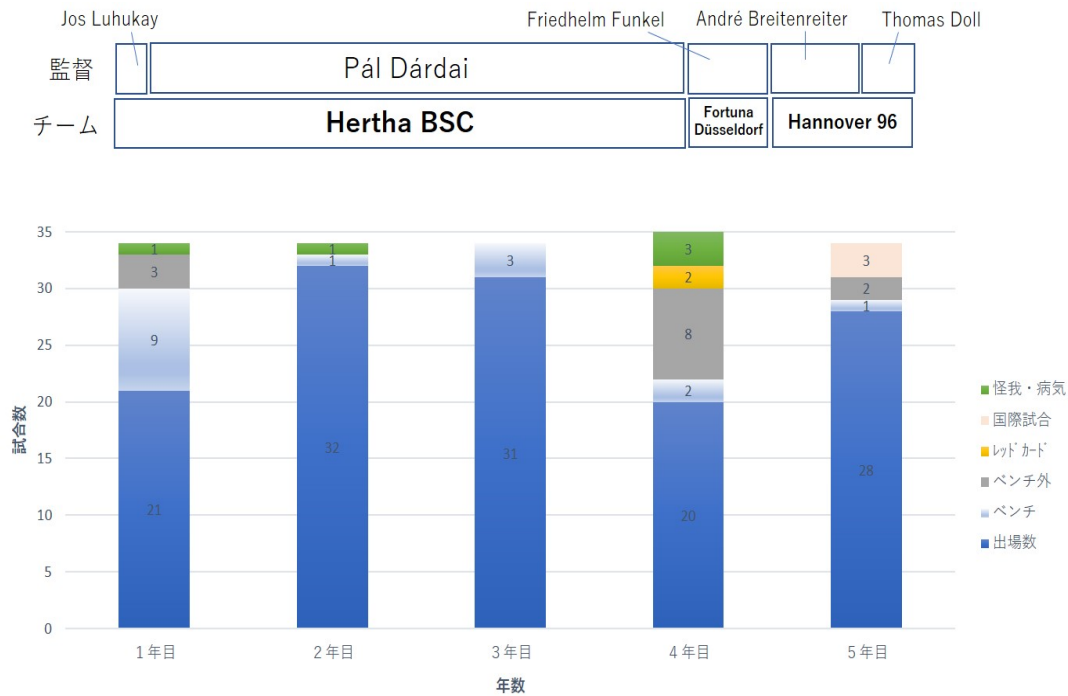


図 17 原口選手 チーム・監督別出欠場比較

インタビュー調査結果

移籍に関しては、当時香川選手が活躍したこともあって日本人のニーズが非常に上がっており、そういったこともドイツ移籍を後押しした。

1年目はルフカイ監督のもとでプレーした。チームメイトには細貝選手がいたために言語で困ったときは細貝選手を頼り、通訳をつけることはなかった。

プレー面では自身でも述べるように守備の積極性が非常に増した。逆にいえば守備を積極的にしなければ試合にはなかなか起用してもらえなかった。初年度から自分のプレーに固執することなく、柔軟にプレーを変化させていた。またシーズン途中から監督に就任したダルダイ監督に認められたことも出場時間を増加させることができた大きな要因と言える。

最初の5試合はメンバー外と評価をされていなかったが、6試合目で得点を決めたことにより評価を得て、そこからのスタメン出場に繋がった。

14/15 ヘルタ・ベルリン 21試合 (1382分)

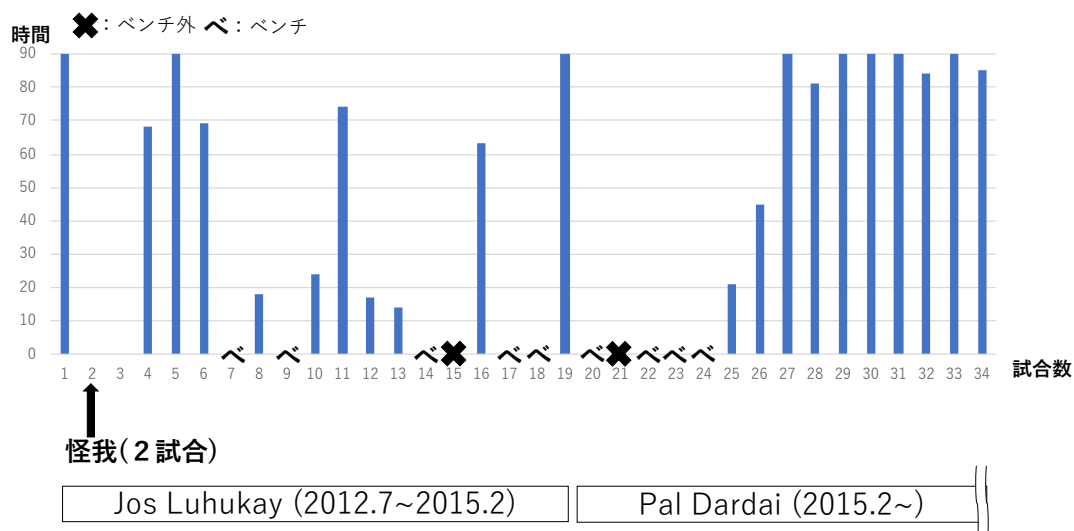
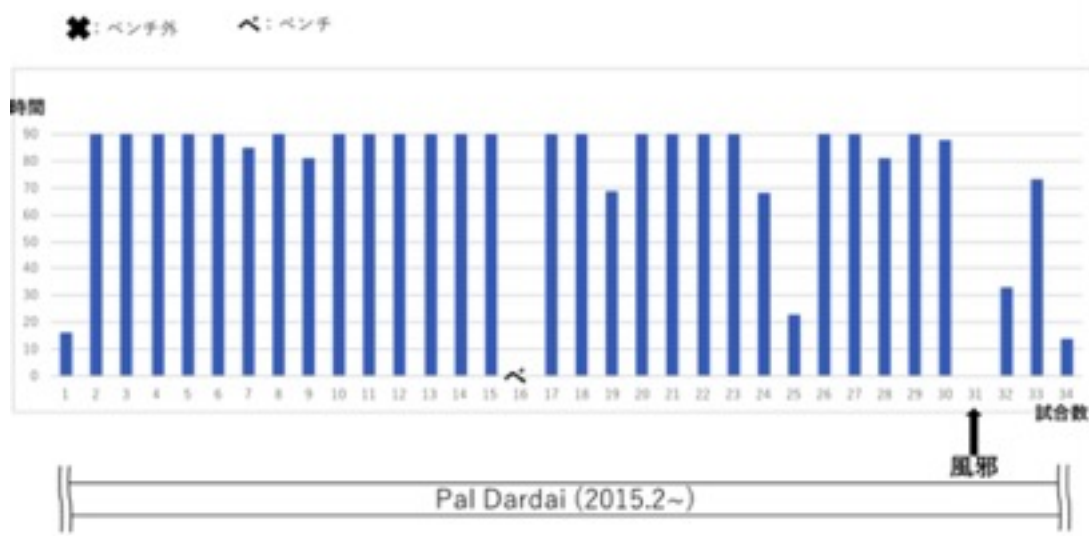


図 18 原口選手 14/15 シーズン出場時間

2シーズン目も引き続きダルダイ監督のもとでプレーをして出場機会を確保し、チーム内でもスタメンの地位を確実なものにしていった。しかし原口選手の望むポジションではないポジションでの出場も多かった。その中で監督との話し合いの場を自ら設けて自己主張は怠らなかった。

15/16 ヘルタ・ベルリン 32試合 (2521分)



本人も何か疑問を感じたら直接監督にコミュニケーションを取る。というように主張をすることを大切にしていた。また言語力が自国選手に比べて劣っている分、常に監督を始めスタッフに対しての態度で、自身が集中し、常に試合に出場する準備をしていることをアピールしていた。そういった隙のなさがシーズンを通して試合に出場できる要因の一つになっていた。本人も日本人選手の良さとして、勤勉さや真面目さを挙げており、そこが自身の良さだと述べている。

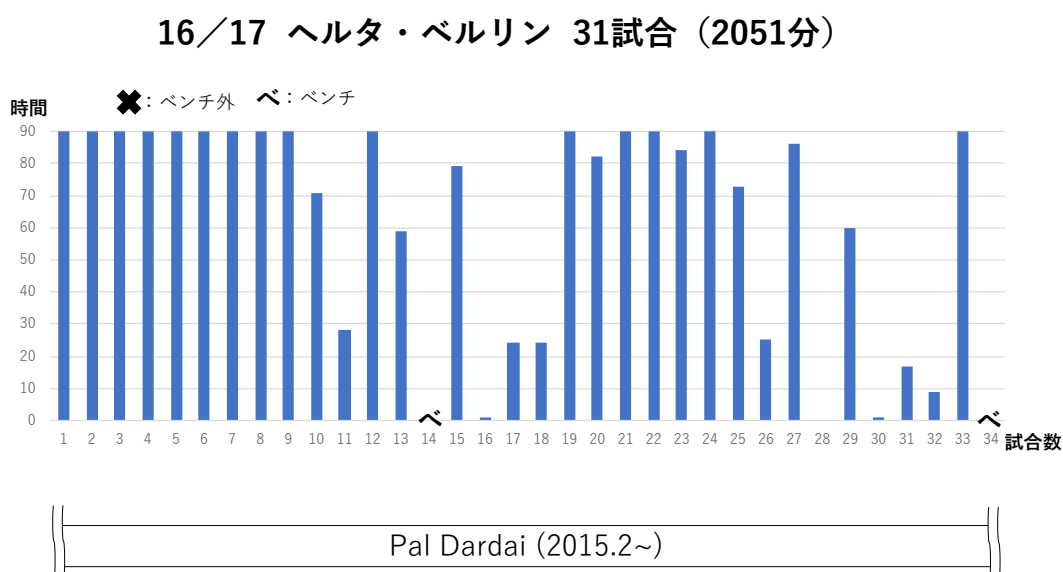


図 19 原口選手 16/17 シーズン出場時間

4シーズン目は、当初からの原口選手の狙いであったステップアップを移籍の話し合いでチームサイドに伝えてしまったことで出場時間が大幅に減少させてしまった。

自身のミスであり別の伝え方があったと本人も述べるように、チームとの契約がまだ残っている状況でのチームとの話し合いの場は非常に気をつけなければならない。

移籍交渉時に試合に出られなくなるという状況があること自体、日本ではなかなかないため、異なる部分であると言える。

そういった状況でもトレーニングに励み、アピールを続けていた。才能がある選手ほど海外という違う環境での適応に注力しないといけないと本人が述べる。

17/18 ヘルタ・ベルリン 7試合 (207分)
 フォルトゥナ・デュッセルドルフ 13試合 (1003分)

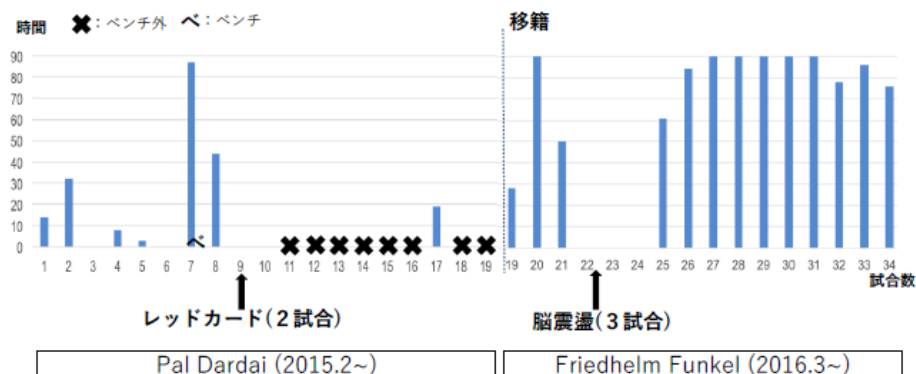


図 20 原口選手 17/18 シーズン出場時間

18/19 ハノーファー 19試合 (1327分)

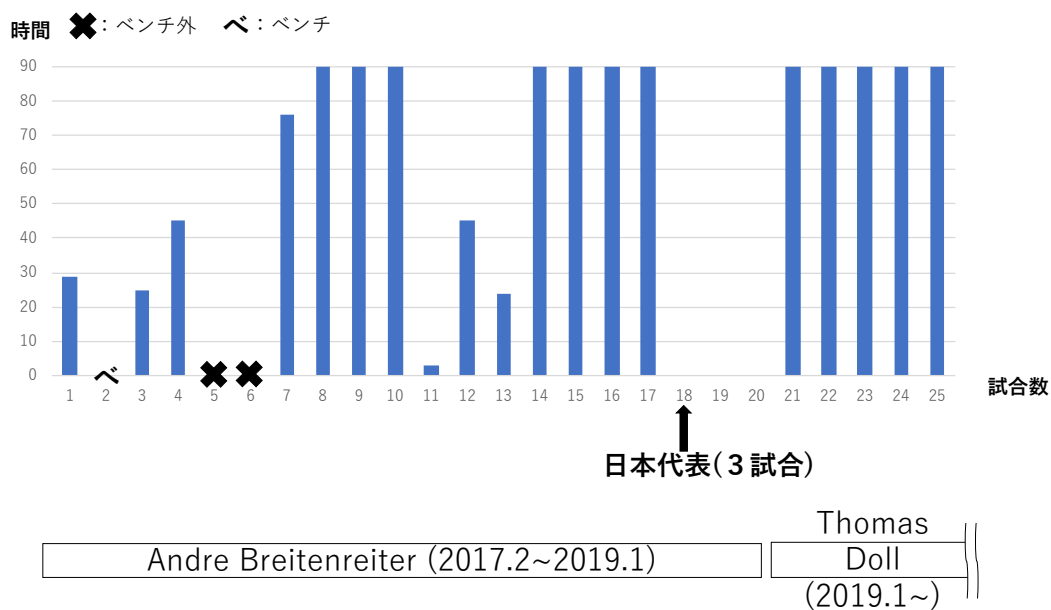


図 21 原口選手 18/19 シーズン出場時間

2) インタビュー内容の SCAT 分析

原口選手のインタビュー内容をストーリーラインで示すと以下の通りであった。

元からヨーロッパへの移籍を希望しており、香川選手の活躍もあり<ブンデスリーガで日本人選手が評価を得ていた>ことから活躍できる自信もあり躊躇なく移籍ができた。

原口選手は日本では攻撃的な選手であったが＜監督の求めるプレーを分析＞し特に守備を積極的に行うことで試合機会を得た。また、＜監督に対して積極的に考えを主張する＞こと＜常に監督からの評価を意識する＞ことで信頼関係を構築した。

一方で＜代理人とのコミュニケーションの失敗＞によって移籍確定前に移籍意思がチームに伝わってしまい半年間試合出場ができない時期もあり＜監督からの信頼関係＞を失ってしまった。

ストーリーラインを生成につながつた SACT 分析の内容を表 13 に示す。

表 13 原口選手のインタビュー内容の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉テク スト中の注目 すべき語句	〈2〉テク スト中の語句 の言いかえ	〈3〉左を 説明するよう なテキスト外 の概念	〈4〉テー マ・構成概念 (前後や全体 の文脈を考慮 して)	〈5〉疑 問・課題
1	聞き手	移籍後困難だったこと何ですか？					
2	原口選手	住居は、岡田さん（日本人の不動産会社の方）が紹介してくれたから問題はなかった ヘルタ・ベルリンというチームに移籍したため、拠点はベルリンで、比較的便利だった。現地の日本料理店へ毎日行っていた。 途中からは日本人の料理人をつけていたため食事は安定していた 最初の1ヶ月はホテル暮らしだったため、生活が安定してきたのは移籍後2ヶ月後くらいから。	住居は紹介、拠点はベルリンで比較的便利、日本料理屋へ毎日行っていた、生活が安定してきたのは移籍後2ヶ月	住居、食事に対する心配が少ない	衣食住の安定、精神的安定	衣食住の安定化、生活面での精神的ストレスからの解放	
3	聞き手	コミュニケーションについてはどうでしたか？					
4	原口選手	細貝選手が最初の1年間チームメイトで一緒だったため、それまでは細貝選手と行動することが多かった、気持ちの面では最初の1年細貝選手存在は大きかった、ドイツ人ではない 1年を過ぎてくらいから（細貝選手が移籍した）チームメイトから話してくれるようになり、なんとなく話せるようになってきた。 気持ちの面では最初の1年細貝選手存在は大きかった。 細貝選手がいなくなってからは、ドイツ人ではないノルウェー人、チェコ人など（ドイツ語を母国語としない選手）のチームメイトと食事へ行くようになった。外国人の気持ちをよく理解してくれるし、仲良くしていた。	細貝選手が最初の1年間チームメイトで一緒、1年を過ぎてくらいから（細貝選手が移籍した）チームメイトから話してくれる、ドイツ人ではない、外国人の気持ちをよく理解してくれる	日本人選手がいることで精神的支え、外国人選手との精神的つながり	チームメイトとの関係性の構築に国籍が大きく作用する	国籍の壁、言語の壁	日本人チームメイトが海外移籍最初のチームにいることはメリットなのか
5	聞き手	サッカーをするにあたり困ったことは？					

6	選手	プレー面では、ボールを積極的に取りに行く、奪いにいく守備に変えた。（日本では相手に抜かれない守備が基本である）簡単にボールを持たせてくれないため、自分から奪いにいくことが必要となる 競技面では全然違ったので半年は困った。	ボールを積極的に取りに行く、奪いにいく守備に変えた、競技面では全然違ったので半年は困った	日本とは異なる守備に変更、細かい点に順応することに時間がかかる	個人戦術の変更、異なる戦略に順応することへの困難	戦術変更、順応に困難
7	聞き手	移籍した理由は？				
8	原口選手	ヨーロッパの市場へ行きたかった中で、ドイツは日本人が成功（試合に出場しやすい）していた背景もあり、自分が行きやすかった。その当時、香川選手もとても調子も良かったといった背景も背中を押してくれた一つの理由。だから、私も成功できるだろうと思っていた。正直楽だろうなと思ったこともある。	ドイツは日本人が成功（試合に出場しやすい）していた背景、私も成功できるだろうと思っていた、正直楽だろうなと思った	日本人が成功しやすい環境、成功できると確信	先輩の成功、日本人評価が高い、移籍を後押し	先輩の成功、日本人に対する高い評価、移籍を後押し
9	聞き手	ブンデスリーガの魅力は？				
10	原口選手	モチベーションが高い、常にアグレッシブだし、メンタル面で安定している。サッカーという競技に対しての向き合い方が安定している。例えば試合が不利な状況でも心が折れることなく試合に集中している。	モチベーションが高い、常にアグレッシブだし、メンタル面で安定している、	高いモチベーション、メンタル面での安定	選手の高い闘争心、常に戦う状態のメンタルを維持	高い闘争心、メンタルが一定・維持
11	聞き手	日本サッカーの魅力は？				
12	原口選手	母国としての愛着を持てるということが魅力。やはり外国では愛着はそこまで持てなかった。	母国としての愛着を持てるということが魅力	母国としての愛着	日本サッカーへの愛着	日本のサッカーへの熱い想い
13	聞き手	オフの過ごし方は？				

14	原口選手	基本的に週に1日のオフには、試合に出られなかった時はアツシ（幼馴染でドイツ5部でプレーをしていた選手）などと練習をしていた。ドイツでは1日のうちでも午前又は午後のどちらかの半日練習が一般的であるが、試合に出場できない時期はオフの時間帯にもグラウンドに忍び込んでトレーニングをやっていた。 客観的にこのリーグに残るために不足している面を理解していたので、そこを補うために必死で練習した。私の場合は走る能力を強化していた。	試合に出場できない時期はオフの時間帯にもグラウンドに忍び込んでトレーニングをやっていた、リーグに残るために不足している面を理解していた、必死で練習	練習時間以外の時間をトレーニングに費やした、長所を伸ばすトレーニングを意識して取り組んでいた	練習時間外にも練習、自分の長所をさらに強化	必死で練習、長所の強化
15	聞き手	いつから試合に出場していた？				
16	原口選手	34試合中、20試合出ている。最初から試合に出ていたが、開幕戦で怪我をしてしまい1ヶ月間は休んでいた。その後復帰し、3、4試合は出場したが、コンディションが悪くポジションを奪われてしまい、残りの10試合はベンチで過ごしていた。 後半戦になり、その頃初期の段階で Jos Luhukay 監督から Pal Dardai 監督に代わり、最初の5試合はベンチ外で、6試合目で初得点を入れ、残りの8試合はスタメンで出場することができシーズンは終わった。 出場していない10試合は相当練習をしていた。				
17	聞き手	自分の中でモチベーションをキープするものは？				

18	原口選手	浦和に戻れないという思いが一番のモチベーションとなった。浦和レッズでの移籍セレモニーで、チームに結構大きな目標を言ってきたから、そのプライドがそうさせたように思う。 正直、試合に出場できていない10試合はこのまま浦和に戻るのかなって思ったこともあったが、いやこのままでは帰ることはできないと思い返しひたすらトレーニングをしていた。	浦和に戻れないという思いが一番のモチベーション、チームに結構大きな目標を言ってきた、このままでは帰ることはできないと思い返しひたすらトレーニングをしていた	浦和レッズへは簡単には戻れない、浦和レッズのチームメイトに対するプライド	浦和レッズへは簡単に戻れないという思いがモチベーション維持	浦和への思いがモチベーション維持
19	聞き手	ストレスの解消法は？				
20	原口選手	正直ドイツにいる方がストレスを感じない。浦和時代は日本人だからこその独特な人間関係が難しかった。ドイツでは良くも悪くも放っておいてくれるし、サッカーに対する向き合い方も私の場合ドイツの方があっているように思う。 強いというなら、サッカーの面で、チームの監督やGMとのコミュニケーションにおいてはストレスを感じる時も多く、ディスカッションができない時にストレスを感じる人が多いように思う。 何かあれば監督のところへ行って、片言ながらもディスカッションをして気持ちを伝えることを繰り返していた。そうすることで、次の試合ではスタメンで出場したことも、又自分の希望のポジションで出場することができた試合もあった。（とあるようにドイツでGMや監督に自分の意見を通すことはできず、それをストレスに感じるが多かったが、それでも自分の意見を伝え続ける（自己主張を続ける）ことしかないとな本人は解決策はないと認識している。）	ディスカッションができない時にストレスを感じる、何かあれば監督のところへ行って、片言ながらもディスカッションをして気持ちを伝えることを繰り返していた、日本では監督との垣根が高く、一選手が監督と直接何かを話すという文化はない	ディスカッションの重要性。自己主張を繰り返すことが自分の意思表示に繋がる。日本でプレーしていた時にはしなかった監督とのコミュニケーションをドイツでは意識するようになった。言語能力が自国選手より低いので、その分のコミュニケーションを補おうとする姿勢。	ディスカッションの重要性、日本とは異なる監督との関係性	日本とは異なる監督との関わり 自己主張に対する解釈の違いがあるため日本人監督にも同じようなコミュニケーションが通じるだろうか？
		日本では監督との垣根が高く、一選手が監督				

と直接何かを話すという文化はない。しかし、ドイツでは監督に疑問点や改善点を直接聞きに行くことは当たり前で、その行為自体が監督への意思表示となり自分の評価に繋がることもある。そのため。言葉は通じなくとも、何かあれば監督のところへ行って、片言ながらもディスカッションをして気持ちを伝えることを繰り返していた。そうすることで、次の試合ではスタメンで出場したことも、又自分の希望のポジションで出場することができた試合もあった。正直監督と話すことは得意ではないし、慣れてもいなかったがドイツでは積極的に監督の元へいった。

長いミーティングの時はジュンペイさん（トーマスクロート（ドイツ人代理人。ブンデスリーガへ移籍する日本人選手はほぼお世話になっている敏腕代理人）の日本語通訳）にきてもらい内容をしっかりと理解するようにしていた。

例えば、ハ Ril ホッジにせよ一つ前のハノーファーの監督（Andre Breitenreiter 監督）にせよ、私が「左で出たい」と言っても、左も右も変わらないと言われて相手にしてもらえなかった。しかし、自分はこうしたいと何度も主張することで、左で出場できるようになったので、やはりしっかりと主張してディスカッションをして自分をアピールすることはとても重要だと学んだ。

21 聞き手 今後の若い選手にもこの監督への積極的なディスカッションは勧めたい？

22 原口選手 監督側の立場を考えると、正直言葉が通じない選手が積極的に来ることにに対して構えると思う。その場合は通訳を入れてでも監督とコミュニケーションを取るようにした方がいい。

一度のディスカッションが功を奏しても問題はまた次から次へと出てくるから、何か疑問を感じ、不明なことがあれば、その都度監督と話した方がいい。

通訳を入れてでも監督とコミュニケーションを取るようにした方がいい、その都度監督と話した方がいい

何かあれば監督とコミュニケーションをとることが必要

監督との密なコミュニケーションが出場機会の獲得につながる

監督との密な関係性が出場機会の獲得

23	聞き手	監督とのコミュニケーションの取り方は？ 又、特に意識したところは？				
24	原口選手	言葉を話せない分、態度や姿勢という面において隙を見せないように心がけた。（隙を見せないとは、私は集中している、私は常に試合に出る準備ができている、試合に出してくれたら結果を出す状態にある、そう言う選手だ、と言う姿勢を常に表し続けること。「日本にいるときは、常に試合に出られていたからね」と原口選手が言うように、日本ではそういった姿勢を見せなくても、選手としてのポテンシャルが認められていたため、練習からのアピールはそこまで重要ではなかった。） 『こちらは監督をいつもリスペクトしています』という姿勢は積極的に態度で表現するようにした。話せない分、態度で示すしかない！その点において努力した。 例えば、日本代表の試合から戻ってきた際も『疲れていないです、僕は頑張れます！』というアピールをするようにしていた。しかし、監督と握手をした際に（毎朝、選手・監督と握手を交わすことが習慣）、監督は見抜いていたのか、覇気がないと指摘されたことがあった。又、W杯に出て、自惚れているのではないかと言われてしまった。私的には隙を見せないようにかなり意識をしていたつもりだが、監督側も、話せない分、態度や姿勢を細かく観察しているため、少しでも油断すると隙をついてくることもあった。	『こちらは監督をいつもリスペクトしています』という姿勢は積極的に態度で表現するようにした。話せない分、態度で示すしかない！その点において努力した	（カッコの部分が伝えたこととして使えるかも）監督への言葉のコミュニケーション以外にも態度でモチベーションを示すことが重要	監督からの目を常に意識して行動	監督からの評価を意識
25	聞き手	チームの主要・中心選手に対しての関わり方は？				
26	原口選手	ヘルタ・ベルリンの中心選手 1 サロモン カルー 1 イブセビッチ 1 ヴェダド・イビシェヴィッチ（ボスニア代表） あまり選手に対して意識はしていなかった。私はそこに重要性を感じることはなかった。				

27	聞き手	監督の評価も重要だけど、チームメイトからの評価はどう？				
28	原口選手	正直チームメイトについてはほとんど意識をしていなかった。どちらかといえば、ライバルだし、意識しても仕方がないという気持ちの方が強い。特別なものはなく、皆と適度な距離を保っていた。 私は、ヘルタ・ベルリンでは10番目から12番目（試合に出場できるか否かのギリギリのライン）を争っていたポジションだったため、僕がどれほどよくトレーニングをしていて、サッカーに真剣に向き合っているかということを伝える、理解してもらうことが重要だった。	チームメイトについてはほとんど意識をしていなかった、皆と適度な距離を保っていた、	チームメイトであるとともにライバルであるために選手としての距離感を意識していた	チームメイトとの適度な距離を確保	チームメイトとの距離
29	聞き手	日本人選手のいいところは？				
30	原口選手	勤勉さがズバ抜けていると思う。真面目の質が高く、一生懸命だと思う。 そもそも身体的に日本人は劣っているところがあり、また、外国人はそこにおいてとても長けている（足が速い・キック力のパワー、質がズバ抜けている・特別にサッカーが上手い、身体能力が日本人とは比べ物にならないほど高い、など）人が多い中、トレーニングが必要のない選手も多い。そういう選手に対してイライラした時もあった。『もっと真剣にしっかりとやればいいのに・・・』って。でも、徐々にその選手はそのやり方で成立しているのだと認めるようになってきた。でも日本人はそれを真似してもダメなのです。日本人よりもはるかに高い身体能力を持った選手の中でやっていくわけだから、だから練習の仕方と比較する必要もないし、自分は日本人で、自分の身体的能力はこのようなものと客観的に評価して、その能力に合わせてひたすら練習していくしかない。 それをできるところが、日本人の賢さでもあるし、勤勉さでもあると思う。	勤勉さがズバ抜けていると思う、真面目の質が高く、一生懸命だと思う、その選手はそのやり方で成立しているのだと認めるようになってきた	勤勉さと賢さが日本人の特徴、他の選手との比較することに意味はないが、他選手の能力を分析することでドイツ内での自分の能力を客観的に評価できる	勤勉さと賢さが日本人の特徴、外国人選手との違いを冷静に分析	日本人選手のあり方を分析することの重要性
31	聞き手	3チームを経験して、試合中に自分のプレーの特徴を活かすために、間合いのコミュニケーションはどのようにとった？				

32	原口選手	正直ね、これは難しい。何度も自分からアピールしたが、自分の望むようにチームメイトはパスをくれることはなかった。 だから、試合中に間合いなど細かいことを意識して一喜一憂するよりは、ひたすら試合に集中する方が賢明だと思うようになってきた。				
33	聞き手	そのアピールでチームメイトの変化はあった？				
34	原口選手	何も変化しなかった。外国人は自分のプレーを変えるなんてできないと思う。 日本人だったら、その点においても主力選手に合わせて試合を進めていくことが多く、そういう点で協調性があると思う。そう思うと、日本人ってすごいよね。	主力選手に合わせて試合を進めていくことが多く、そういう点で協調性があると思う	日本人は主力選手に合わせてプレーする	日本人の協調性の高さ	日本人の協調性の高さ
35	聞き手	チーム内での、自分の存在感をアピールするためにしてきたことは？ 又、自分のチーム内での地位の築き方は？				
36	原口選手	色々な選手にまんべくなく接していた。練習中に、やりあった時は自分から謝り、声をかけたりしていた。待っていても相手からは声をかけてくれることはなく、自分から動くしかないと思う。 ドイツ人と日本人って自分からアクションを起こすというよりは、相手の様子や動きをしっかりと観察してからその人を判断するという点において何となく似ている気がする。 移籍して半年くらいは様子を見られていると感じていた。だから、ドイツ人に対しては特に自分から話しかけるように心がけた。スペイン人やラテン系の選手は比較的気軽に誰とでも接するという特徴があり、外国人選手はその点においては意外とラフな感じで気を使わなくてよかった。	ドイツ人と日本人って自分からアクションを起こすというよりは、相手の様子や動きをしっかりと観察してからその人を判断する点において何となく似ている、ドイツ人に対しては特に自分から話しかけるように心がけた	ドイツ人選手への積極的なコミュニケーションをすることでチームに溶け込むという意味を示した。	ドイツ人の特徴を把握し、自分の行動を考える	ドイツ人を観察、分析
37	聞き手	チームの順位で出場時間の変動はあった？				

38	原口選手	完全に干された時があった。まあ、それは私が移籍の意思をチーム・監督に伝えた後にその移籍が失敗に終わってしまい、当然な話ではあったけどね。代理人とのコミュニケーション不足。完全に私のミス。もう少し別の伝え方があった。 監督は延長を希望してくれ、またとてもよくしてくれたのに、移籍するなんて言われたらいい気はしないのはわかる。完全なる私のミス。移籍の話で拗れて干されるって話はよくあるよね。香川選手、長谷部選手でもそのような話を聞いたことがある。 一度は移籍関連でのトラブルはあるように思う。日本ではこういうトラブルは少ないけれど、海外では完全なるビジネスだからね、少しでも自分を高く売るという感覚は強い。そういう意味でのプロとしての意識というか、駆け引きという点において、日本人は劣っているよね。	私が移籍の意思をチーム・監督に伝えた後にその移籍が失敗に終わってしまい、代理人とのコミュニケーション不足。完全に私のミス。もう少し別の伝え方があった、海外では完全なるビジネスだからね、少しでも自分を高く売るという感覚は強い	移籍時のチームサイドとのコミュニケーションの重要性。選手の移籍に移籍金を発生させないことも多い日本の移籍市場とは違い、ドイツは移籍する際に、移籍金を発生させることは当たり前なため契約を延長せずに移籍を主張すると試合に出場できなくなることもある。	移籍時の代理人とのコミュニケーションの重要性、日本と異なる市場への意識	移籍時の代理人の役割
39	聞き手	監督に対して自分の地位を確立するためにしたことは？それぞれの監督へのアピールは？				
40	原口選手	一番は積極的に話に行くこと、試合に使ってもらえない状況でもリスペクトの気持ちは伝えつつも、悔しい思いを練習・トレーニングの仕方であえていた。				
41	聞き手	今後、若手選手が渡独する際に最も伝えたいことは？				

才能がある選手であればある程、注意が必要だと思う。必ず挫折するということを覚悟してから行く必要がある。

日本では通用したことでも、予想をはるかに上回る才能を持っている選手がたくさんいる。それらの選手を目の当たりにして、それでも冷静に自分を客観的に評価して自分には何が不足しているかを見極めて努力する必要がある。その選択が正しければ、結果として成功したということになる。

正直、今まで多くの才能のある選手が海外へ渡っているが、それらの選手の中でも、才能の歴然とした差を目の当たりにし、受け入れることができず、日本に戻ってきた選手も少なくはない。

日本に戻るのか、何かを変えなくてはいけないのか、この強さの中で勝負したいのか、その環境・状況を受け入れてその中でもがきながらも頑張るのか、その判断、選択を間違えないことが重要だと思う。

私は正直全てを変えた。

私の場合は攻撃の部分で勝負した。サイドからドリブルでチャンスを作る選手だったが、なんでもできるタイプにならなければいけないと思い守備もシュートもパスもできるように努力した。

でも正直今の段階でもその答えは正しかったのかどうかもまだわからない。まだ模索中でもあります。

予想をはるかに上回る才能を持っている選手がたくさんいる、冷静に自分を客観的に評価して自分には何が不足しているかを見極めて努力する必要がある、

日本では通用していた自分のストロングポイントだけではなくか通用しないことがある。自分のプレースタイルを変化させて行くことが試合に出場することにつながることもある。

相対的評価をし、自分のプレースタイルの見直す

自分のプレースタイルの見直し

第4項 大迫選手

1) プロフィールとブンデスリーガでの活躍の概要

2009年に鹿島アントラーズに入団しプロサッカープレイヤーとなり、その後、2014年にブンデスリーガのチームに移籍した。ポジションはフォワード。公表されている身長は182cm、体重71kg、利き足は右足である。

プロとしての所属チームは、2009年から2013年は日本の鹿島アントラーズ、2013/2014シーズンはドイツのTSV1860ミュンヘン、2014/2015-2017/2018シーズンはFCケルン、2018/2019シーズンからヴェルダー・ブレーメンに所属した。(表14)

表14 大迫選手のキャリア

チーム名	国	所属シーズン
鹿島アントラーズ	日本	2009-2013
TSV1860ミュンヘン	ドイツ	13/14
FCケルン	ドイツ	14/15-17/18
ヴェルダー・ブレーメン	ドイツ	18/19-

シーズンごとの出場時間と出場試合数

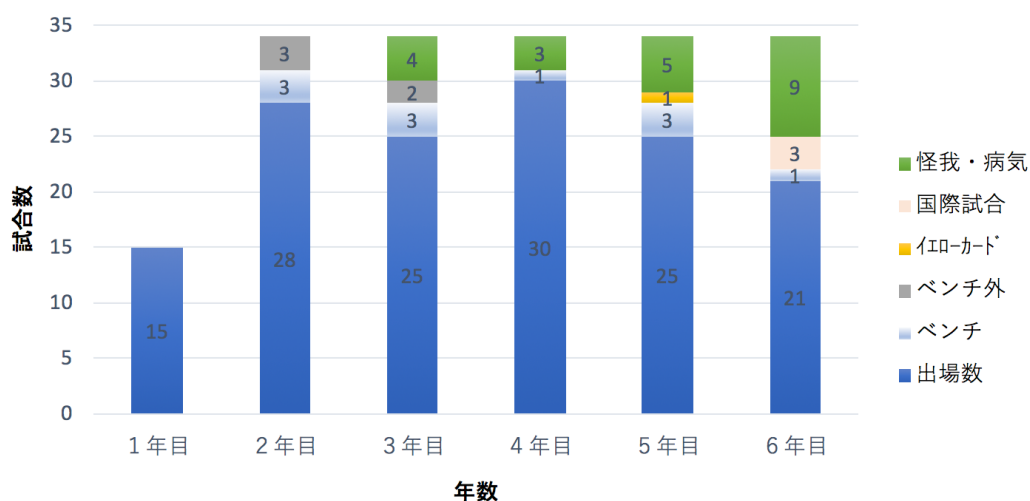


図22 大迫選手 出場・欠場理由

ブンデスリーガでの活動状況

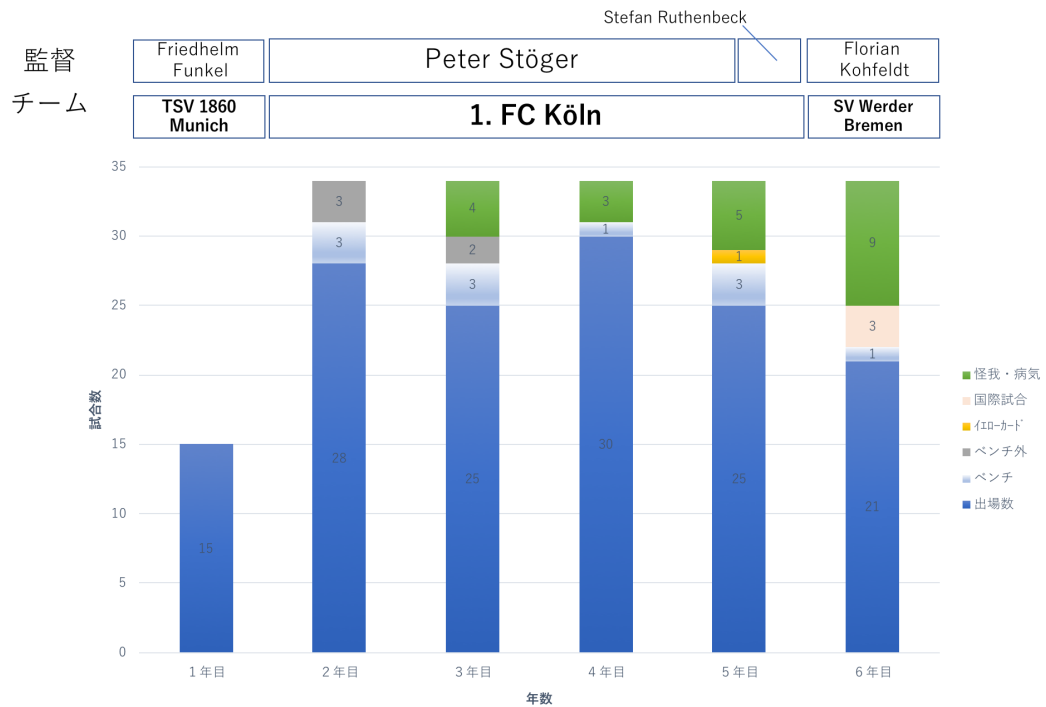


図 23 大迫選手 チーム・監督別出欠場比較

インタビュー調査結果

加入シーズンの1860ミュンヘンは得点数が少なかったということもあり、チームでは主に得点が求められ、加入した。冬のシーズン途中からの加入であったが、全試合にスタメン出場を果たし立ち位置も中心選手と言えるものであった。

13 / 14 TSV1860ミュンヘン 15 試合 (1329分)

✕: ベンチ外 べ: ベンチ

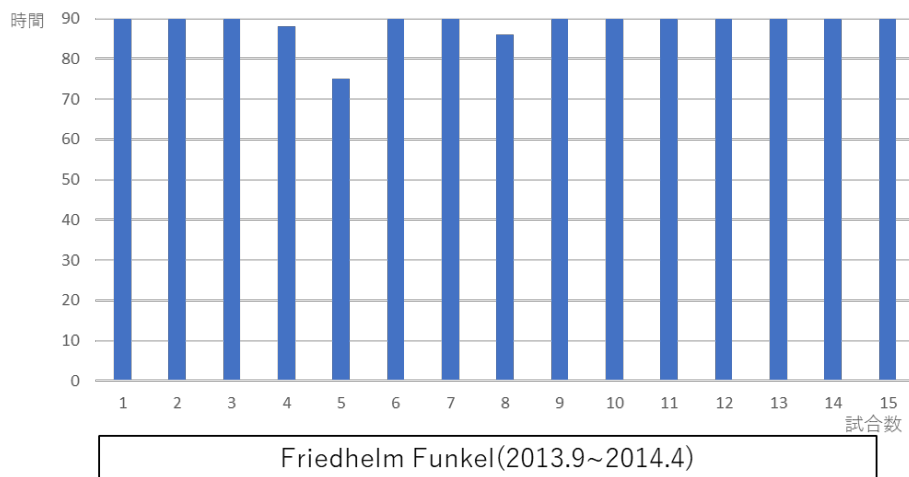


図 24 大迫選手 13/14 シーズン出場時間

2部である TSV1860 ミュンヘンは2部であったため、ドイツでの評価はまだ確実なものにはなっておらず、また 1.FC ケルンが移籍時に2部から昇格したばかりであったため、守備的に非常に重点を置いたサッカーであった。本人も自身のイメージを変えるためにトレーニングから意識をしたというように、また出場時間を見てもシーズン前半戦はポジションを確保したとは言えなかった。しかしシーズン終盤に向けてスタメンの座を確保した。監督とのコミュニケーションにも監督の信頼が表れており1部での環境に順応していったと言える。

14 / 15 FCケルン 28 試合 (1520分)

✕: ベンチ外 べ: ベンチ

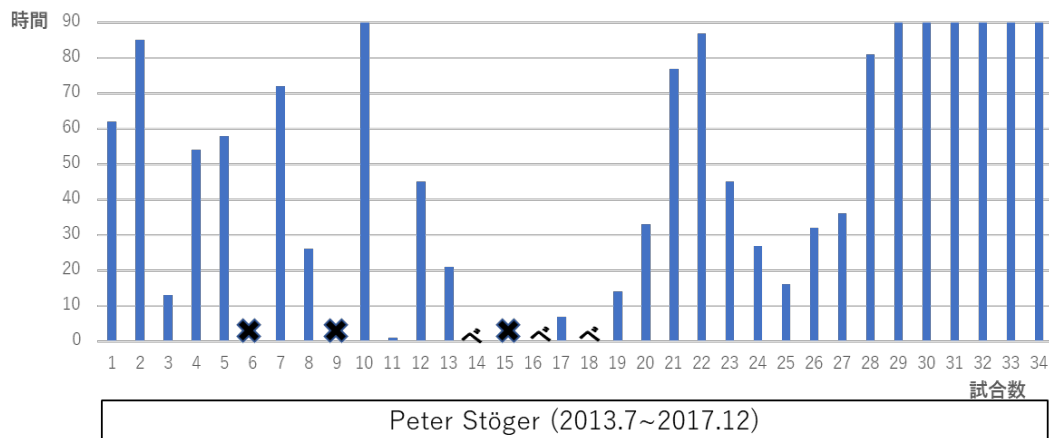


図 25 大迫選手 14/15 シーズン出場時間

FC ケルンでのドイツ 4 シーズン目は 30 試合で 7 ゴール、8 アシストと目に見える結果で活躍を証明した。出場時間、結果ともに充実したシーズンであった。

15 / 16 FCケルン 25 試合 (1340 分)

✕: ペンチ外 ペ: ペンチ

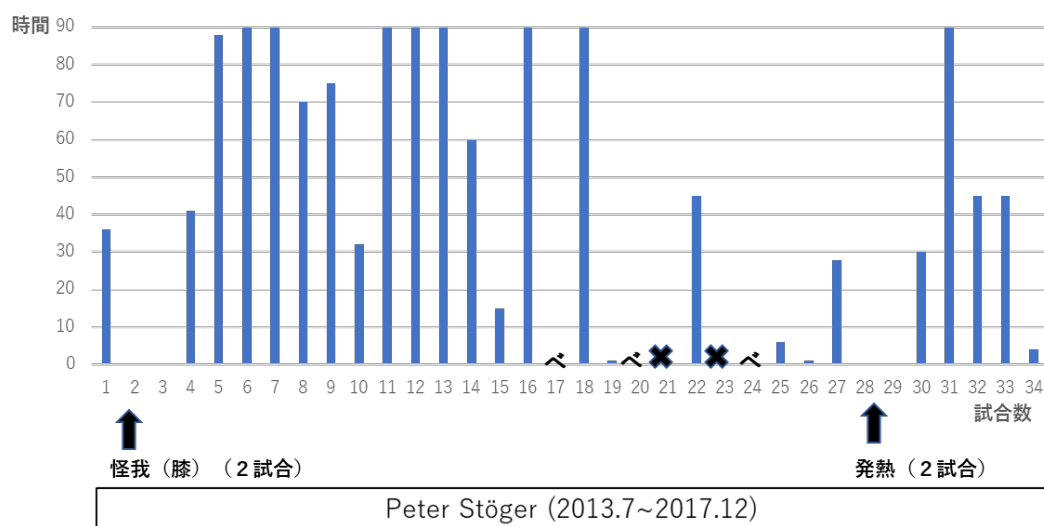


図 26 大迫選手 15/16 シーズン出場時間

16 / 17 FC ケルン 30 試合 (2374 分)

✕: ペンチ外 ペ: ペンチ

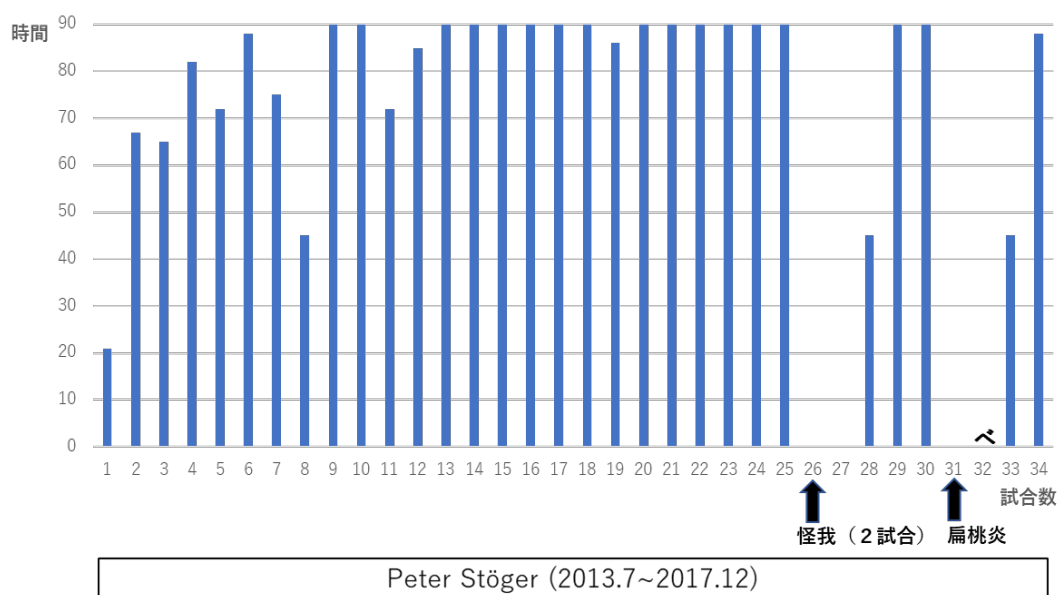


図 27 大迫選手 16/17 シーズン出場時間

5 シーズン目は、チームの得点源であり大迫選手とツートップを組んでいたモデスト選手が移籍したこと、前年度の結果からヨーロッパリーグへの出場が決まり試合数が増えたことなどが関係してリーグ順位を落とし、監督が途中で解任された。

17 / 18 FCケルン 25 試合 (1905分)

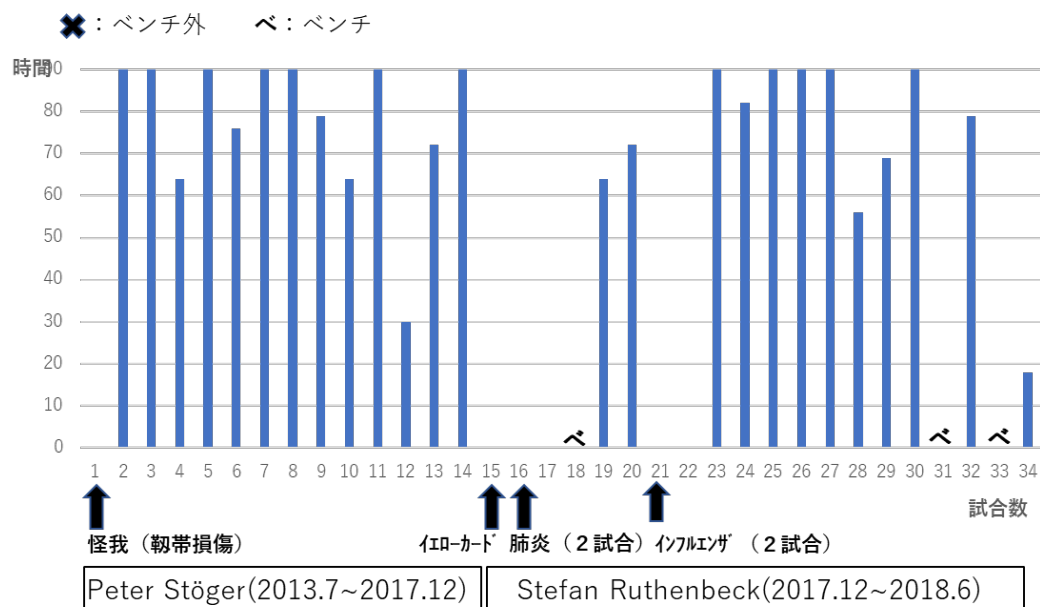


図 28 大迫選手 17/18 シーズン出場時間

ブレーメンの大迫選手獲得は監督の要望であり、また移籍前に監督とのミーティングをして戦術的理解を深めた。また具体的な起用方法も話すことができたので、移籍が非常に現実的なものになった。移籍に関しては、大迫選手と代理人の関係も非常に順調にしていることが伺えた。

チーム加入後は FC ケルンに移籍した時とは状況が異なり、チームメイトは大迫選手のプレーをすでにわかっていたためにパスがよく出てきたという。チームへの順応も非常に早かったと言える。

18/19 ヴェルダー・ブレーメン 21試合 (1350分)

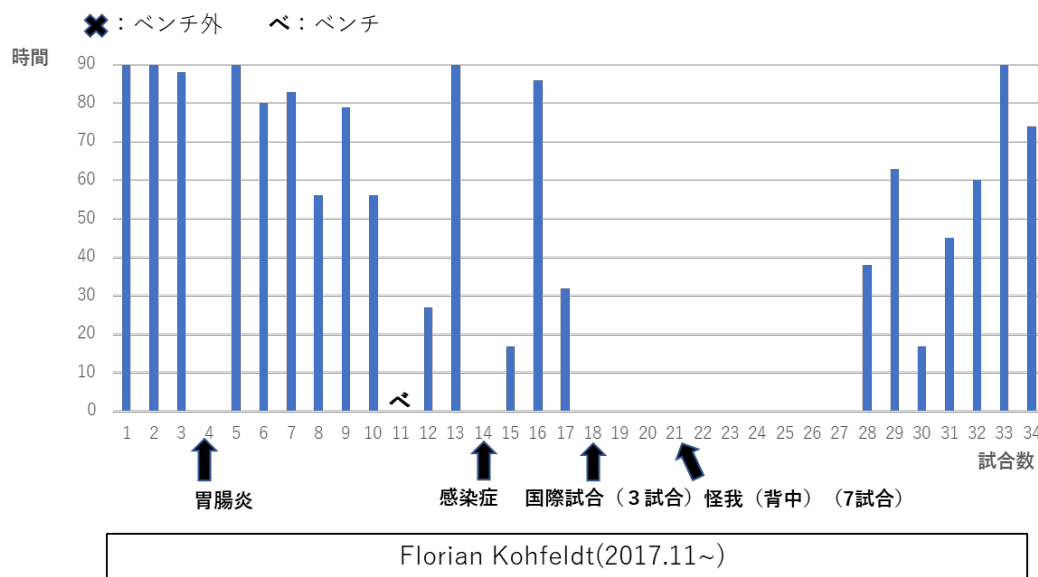


図 29 大迫選手 18/19 シーズン出場時間

2) インタビュー内容

大迫選手のインタビュー内容をストーリーラインで示すと以下の通りであった。

<信頼できる代理人との出会い>があり、事前に GM と監督から具体的な起用方法の説明があったことで<移籍後のイメージが明確化>できたことで、海外移籍を行った。また、チーム加入後、何名かの監督の下でプレーをしたが<監督によって戦術が大きく異なる>ことから<監督が選手に対して何を求めているかを理解>に努めプレーすることで<監督から信頼を得る>ことが安定して試合に出場することに繋がっていた。大迫選手はケルンで一定の結果を出していたので<他チーム選手から認知されていた>ことでブレーメンに移籍後もすぐにチームメイトが大迫選手のプレーに合わせてくれ順応が早く結果を出すことができた。

ストーリーラインを生成につながつた SACT 分析の内容を表 15 に示す。

表 15 大迫選手のインタビュー内容の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
1	聞き手	ミュンヘンに入る前に、監督・GM から話し合いはありましたか。					
2	大迫選手	あったよ、ミュンヘンに試合を見に行っただよね。代理人と一緒に。ちょうどフランクフルトにアウエイの試合で、フランクの直行便で行って、空港で監督と GM と話をして、試合をみて帰ってきた。初めから試合に FW として使うということで話があった。	ミュンヘンに試合を見に行く、代理人と一緒に、空港で監督と GM と話、初めから試合に FW	加入予定チームの試合を事前にみる、獲得決定権者(監督、GM)と会う、加入直後から起用の約束を提示される	チームからの強いオファーがある(会いたい、加入して欲しい)	初回面談から具体的起用方法を示すほどの監督と GM の強い熱意	代理人はこの時にどのような依頼があったのか
3	聞き手	実際、監督はどうでしたか？					
4	大迫選手	今思うと、何にもない監督だった。やはり 2 部の監督は 2 部の監督。やはり 1 部の監督とは違うっていうか。GM 含め、監督含めレベルがあるというか。その時はわからなくて必死だったけど、今思い返せばそうだよな。	何もない監督、2 部の監督は監督、GM 含め監督含めレベルがある	2 部の環境、1、2 部にレベルの差がある	1 部と 2 部の監督・GM のレベルのギャップ	1 部と 2 部のレベルの格差が歴然	事前に監督・GM のレベルを評価する方法はあるのか。代理人の評価はどのようなものか
5	聞き手	監督に求められたポイントはなんですか？					
6	大迫選手	やっぱ点だよな、点数を。話をした時に、FW がいないと。得点数がなかったから、だから得点数を増やしたいと言われた。	得点数を増やしたい	得点を取る選手	得点を取る選手が必要	監督からの高い評価	
7	聞き手	そして、FC ケルンへ移籍したんですよね？その時の監督の傾向はどうでしたか？					
8	大迫選手	落ち着いている感じだよな。毎日同じことを同じだけやる大切さをあの監督は求めているよね。	毎日同じことを同じだけやる大切さ	ルーティンの重要性	ルーティンワークをこなし、確実に勝利につなげる	試合に勝利(基本的なことを確実にこなす、ミスをしない)	
9	聞き手	戦術・戦略的には？					

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
10	大迫選手	やはり、守備重点だったよね。上がったばかりだから。守備をできる選手をおいていた。	上がったばかりだから。守備をできる選手をおいていた	1 部に昇進したばかり、守備が重要	点数を取られないように守備を強化	失点数の減少を強化、順位の維持	
11	聞き手	途中出場で使われていた時、1年目に意識したことは？					
12	大迫選手	いや、もうやるしかないからね。どう自分のイメージを変えるかしかなかったからね。プレーの中で見られる目を変えなきゃいけないからね。あいつ戦えるな、やれるなって感じてもらうのが一番だからね。毎日の積み重ねだけだね。特に最初のシーズンはその点において苦労したよね。日本人はナメられるからね。	どう自分のイメージを変えるか、あいつ戦えるな、やれるなって感じてもらう、毎日の積み重ね、特に最初のシーズンはその点において苦労したよね。日本人はナメられるからね	自分の印象の改革、日々の努力、日本人の印象	国籍における偏見の存在、実力を評価してもらうための努力	国籍における消極的な偏見の存在、偏見の払拭・試合に出場を目的とした努力の重要性	全ての監督・選手が日本人選手に対して消極的なイメージを持っているのか、どのようなイメージか
13	聞き手	監督が求めていたことは？					
14	大迫選手	戦える選手を求めていたよね、あの監督は。サッカー的には、まだ1部に上がったばかりだったから、リスクというよりは気持ちと頑張りで乗り越えようとしていた。その点で苦労したよね。下位のチームにいる苦労。	リスクというよりは気持ちと頑張りで乗り越えよう、下位のチームにいる苦労	繊細かつ高度なテクニック、強度な身体能力、下位にすることで戦術が異なる	高度なテクニックを用いての攻撃よりも点数を取られないように体を張ってでも守備に徹する	失点を防御する選手を評価、下位チームの戦術	
15	聞き手	ミーティングとか戦術的には何かありましたか？					
16	大迫選手	戦術はなかったよね。お前の感じるようにしてくれと言われていた。自分のやりたいようにやれって言われていた。	戦術はなかった、自分のやりたいようにやれ	戦術はない、選手の意思に任せる	選手の技術を評価	選手の技術を高く評価	
17	聞き手	3シーズン目に監督からの信頼が変わって					

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
		きた？					
18	大迫選手	そうだね。					
19	聞き手	4シーズンではモデッセとツートップを確立して、その時も戦術的なものは変わりませんでしたか？					
20	大迫選手	基本変わらなかったな。 ポジションはトップ下。 ある程度自由にやらせてもらっていた。 5シーズンに入ってから、前半あまりうまくいかなかった。					
21	聞き手	監督が変わった時、新しくきた監督はどうでしたか？					
22	大迫選手	練習をめちゃくちゃするし、熱というか典型的なドイツ人だった。	練習をめちゃくちゃする、典型的なドイツ人	練習熱心、モチベーター	モチベーターとしての要素の高い熱い指導者	選手のモチベーション能力の高い監督	
23	聞き手	戦術は？					
24	大迫選手	特になかった。それよりも皆のイメージを変えようという感じだった。良くはなかった。正直。	皆のイメージを変えよう	マイナスイメージを一新	負け続けている中、負のスパイラルから脱出	負け続けている状況での監督交代	
25	聞き手	監督が変わった時、評価は変わらなかった？					
26	大迫選手	最初、評価は良くなかった。しかしけが人が多かったから、俺も体調を崩したし、ヨーロッパリーグもあったから色々大変だったよ。 怪我人が12人くらい出て、ヨナスも怪我したし、足首だったかな？ この時は、肺炎で4試合休んでるよね。					
27	聞き手	移籍は？					

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
28	大迫選手	ケルンが悪い時に、冬にブレーメンからオファーがあって、流石にケルンが悪い時にハーフで移籍できないよね。なので、残りのハーフはケルンに残ってやると言っ、3チームくらいからオファーがあったから、ブレーメンの監督と1時間くらい話して、監督がこういうサッカーを目指している、戦術的にね、俺がきたらここに入ってこういうプレーもできると。本当に細かい話を二人で、サッカーの戦術を話していた。	流石にケルンが悪い時にハーフで移籍できない、ブレーメンの監督と1時間くらい話して、監督がこういうサッカーを目指している、戦術的に、俺がきたらここに入ってこういうプレーもできる、細かい話を二人で、サッカーの戦術を話していた	ハーフでの移籍を断る、監督との直接対話、戦術の具体化、大迫選手を入れての戦術	移籍予定チームの監督と会う、チームから強いオファーがある	具体的起用方法を示すほどの熱意	他のチームを断ってブレーメンにした理由は？他チームの監督はどのような口説きをしたのか。
29	聞き手	結構戦術を持っている監督だった？					
30	大迫選手	うん、すごいよ。いい監督だと思うよ。ブレーメン次いいところへ行くんじゃない。	いい監督、次いいところへ行く	戦術的な監督、監督としての評価が高い	戦術的、戦略的指示を選手に明確にできる監督	選手から高い評価を受ける監督	
31	聞き手	いくつくらい？					
32	大迫選手	35か6かな。結構若いね。面白いよ。	結構若い	監督にしては若い	ブンデスリーガ監督としてはかなりの若手の方	若い監督、評価の高い監督	
33	聞き手	どのような戦術なの？					
34	大迫選手	日本人が好きそうな足元で繋ごうとするよね後ろから。ポジショニングはすごくうさ。絶対に間は取れと。全員間のポジションを取れば絶対にからって考えの監督だから。	日本人が好きそうな足元で繋ごう、ポジショニングはすごくうさ	ポゼッションを重視して細かいパスで繋ぐ、細かいポジショニングを重視	ポゼッション重視の戦術、指示が細かい、選手間のギャップのスペースを重視	細かい指示、試合に対するイメージの明瞭化	

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
35	聞き手	今のフォーメンションは？					
36	大迫選手	トップ下したり、前やったり。 面白いよ、監督の考え方は。相手に対してのプレッシャーのかけ方とか毎試合違ったりするの。相手によって。前の二人が追い込むのではなくて、両サイドウイングが最初追い込み出したりとか。最初に外からプレッシャーかけたりとか。外から中に。普通は中から外じゃない、日本の考え方って。中に入れさせないって。センターバックが持ったら、サイドハーフがセンターバックに外から中にプレッシャーかけて、前の二人がボランチ消して、追い込んで。色々面白いよ。	面白いよ、監督の考え	監督の戦術が面白い	監督の戦術をピッチで体现できる、既存のセオリーとは異なる	独特な戦術と戦略	
37	聞き手	それって、試合で機能はするの？					
38	大迫選手	機能するよ。相手も慣れてないし、結局ボランチ経由だから、追い込み方は簡単だね。	機能する、慣れてない、追い込み方は簡単	守備が機能する、相手が慣れていない守備、ボランチ選手を抑える追い込み	既存のセオリーと異なる守備、ボランチの選手を抑えるため比較的簡単	セオリーと異なる守備、難易度は低い、相手選手を翻弄しやすい	
39	聞き手	ウジャとか守備があまりできなかったよね・・・？ そういう選手はいないの？	ウジャ、そういう選手	国籍の異なる選手、守備に関して異なる戦術を持った選手	国によって選手によって異なる守備意識や個人守備戦術、連動した守備ができない可能性が大きい	戦術の異なるチームメイトにより守備の戦術が機能しない	
40	大迫選手	いないね。みんな賢いし。	みんな賢い	その場の流れを読むことができる	仲間のプレッシャーを見て連動して守備をする賢い選手	臨機応変な守備が可能、守備を連動させるチームメイト	
41	聞き手	それって、GM がチームビルディングをしてるの？	GM がチームビルディング	GM がチームを組成	GM による選手獲得や組成	チーム編成にGM が大きく関与	

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
42	大迫選手	GM と監督かな。監督も欲しい選手を欲しいって言ってるし、GM もそれに答えている感じがかな。	GM と監督、監督も欲しい	GM と監督の意見の合致	選手獲得に監督と GM の意見の合致	監督の意向が選手の獲得に大きく関与	
43	聞き手	監督発信もあるんだね？					
44	大迫選手	俺は監督発信だったから。監督が会いに来てくれて。でもそれは分かれていると思う。	監督発信、それは分かれている	監督・GM 共に獲得決定権	監督・GM 双方の意向で獲得	監督も GM も選手獲得に大きく関与	意見が分かれる時はないのか
45	聞き手	GM はどのような人なの？					
46	大迫選手	穏やかな人よ。					
47	聞き手	いくつくらいなの？					
48	大迫選手	50手前くらいかな。ブレーメンのレジェンドよ。キャプテンでずっとやっていた人。そこの連携がしっかり取れていて、しっかりしてるよね。ケルンてさ、人間関係って複雑だったじゃん。慌ただしいというか・・・上のね。GM とか・・・いつも何か問題があるチームじゃん。それがない感じがかな。ちゃんとしてる、人間的に。 うーん、なんかいいチームそうだね。	ブレーメンのレジェンド、連携がしっかり取れていて、	ブレーメンで選手として活躍してきた監督、選手が求めていることがわかっている	そのチーム出身の選手が監督として活躍している、選手の気持ちがわかることが多い	選手から監督になるケース、選手側の理解が可能	チーム出身の選手が監督になり活躍しているケースは他にはないのか

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
49	聞き手	大迫選手は指導者を考えてるの？					
50	大迫選手	まだ全然・・・					
51	聞き手	大迫選手は移籍の場合どうしているの？					
52	大迫選手	まあ、基本は俺が決めるかな。最後は選択肢は俺に委ねてくれるけど、結局俺がこっちのチームの方がいいなと思ってたら、代理人もそう思ってくれているわけよ。だから、移籍などに関しては心配はしてないけどね。	俺が決める、俺に委ねて、代理人もそう思っ	大迫選手が決める、代理人も同様の意見	選手と代理人の判断基準の合致、代理人への信頼が厚い	信頼できる代理人との出会い	代理人の人数は豊富なのか、複数の代理人から選択できるか
53	聞き手	監督とかと前に実際にあって話せるとかないの？					
54	大迫選手	それは監督が要望しているの？ それは、うちの代理人が勇也はまだ迷っていると、だからもしあれだったら監督から話してみれば？的なことを言ってくれているんだと思う。色んなことを聞きたいって。それで俺が1時間くらい話して、っていいよね。 理想的な移籍だね。 めちゃくちゃ頭使うけどね。1時間ドイツ語で話すのって。	代理人が、監督から話してみればと言ってくる	代理人の役割	代理人による監督とのミーティングのセッティング	有能な代理人による移籍後のイメージの明瞭化	代理人と日常的に会話やコミュニケーションをとっているのか
55	聞き手	移籍してチームの中心選手との関わりってコミュニケーションとかってどんな感じだった？					
56	大迫選手	みんな俺のことを知ってくれていたからさ、ケルンでのプレースタイルとか、なんかかわってくれていたから楽だったよね。出してくれるし、パスを。 うん、ドイツへ行って初めましてじゃないもんね。 そう、初めましてじゃないから、対戦もしてたし、点も取ってたからブレーメンとの試合で、そういうのもあってイメージもみんなからは良かったと思う。	みんな俺のことを知ってくれていた、楽だった、イメージもみんなからは良かった	大迫選手のことを皆が知っている、印象が良かった	選手のプレースタイルの周知、移籍直後から信頼を獲得	周囲からの評価の確立	

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
57	聞き手	この監督、フローさんのミーティングとかの特徴はある？					
58	大迫選手	映像を見せて、その相手のフォーメーションに対して自分たちの立ち位置はここっていう映像を絶対に見せる。相手がボールを持っている時の自分たちの守備位置はこうっていう。で、相手がボールを持った時の自分たちの立ち位置がこうだから、自分たちはこう立つってマーカ儿的な感じで映像の中にポンポンポンとされているね。で、プレッシャーをかけるとか、そういうやっぱ細かいね、プレッシャーをかけることに対しては細かいかな。あとは、ボールを持った時、センターバックとキーパーがボールを持った時にどういう守備をしてどういう立ち位置でスタートするか、動き始めるかって、みんなそれを考えさせられるね。ボールを持った立ち位置を確認して、それが防がれてしまった時ってどうするの？そしたら、ベンチから指示が出る。ここが空いてるからって。でもだいたいいいけるな。だいたいそれも見越した上でのことだから。本当にいけない時は紙を渡されるから。それでフォーメーションを変えて、またはめに行く。	映像を見て、相手のフォーメーションに対して自分達の立ち位置、プレッシャーをかける、やっぱ細かいね、みんなそれを考えさせられる	映像を見て戦術、ポジショニングを確認する、選手本人にも考えさせる	ポジショニング・戦術の明瞭化、戦術的にうまくいかなかった場合の変更点	戦術、ポジショニング、守備全てにおいて明確化の有効性	
59	聞き手	その落とし込みのトレーニングはどんな感じのリズムというか、例えば月曜オフでとかそういうのは？					
60	大迫選手	土曜日が試合だと日曜日にリカバして、月曜日が休み。で火曜日が2部練、毎週2部練。10時から筋トレして、軽くほぐして体、で午後にゲームをしたり4対4試合して、水曜日もちょっと落として。落としてって言ってもボゼッションゲームとかして終わるかな。で、木曜日がその非公開で相手に対してのはめ方。					
		ミーティングしてから行く感じ？					

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
61	聞き手	ミーティングはしない、練習前にみんなピッチに配置について、ここでボールを持ったらこうかけるとか、そういうやり方かな。それでその後ゲームをして、金曜日前日練習だから、金曜日はスプリントを入れてちょっとボール回しをして、11対11のペナペナの大きさでゲームを8分2本くらい。 で土曜日試合だね。 ミーティングは非公開の日の前にやるの？					
62	大迫選手	非公開の前の日のミーティングはセットプレーのミーティングしかない。木曜日セットプレーもやるか。そのはめ方とセットプレーの練習だね。はめ方はグラウンドの中でマグネットとか使ってやるから。 では映像的なものはあまり見ないの？ 映像はもう金曜日の夜にホテルに集合するから、そこで見るね映像。ま、その週相手に対してのことを個々に話し合いながら、次の相手はこういう感じしてくるから、俺らはこういう風に、前2枚で、もしくは3枚でこうするから、って色んな選手と話しているから、だからみんな頭の中にある程度はイメージできているよね、準備のイメージは。	だからみんな頭の中にある程度はイメージできているよね、準備のイメージは。	各選手が試合に対する戦術がイメージできる	試合に対する戦術をイメージしやすい環境作り	実際の試合のイメージの明瞭化	

第5項 各選手の共通点

協力が得られた細貝選手、内田選手、原口選手、大迫選手の4人のインタビュー調査で共通していた点は次の通りであった。

【監督】

4選手のブンデスリーグでの活躍シーズンと監督は図29の通りで4選手が関わった監督は16人で、Luhukay, Darudai, Funkelの3人は複数の選手に共通の監督であった。また内田選手は2度、Keller監督の下でプレーをしている。

	10/11		11/12		12/13		13/14		14/15		15/16		16/17		17/18		18/19	
細貝		L			*	*	L			D		*						
内田	*		*		*	K				*	*		*	K				
原口									L	Di						F	*	*
大迫						F		*						*	*			

図 29 4選手の在籍シーズンと監督

L: Luhukay D: Darudai F: Funkel K: Keller

*: その他の監督

【チーム選びで意識したこと】

① チーム加入前の監督との話し合い

この点においては、細貝選手と大迫選手が共通している。

大迫選手は TSV1860 ミュンヘンへ移籍する際に、監督と直接会話をし、移籍を果たしている。その後も移籍するたびにそのチームの監督とのコミュニケーションの質を向上させ、その分信頼関係も構築、向上しているといえる。

細貝選手は1人の監督との信頼関係を深め、その監督のいるチームへ移籍していることから移籍前にそのチームの情報を共有しているように思われる。

長澤はアマチュアからの練習参加だったので、練習後にグラウンドで監督との話し合いが行われた

② 移籍確定前のチームとの次シーズンの方向性に関する話し合い

内田選手は代理人を通して、監督の特徴や、移籍後の起用方法、チームの方向性として今いるサイドバックが移籍してそこに入るという具体的なチームの方向性を示されていた

原口選手は逆に、移籍確定前にチームに移籍の意向を示し、そこから半年間、ほぼ試合に起用されなくなってしまった。

監督からは失望の言葉をかけられた。それまでの出場履歴と起用方法を考えたら、出場機会損失は移籍確定前のチームとの話し合いによるものであるのは明確だ。

【チーム加入後に意識したこと】

①監督の戦術理解から信頼関係構築

チーム加入後

内田選手は7人の監督の特徴をそれぞれインタビューで述べた。監督の特徴をよく理解していたのを記憶している。

大迫選手も監督の特徴に合わせ、練習からのプレーを意識的に変えていた。

②チーム内での自身の立ち位置の獲得

【海外挑戦に必要なこと】

・精神力（負けない気持ち、自分を売り込む主体性）

内田選手がブンデスリーガ挑戦の際に長谷部選手から「折れないでやることが大事」と言われている。内田選手自身も「結局は根性だ。」と述べるように海外で活躍するためには強い精神力が必要である。大迫選手も加入当時は、フィジカルコンタクトの激しいブンデスリーガでボールロストを経験したが、この経験をバネに現在では、「ボールをキープすることが上手な選手」という評価を受けている。

原口選手は、練習中はもちろん、クラブハウスで気軽な挨拶においても、また監督との目の合わせ方まで意識を巡らせた。

細貝選手は監督の起用に応えるということが良いプレーをする大きなモチベーションになっていた。

以上より、ブンデスリーガにて活躍している選手において強靱な精神力が共通点としてあげられ、言葉が通じないという弱点をも強みに変えてしまう能力が伺えた。

第3節 ブンデスリーガで活躍した選手の共通点

4人の選手のインタビュー調査の共通点が他のブンデスリーガで活躍した選手にも共通するかどうかについて、香川選手のインタビュー調査、長谷部選手他4選手の文献調査と筆者の経験をもとに検証した結果は次の通りであった。

第1項 移籍前の行動や考え方

香川選手インタビュー結果

- ・ドルトムントのスカウトが3、4回セレッソの試合を見にきてくれていて3、4クラブからオファーがあったが、ドルトムントは1番熱烈で興味を持ってくれたから、それで行くことになった。
- ・代理人は、本当に選手のためを思ってやってくれる人が重要。あとは最終的なところは選手が誰と出会って、その出会いからいい信頼関係を築いて、その人を信じて一緒にやっていく。
- ・移籍マーケットのことも含めて若い選手は理解することが重要。
- ・外国人、その国の代理人、強い代理人はコミュニケーションがクラブと取れており、監督と、ヘッドコーチと、オーナーと直接話ができるので、日本人の代理人よりも良い部分もある。
- ・10代の若い選手が自分一人でできるわけじゃないから、周りにいる人たちがいい方向に持って行ってあげられるかが大事になってくる

インタビューした4選手と他選手の結果の統合

移籍前においては事前情報を有能で信頼できる代理人から得た。日本とは違う市場へ挑戦するためのノウハウやチームに関する情報量が豊富で、チームとの調整力がある代理人に出会えたことがブンデスリーガへの移籍につながっていた。

さらに移籍前の交渉段階では監督との交渉を行った。その過程において監督との信頼関係を構築し、戦術の特徴把握、監督やチームのニーズを把握した。自分の考えを伝えるとともに監督の考え方を引き出すことが必要で、主体的に自己を売り込む交渉力やアピールできるコミュニケーションスキルが必要となる。

第2項 在籍後の行動や考え方

香川選手インタビュー結果

- ・監督が最終的に決めるわけで監督も人だから、どううまくコミュニケーションとるか、監督のやりたいことを体現するのもそうだし、そういうところで信頼を掴むことが重要
- ・(クロップ監督から) 攻守の切り替えとプレッシングは今のリバプールもそうだけど、やっぱりそこは徹底されていたから、要求はシーズン通して唯一言われ、これを実行できて、起用され続けた。

文献調査

長谷部選手

・闘志を再燃させた長谷部は、欧州リーグ（EL）マルセイユ戦で4試合ぶりにピッチに立つと、フル出場で勝利に貢献。チャンスをつかみ、以降も安定したパフォーマンスを見せ続けた。「もしマルセイユ戦で出来が良くなかったら、もう使ってもらえなかったかもしれない。これまでのサッカー人生にもそういう場面はあったし、それをモノにするか、できないかは大きいと思います。」

・プレースタイルに関しては、徐々に変化してきた。ヴォルフスブルク時代に中盤でのプレーを希望しながら、ポジションを獲得できなかったのは、ボール奪取力、縦への推進力、ゲームコントロール能力で飛び抜けたものがなかったから。しかしその後に経験を積み、試行錯誤を繰り返して、今では守備で的確な判断から相手の敵のオフENSEの芽を摘み、中盤の底や最終ラインでボールを落ち着け、左右に捌きながら相手を揺さぶり、タイミングよく前線へペースアップのパスを供給できる選手となったのだ。

（出典：サッカーダイジェスト WEB 版：長谷部誠はなぜ「ブンデスリーガで10年」生き残れたのか？）

酒井選手

・「監督が求めているものを意識して聞いています。試合に出す選手を決めるのは監督です。監督が何を言って、何を求めているか。それを早く吸収して、早く体現することを、一番意識しました。どの監督の下でも試合に出られたのは、それが大きいと思っています」

・「練習中は他の選手に向けられた発言も聞いています。自分に求められていることだけをやるのではなく、チームに何を求めているのかも把握する。それが様々なポジションで使われる要因だと思っています。プロになってからは、人がやっていることを見て、聞いて、盗まなきゃいけないと思っていました。当時から他の選手が言われている注意点も自分のことのように聞いていた。ああそうなんだ、あのポジションではあれをやっちゃダメなんだって。そして自分に向けて言われたことは、すぐに行動で示すようにしていました」

（出典：サッカーキング：なぜ、ドイツで8年間も出続けられるのか。酒井高德が持つ“無色”の魅力）

岡崎選手

・「ゴールをアシストすることを除いて、シンジは何でもできるんだ」。マインツを率いる指揮官は、チームのスター選手の強みをよく心得ている。

・「俺の進む道は、ヨーロッパの中で通用する強さを磨いていくしかないから。ガチンコで、ここにいるヤツらと勝負するしかないから」

（出典：Sportsnavi：マインツ岡崎慎司を成功へと導いた要因ドイツで最も輝く日本人FWへの変化）

乾選手

・「でも今では、僕の最高のパフォーマンスを見せられるのは中央のポジションだと認識するようになりました。だから試合に出たいなら、このポジションになるんです。」

・動けてサプライズを創出するMFが、監督の好みだ。

（出典：Sportsnavi：フランクフルトで輝きを取り戻した乾要因は新監督の配置転換と長谷部の支え）

・「ボールを持った時も、ドイツではあまり仕掛けるなと言われることが多いです。仕掛けることを好まないというか、パスを出すことを優先する。でも、こっちでは仕掛けてもいいし、何をしてもいい。自分の好きなこともやっていいし、そのなかでチームでの役割もやるという印象です。言い換えると、いろんなことをやらないといけないということでもありますね」と、自らに課された課題を意識しながらプレーしている。

（出典：Sportiva：「ドイツとは全然違う」。乾貴士が痛感したスペインサッカーの難しさ）

高原選手

・ドイツ時代に高原が輝いていた時期もある。それはトップメラーがハンブルガーSVの監督を解任された後の04-05年時、トーマス・ドル体制でファーストFWに任命されたとき（シーズンで7得点をマーク）。そして06-07年シーズンに移籍先のフランクフルトでリーグ11得点を挙げ、その直後に選出されたイビチャ・オシム体制の日本代表で絶大な存在感を示した時期である。

この時期の高原に共通していたのは、チーム内における立場だった。1トップ、もしくは2トップの一角。相手ペナルティーエリア内の狭い地域で勝負することを許され、ゴールだけに専念できた。ピンポイントゴーラーである彼の特性を生かすにはうってつけのエリアで、高原はチーム戦術の歯車になれた。特に、チーム内において同タイプのFWが共存していない場合には役割分担が明確になり、フィニッシュに全神経を集中させればよかったのだ。

（出典：Sportsnavi：「高原直泰、遠い復活への道のり不振にあえぐ現状に迫る」）

インタビューした4選手と他選手の結果の統合

チーム加入後は監督の戦術を理解し監督が望むプレーをすることで信頼関係の構築や強化していた。チームのニーズにあわせたプレースタイルに変化させる順応性は勿論、練習も試合のように全力で行うことや、自己の長所をアピールしつつ強化することで、チーム内で自身の立ち位置を獲得した。監督の考えに応じてプレーを変えられる技術力と賢さの必要性が強調された。何より少ないチャンスの中で結果を残し信頼を得ることが重要であった。

第3項 海外挑戦に必要なこと

香川選手インタビュー結果

・やっぱり海外きたら孤独感はすごく味わうし、結果がでないとすごく孤立を感じやすい。それは誰もが経験するし。そうなったときに、もう日本に帰ろうかなと思うだろうな。それを一人で抱え込んで一人で戦うのは間違いないけど、周りのスタッフや仲間、一緒に戦ってくれている仲間がいるも思えるだけで全然違うと思う。

文献調査

長谷部選手

・出場機会に恵まれない時期もあった。だが、それでも決して腐らない。どんな時でも100%の力で臨む。その姿勢を監督にも高く評価されてきた。

(出典：サッカーダイジェスト WEB 版：長谷部誠はなぜ「ブンデスリーガで10年」生き残れたのか?)

・苦しい時に踏ん張るといえるのか、歯を食いしばって状況を打開することが出来てきたから、ここまでやれているのかなあと思います。

(出典：Number WEB：常を楽しむ日々。「命賭けでやるような場に立たないと」)

清武選手

・「レベルの差じゃなく、サッカーそのものが全く違うという意味で、日本だったらこういうふうにしたのにはあるし、もっとこうしたいと思うこともあるんですよ。ただ、こっちじゃ、まずはそれに慣れないと何も始まらない。」

(出典：Number WEB：清武弘嗣は「証明書」を持っている！ドイツで確立した“使う側”の評価。)

酒井選手

・「みんな自分が得をしたいから、ミスを僕になすりつけてきたんです。段々となめられて、こいつなら何を言っても大丈夫って思われてしまった。自我を出さないと、自分が生きていく世界でどんどん不利になっていくことを最初の半年ですごく感じました」

(出典：サッカーキング：なぜ、ドイツで8年間も出続けられるのか。酒井高德が持つ“無色”の魅力)

高原選手

若い選手はどんどん外に出ていくべきだと思う。そうすれば個人の経験値が上がり、代表ももっと強くなる。それに、これは個人的なことだけど、海外でのいろんな経験は自分の人生に必ず活かされる。

(出典：Sports Graphic Number 765号 越境最前線。～世界から見た日本人の価値～)

インタビューした4選手と他選手の結果の統合

負けない気持ち、自分を売り込む主体性といった精神力を重要視していた。日本のようにピッチ内外の環境が用意されているわけではなく、自分で環境を手に入れようと主体的に行動をしていた。また、監督が変わる等して試合に出場できない時期も、自分にできることを淡々とこなし耐えていく忍耐力も求められる。

第4節 日本人コーチ、代理人へのインタビュー調査

第1項 日本人コーチのインタビュー結果

ブンデスリーガのマーケット

10年前あたりに日本のマーケットのブームがあった。背景にチームの成功と経済的成功があり、日本人は協調性が高さも評価されていた。最近は移籍年齢を下げ、18.19歳のヨーロッパのフランスとイングランドの若い選手たちの獲得が多い。しっかりと育成されてきておりインタリジェンスを兼ね備えフィジカル能力が高いから。最近ではデンベレやサンチョがいい例である。しっかりと育ってクラブでの結果を出して、高い移籍金をドイツクラブに残し移籍をしてくれるという経済的な利点もある。

またアメリカ人選手も最近では増えてきた。

年齢的には18歳からしか現実的には海外移籍ができないために18歳になってからできるだけ若い年代での移籍が好ましい。大学卒業してからでは22歳からのプロデビューになるのでさらに移籍を早める必要がある。現実的にどこかの国を経由してブンデスリーガへ移籍をするとしたら早い方がいい。25歳以上の選手をあまり見ていない。

監督

監督は時代の流れとともにスタイルが変わっていく。大きく分けると、科学的なデータをもとに戦術を作り、それに基づいて選手を起用したいタイプと、いる選手に臨機応変に合わせたサッカーをするタイプに分かれる。

日本人の特徴

日本人選手のストロングポイントは、グラウンド上で結構臨機応変に仕事ができること。怪我人が出たからあっちのポジションでもプレーさせたいといってもできてしまう、ユーティリティー性が高い。

移籍について

ベルギーで2桁ゴールをすると一定の評価を得る。明らかに1対1が負けない、セットプレーで強い、サイドバックだったらこの選手は絶対スピードでは抜かれない、そういったはっきりしたものがあれば違う。

選手は移籍するとき、移籍先のチームの選手を見て、自分と比較して試合に出場できそうかを考えると良い。

ヒエラルキーを把握すること。古参の人たちで、そういうところに目をかけてくれる人が、そういう人達と関係を築く育成が大切である。イングランドやフランスの若い年代

の選手は非常に優秀な選手が多い。代表的な育成モデルに 4 corner がある。ドイツにも似たようなものがあるしね。

イングランドサッカー協会 4Corner model

4Corner モデルは Long Term Athlete Development モデルという長期選手育成モデルであり、TECHNICAL/TACTICAL（技術・戦術）、PHYSICAL（体力）、PSYCHOLOGICAL（精神力）SOCIAL（社会性）の 4 つの要素で構成されている。2014 年イングランドサッカー協会は、「The England DNA」として採用し、指導者、タレント発掘担当者等の選手育成に携わる人たちに共有されている。

TECHNICAL は、ボールコントロールや戦術理解等サッカーの能力を高める要素、PHYSICAL はスピード等の身体能力、コーディネーション能力、栄養、コンディショニング等の体に関する要素、PSYCHOLOGICAL（精神力）は、自信、決断力、集中力、コミュニケーション能力等のマインドに関する要素、SOCIAL（社会性）はチームワーク、説明能力、立ち居振る舞い等の対人関係に関する要素である。

また、4Corner の中でも、イングランドサッカー協会のタレント発掘の責任者である Richard Allen 氏は 4Corner の中でも右側の PSYCHOLOGICAL（精神力）SOCIAL（社会性）の要素が重要であると語っている。つまり選手を評価する上で技術面や戦術理解力といった卓越性だけでなく、チームメイトとの協力の仕方や、ウォーミングアップの取り組む姿勢等を評価しており、むしろ将来性を見据えた場合、この要素の方が重要であると指摘している。



図 30 The FA 4-Corner Model

第2項 代理人のインタビュー結果

ヨーロッパへの移籍の適齢期

移籍の適齢期に関していうと、19歳前後で海外移籍をするパターンと、24、25歳で行くパターンがある。移籍をする上で最も重要なことは「適応能力」だと思う。

現在の世界のトレンド

フランス人選手で、特徴として、スピードやフィジカルがあることがあげられる。また、昔はブンデスリーガのチームが獲得できなかった選手が、経済成長を遂げたブンデスリーガのチームでは買えてしまう。そういったマーケットの変化により日本からのブンデスリーガ移籍は最近では少なくなり、困難になってきているのが現状である。現在の日本人選手においては、ベルギーへの移籍が主流となっている。

サッカーの潮流（プレースタイル）は変化する。例えば、南野選手がストーミングをザルツブルクで修得し、リバプールのオファーを受けたように、世界の最先端の技術が修得でき、疲労できる五大リーグの近傍で実績を積むことはブンデスリーガへの移籍においても有利になる。

ストーミング

ストーミングとは、ハイプレッシャーとボール奪取後に相手が整う前に攻めるサッカーである。近年、サッカーのスタイルのトレンドがボールポゼッションからストーミングへと変化を遂げていて、特にブンデスリーガはその傾向が色濃く、2019年にはストーミング生みの親と言われているラルフ・ランゲニックのもとで一緒に仕事をした教え子たちが6人もブンデスリーガで監督をしている。しかしリアクションサッカーでインテンシティが高く選手が負荷に耐えられないため、シーズンを通してストーミングを実現することは難しく、ユルゲン・クロップのリバプールのようにポゼッションを織り交ぜるなど、それぞれの監督がストーミングに加えた独自の戦略を持ち始めている。

移籍の条件

移籍の条件としてはドイツ2部から1部へと移籍したいのであれば、フォワードは2桁得点、ミッドフィールダーの選手は7ゴール7アシストという結果が欲しい。または誰にも負けないような選手としての個性があること。

また、ブンデスリーガにおいて1部のチームは他国のチームの選手より自国の2部での活躍した選手の方が獲得しやすい傾向にある。したがって1部のチームへの移籍を望むのであれば、ブンデスリーガ2部での活躍が一番評価されやすい。香川選手が活躍した後は日本人ブームが来て日本人選手が非常に移籍しやすかった。その時の経済効果も大きかった。（マンチェスターUでは、実際に香川選手が加入後にはヤンマー、関西ペイ

ント、日清食品、東芝メディカルシステムズがグローバルスポンサーに、カゴメ、グループス、万田発酵が地域スポンサーとなり一気に9社まで激増した。)しかし現在のブンデスリーガでは、南野拓実選手(以下、南野選手)もザルツブルグであれだけ活躍していても、なかなかブンデスリーガからはオファーが来なかった。大迫選手は当時のJリーグでシーズン19ゴールを獲得し、条件は十分に満たしていたが、2部のTSV1860 ミュンヘンからしかオファーが来なかった。Jリーグで活躍しているだけでは、海外チームからの評価を得るのは非常に難しいことがわかる。

監督

近年は、より戦術的になってきている。代理人としては近年のトレンドであるストーミング(を戦略とするサッカーチームへ移籍をさせて、日本人選手にそのサッカーに順応して欲しいという気持ちがある。

海外での外国人選手に求められる内容は、点を決めることや、硬い守備といったことは挙げられるが、日本人は特に戦術理解度が高いためチームの欠点を補完するような役割が求められる。そう言った戦術的会話のできる戦術理解度の高い選手は生き残っていく。

若い年代での移籍経験

移籍の大変さや環境への適応力、時に起きる理不尽さを経験し、それが選手としての成長につながる。そしてそう言った経験が海外移籍の時に活きる。日本代表で長く活躍している選手の多くがそう言った若い世代での移籍経験をしている。

南野選手のように、大きな試合でしっかり結果を残せる選手になることがビッククラブへの移籍につながる。

若い選手が海外移籍について考えるときは移籍の仕組みなども考慮して判断をしなくてはいけない。

第5節 ブンデスリーガへの移籍の仕組み

第1項 ステークホルダー関係図

選手・代理人・コーチのインタビュー結果から、ブンデスリーガの移籍に関するステークホルダーの関係を図31にまとめた。

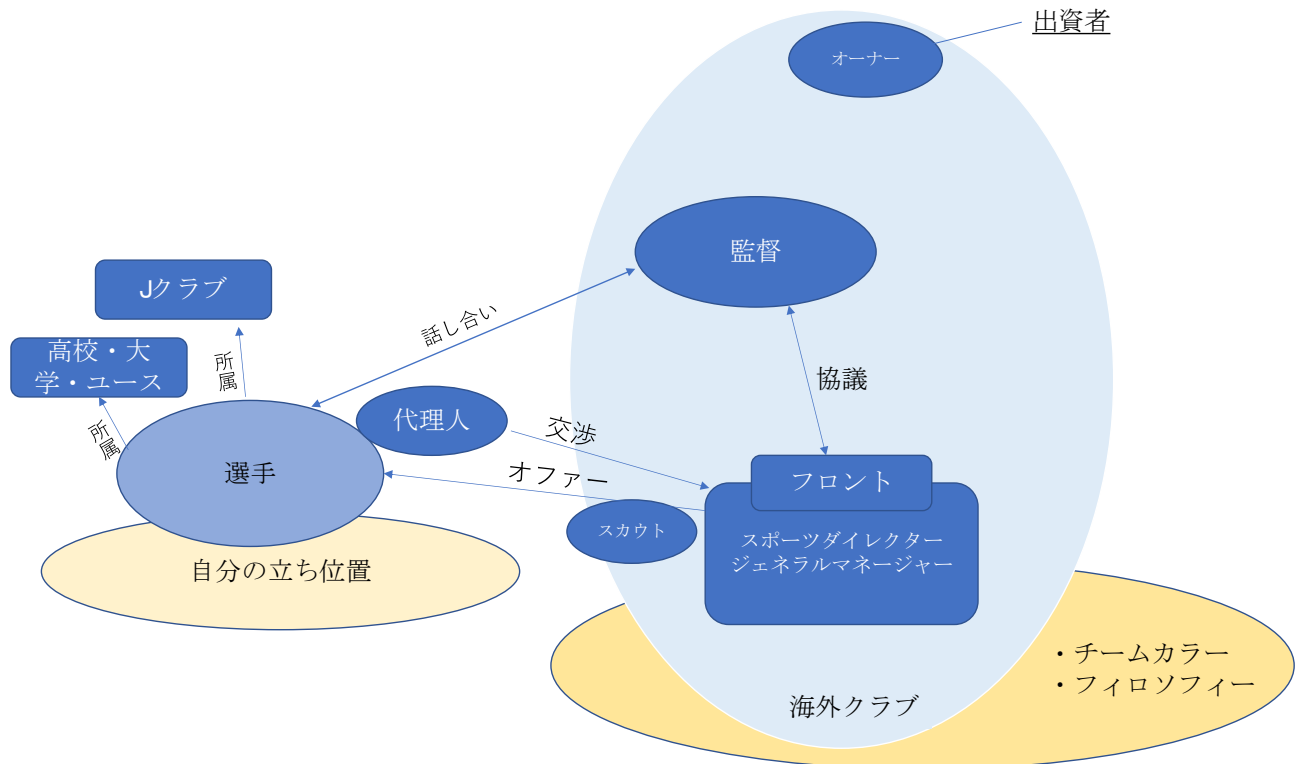


図 31 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図

選手

国内から海外移籍を目指す選手には大きく分けてアマチュア選手（高校・大学・ユース）とプロ選手（Jクラブ）に分けられる。選手は基本的に代理人との話し合いのもとで移籍する。また起用法などを事前に選手がクラブのフロントや監督と話し合いをする場合が多い。

選手は基本的にチームからのオファーを受け、チームに加入する。

チームとの交渉の仲介として代理人に契約交渉を委託することが非常に多い。

海外移籍での交渉では、言語などの面を考えても交渉に代理人は必須となる。

またチームへの移籍を考察する上で、監督やGMと話し合う場を設けることがある。加入後の起用方法やチームの戦術といったチームの方向性を話し合う。

代理人

サッカー選手の代理人は FIFA(国際サッカー連盟)の定めによって、各国のサッカー協会の認定を得てその国で代理人として働くことができる代理人制度があったが 2015 年 3 月 31 日をもって、その資格制度が廃止され、各国のサッカー協会に登録さえすれば、その国で移籍交渉や契約延長といった“仲介業務”を行なえるようになっている。

代理人の仕事というと真っ先に思い浮かぶのが移籍交渉や契約更改交渉だろう。選手の要望だけでなく、選手のクラブへの貢献度を説得力のある資料を添えてクラブに伝えることが主である。しかし、それだけではない。

選手のために複数の契約交渉の場をつくり、より良い条件と環境を契約する選手に提供することも代理人の仕事の一部である。

代理人にもいろいろなカラーがあり、移籍交渉と契約更改だけを請け負い、他のことは選手の裁量に任せる人もいれば、個人マネジメントまで請け負う人もいる。また、契約選手が怪我を負い長期間戦線離脱することになった時などは、通常メンタルトレーナーが請け負う精神的なケアを行うこともある。

スカウト

チームから求められた選手を獲得するために、試合をスカウティングする。

スカウトはフロント、もしくは監督から要求された選手をスカウティングする。大きいクラブになると世界中にスカウトを置き有能な人材のスカウティングをしている。

アマチュア選手で代理人がついていない場合はチーム側とのコンタクトとして最初にスカウトと話し合うことが多い。

選手との移籍交渉には、基本的には関わらない。

フロント

オーナー、社長や会長、GM (ジェネラルマネージャー)、SD (スポーツダイレクター)、などを総称してフロント呼ぶ。

主にチームの方向性を決める。また基本的に選手の獲得や監督の選定の決定権を持つ。その際に監督の話し合いをする。また代理人を通して選手へのオファーを提示する。

監督

チームを指揮しながら、フロント陣との話し合いで獲得したい選手について、やりたいサッカーなどチームの方向性についても話し合う。また対戦相手にいい選手がいたらフロント陣に獲得を打診すると言ったスカウティングに関わることもある。また移籍を

考えている選手とは、選手の起用方法や戦術などのビジョンを共有して選手を獲得するために話し合いをする。

フロントとの話し合いで、実現したいサッカーにおける獲得したい選手を要求する。内田選手の海外移籍時のシャルケのマガト監督のように経験のある監督はフロントから選手獲得の決定権に大きく与えられることがある。

シーズン中は監督業務があり、基本的に日本人選手の日本でのプレーをあまり知らないことが多い。

移籍前に獲得オファーを出した選手と起用方法や戦術を話し合う場を作ることがある。

オーナー

ドイツクラブのための最善の決定を行うのは最終的にはいつも、経済的、個人的な利益とはまったく関係ない、クラブを本当に大切に思っているファンたちである、という考え方のもと投資家やワンマンオーナーではなく、クラブ企業が議決権の過半数を持たなければいけないルールがある。

第2項 各選手の「チーム選び」の取り組み

各選手の移籍時のチーム選びの基準についてステークホルダー関係図を用いて考察を行う。

細貝選手

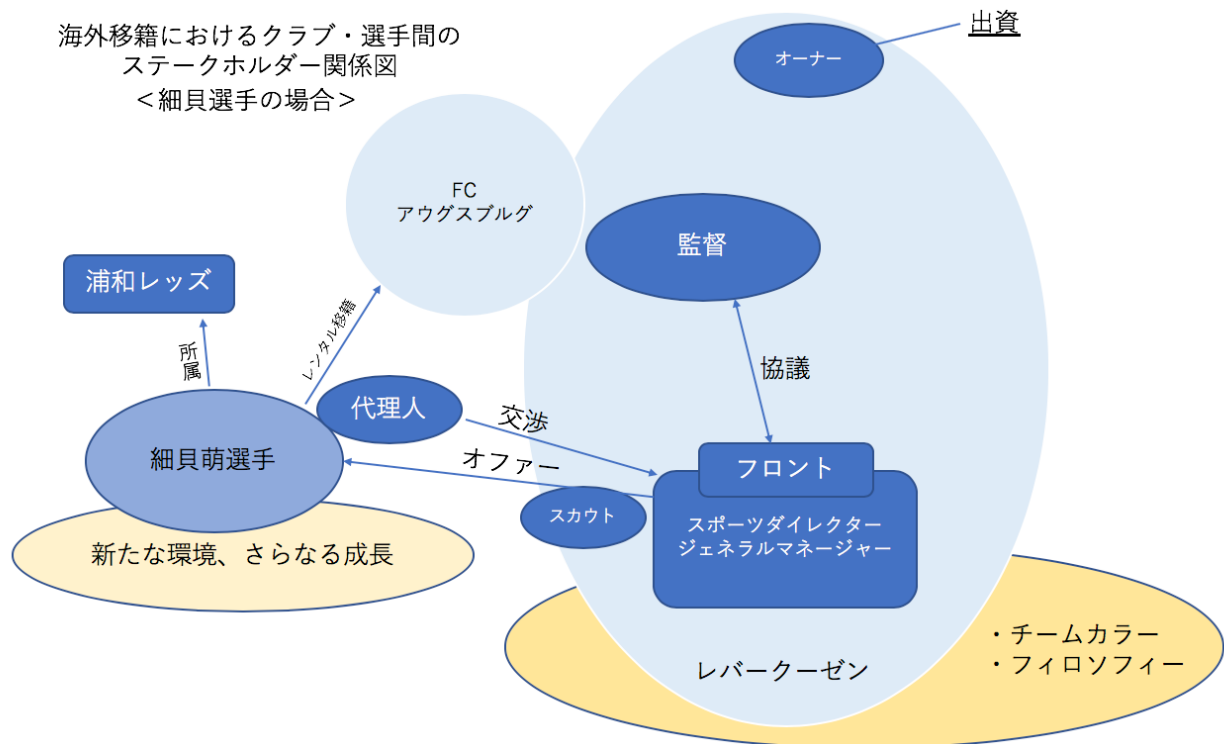


図 32 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 細貝選手

細貝選手は監督との関係がチーム選びに非常に影響を及ぼしている。レバークーゼン在籍時にルフカイ監督からの直接オファーを受け、格上のレバークーゼンからヘルタ・ベルリンへの移籍を果たしている。単にレベルが上であるという理由ではなく、監督との関係を重視している。

レバークーゼンのボランチの人数がオーバーしている中であったがそれでも獲得したいというチームの思いもありレバークーゼンへの移籍が実現した。しかし出場機会などを考え1年目は2部のアウグスブルグへレンタル移籍をしている。ここでのルフカイ監督との出会いがドイツで長く在籍できた理由であると本人も述べている。

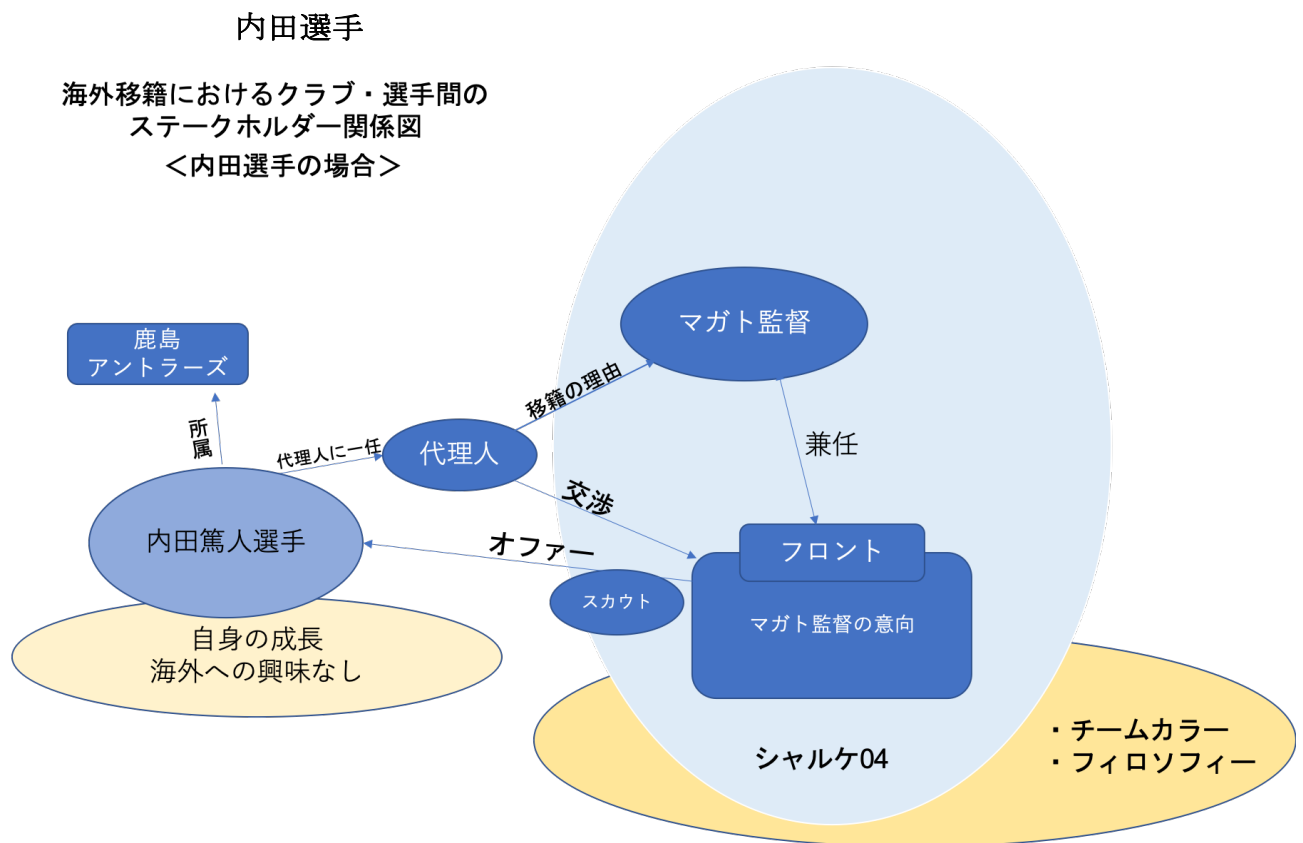


図 33 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 内田選手

内田選手は経験ある代理人に自分の移籍を任せている。海外移籍への思いが強かったわけではなかったが、自身の成長のための移籍であった。当時、チームの監督と並行してチームマネジメント（選手獲得）もしていたマガト監督に獲得された。シャルケも鹿島アントラーズに移籍金をしっかり払っての移籍ということもあり、無名の日本人に羽振りが良かったと本人は述べているが、その後の活躍をみればわかるようにマガト監督はじめシャルケのスカウティング陣の選手分析が非常に有能であったと言える。マネジメントもやっている監督は珍しいが、ランゲニック（ホッフェンハイムやシャルケの監督をしたのちに、ザルツブルグとライプツィヒの統括 SD に就任）のようにドイツでは監督がその後の SD（スポーツダイレクター）の役職をやることもある。

原口選手

海外移籍におけるクラブ・選手間の
ステークホルダー関係図
<原口選手の場合>

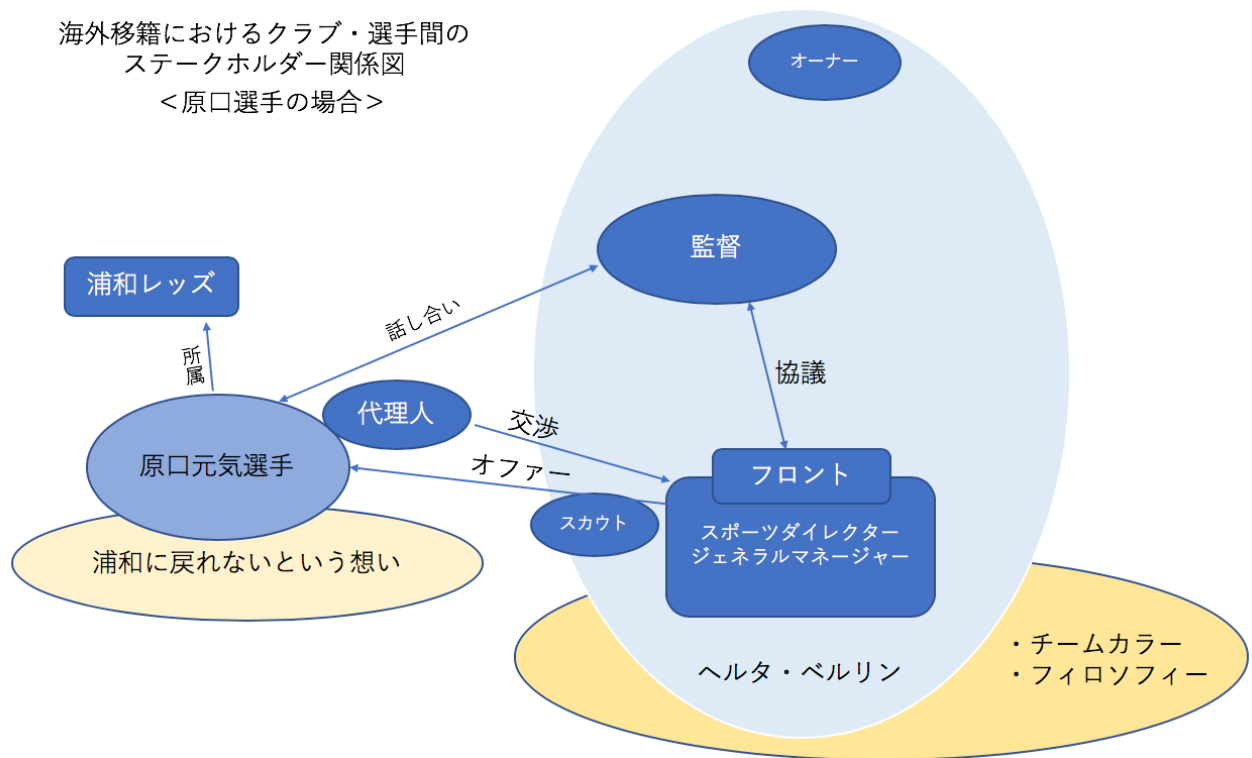


図 34 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 原口選手

浦和レッズ時代から海外移籍への思いはあり、2014年の6月にヘルタ・ベルリンへ完全移籍を果たした。浦和レッズへの熱い想いが移籍後のモチベーションに繋がっていたと本人が述べるように、浦和にとっても本人にとっても非常に大きな決断であった。

大迫選手

加入前に GM、監督とのミーティングを設けてことでチームでの起用方法を具体的に示されたことで加入が非常に現実的になった。

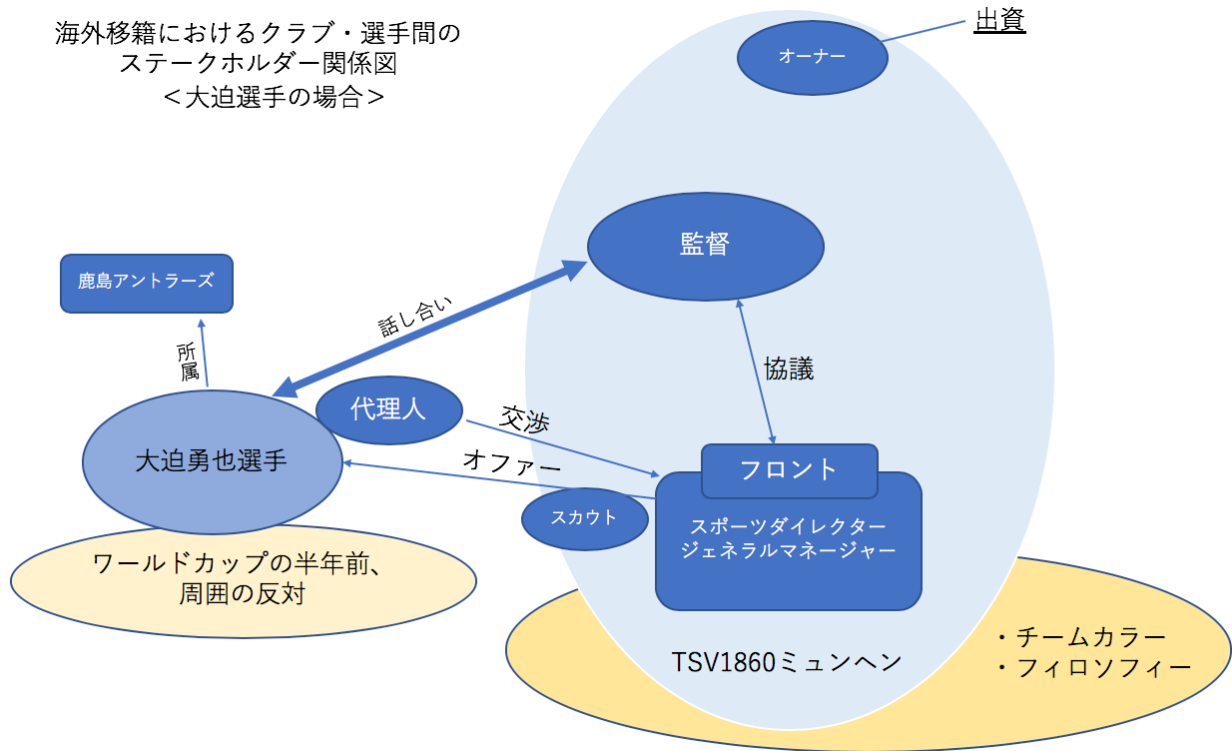


図 35 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 大迫選手

大迫選手は TSV1860 ミュンヘンへの日本からの自身最初の海外移籍を考えると、ドイツに順応しステップアップすることのできるチームを選んだことが伺える。また加入前に監督との話し合いで監督から求められることなど具体的な要求も理解しての加入であった。実際に半年後には翌年から一部でのプレーが決まっている 1.FC ケルンへの移籍を実現しステップアップ移籍をしている。その後ブレーメンへの移籍の際もチームの戦術や起用方法など細かいところまで監督と話し合っている。大迫選手はチーム選びの際に、実際に監督や GM との話し合いをしている。チーム選びの基準も単にビッグクラブという理由ではなく、しっかりと自分が成長してレベルアップしていけることを基準に考えている。

2013 年鹿島アントラーズでシーズン 19 ゴールを決めた年の冬の移籍であった。2014 年にはブラジル W 杯が控えており、最終メンバーに選出されることなどを考えると、移籍をすることで出場機会を失う可能性もあり、周囲は反対であったと大迫選手の代理人はいう。実際に移籍に賛成したのは代理人と本人と嫁ぐくらいであったという。しかし、自身の成長と年齢的なことを考えると最も早いタイミングでの移籍が必要だった。またドイツ 2 部への移籍により出場機会を失う選手であれば W 杯への道もないと判断した。

実際に半シーズンで1部の1.FC ケルンへ移籍を果たし、またブラジル W 杯への出場も果たしている。

大きな国際大会を控え、移籍のタイミングで悩む J クラブ所属のプロ選手が参考にすべき移籍であった。

長澤選手

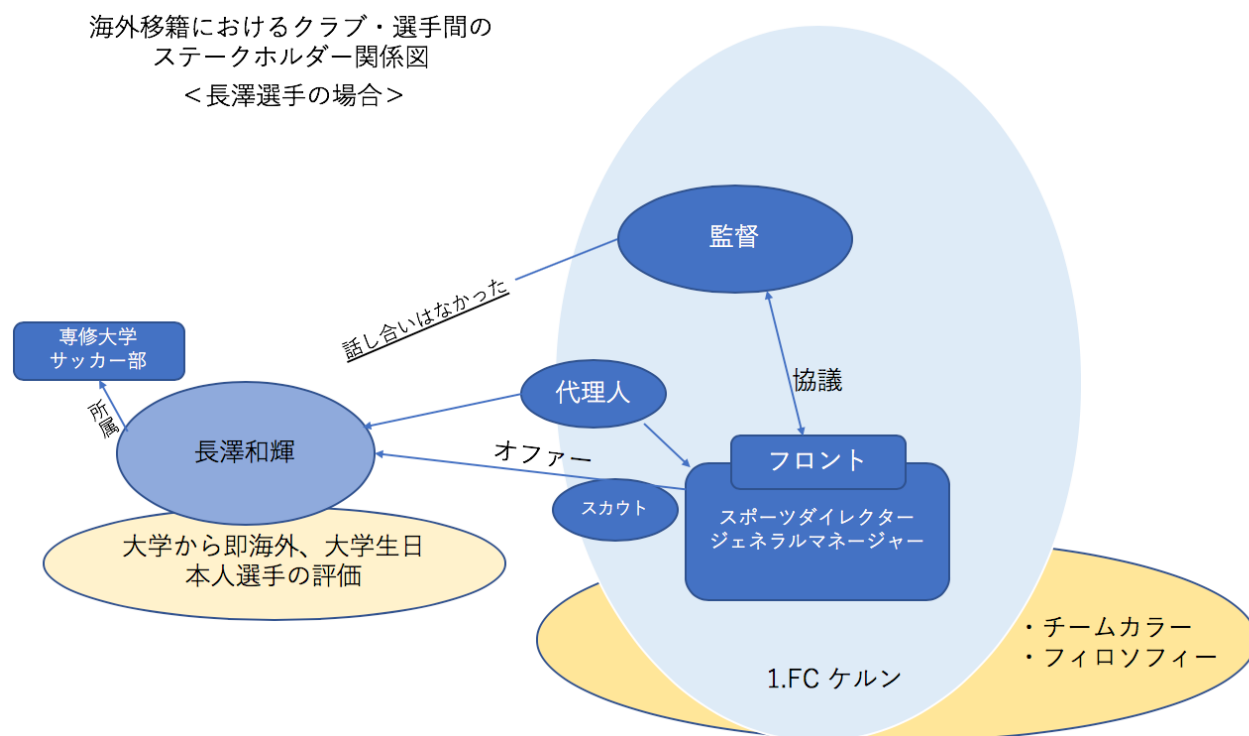


図 36 海外移籍におけるクラブ・選手間のステークホルダー関係図 長澤選手

監督側の意向ではなく、フロント側の意向で獲得された。加入前には監督とのミーティングは特になかった。チームとしても即戦力としてではなく、育成枠としての意味合いが強かった。ブンデスリーガとしても大学生を獲得したことがなかったため、日本のアマチュア選手の価値向上のためにも重要であると本人も考えていた。1.FC ケルンとしては、移籍金が発生しないために獲得リスクが抑えられる。アマチュア選手としては、J クラブを通り越して海外主要リーグへの移籍は、またとないチャンスであった。

香川選手をはじめ多くの日本人選手が活躍していたことも移籍の後押しになったと言える。

第3項 海外移籍の仕組み

インタビュー結果より海外移籍に関する仕組みを図 37 にまとめた。

Jリーグに加入したあとでの海外移籍に関しては、必ずといっていいほど移籍金がかかってきてしまう。(契約満了と同時に移籍した場合、移籍金は発生しないが、プロチーム新加入の選手は2、3年契約をしている場合が多く、その契約を満了してから出なくては移籍金が発生する。)

しかし現状ではなかなかアマチュア選手に代理人を選択する判断基準がなく、代理人がJリーグ公認からフリーになり現在では250人以上が代理人として活動するようになったため選手も代理人選びに慎重にならざるを得なくなってしまったということも背景にある。

Jリーグに加入する場合には、1年目の年俸に上限(最大で年俸480万円)があるためアマチュアからの国内移籍の場合は代理人を必要としないという選択が通常化してしまっている。これらの理由からアマチュア選手の代理人が必要ないという考えに繋がってしまっているが、実際に海外移籍をする際には、アマチュア選手が直接海外クラブと金銭的な面も含めて交渉することは考えにくく代理人が必要となってくる。

選手獲得後、成長し試合で活躍することで選手として価値を高めることができる。すなわち市場価値が高くなるということである。ビッククラブから選手にオファーがくればチームは高い移籍金を獲得し選手を売却することもできる。仮に戦力として試合で起用することが困難になってしまっても、Jリーグに獲得してもらうことができるため、チームはリスクを負うことは少ない。アマチュア選手の国際移籍は特に移籍金がかからないなど金銭的に移籍がしやすいという側面がある。

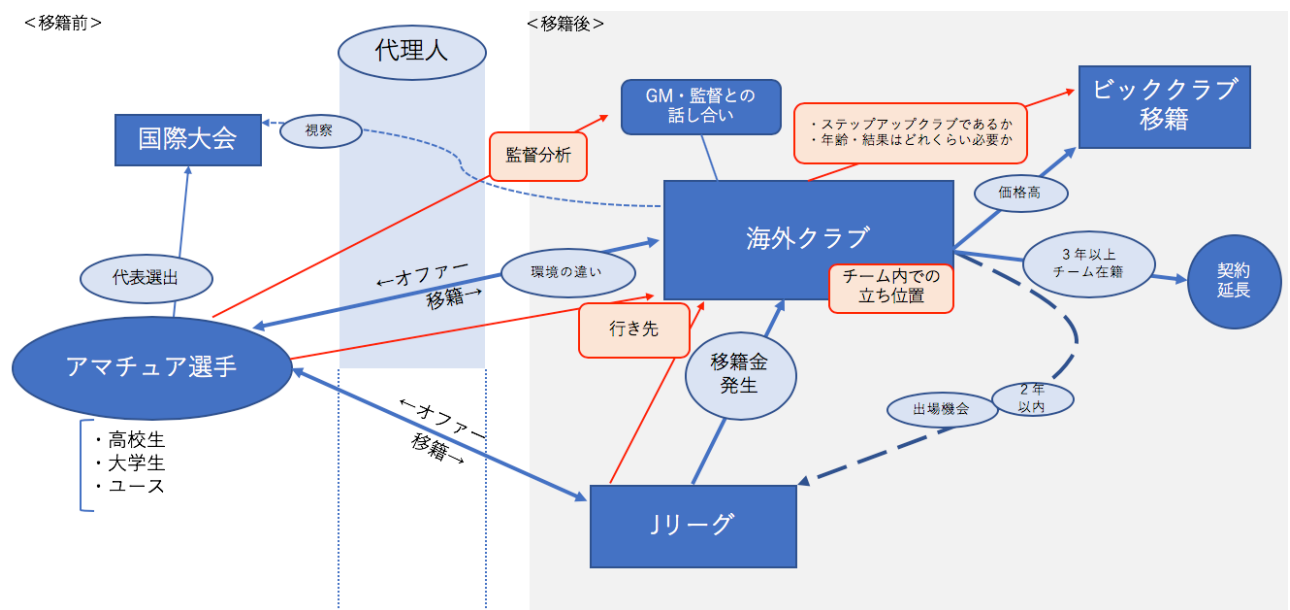


図 37 海外移籍の仕組み

第4章 考察

第1節 日本サッカー選手がブンデスリーガで活躍する要因

第1項 ブンデスリーガのサッカーの特徴に順応すること

ブンデスリーガの特徴として香川選手のインタビューからプレミアリーグと異なり「組織的である」と述べられていることや、乾選手がブンデスリーガとリーグ・エス・パニョーラとの違いをブンデスリーガでは監督からドリブルで仕掛けることよりもパスを優先するように指示をされるといったように、ブンデスリーガは組織的なサッカーが重視される傾向にあるリーグであると考えられる。つまり、リーグによってサッカーのスタイルが異なる故、海外移籍を考える際には自分のプレースタイルに合ったリーグを選択することも重要である。清武選手がレベルの問題ではなくサッカーそのものが全く違うことに慣れる必要性を述べられているように、ブンデスリーガで活躍できた選手はリーグやクラブの特徴を把握し順応できたことが要因のひとつとして挙げられる。

第2項 移籍後早期にデビューをして結果を残すこと

41名のうち3シーズン未満プレーした選手のデビュー戦までの平均日数が82日、平均在籍期間は1.3年であるのに対し3シーズン以上プレーできた選手のデビュー戦までの平均日数は47日、平均在籍期間は5.2年であった。3年以上プレーした選手のデビューまでの平均日数を考えるとチーム加入前に事前に即戦力の選手として評価を得て加入をするか、もしくはチームに加入し早期に監督の信頼をつかみ試合に起用してもらうことが重要である。

3シーズン以上プレーできた選手のブンデスリーガ在籍期間は5.2年であることから、一度信頼を得て結果を残すことができれば長期間在籍することができる可能性が高いと言える。

第3項 監督の傾向を理解すること

近年のブンデスリーガの監督の傾向としては若く戦術的に細かい指示を出すサッカーをする監督が増えている。これらの監督は大きく分けて2つのタイプに分類される。

監督の目指すサッカーに合わせた選手を獲得してくる戦術重視型、また、今いる選手たちで1番いいパフォーマンスを引き出すために、選手との人間関係、信頼関係を築くことが上手い選手重視型である。戦術重視型は、シーズンの最初から数年に渡りチームを任されている監督に多く、それはチームフロントとの話し合いで選手の獲得に関わることができ、自分の戦術を表現しやすく、自分のやりたいサッカーに合うタイプの選手を連れてこられるという点が大きく関係している。上位チームに多い傾向にある。一方で、前任監督が解任されシーズン途中からチームを任されている監督に選手重視型が多

い。また戦術重視型の監督でもシーズン途中からでは選手に戦術を浸透させづらいため、選手重視型になってしまう場合が多い。また下位チームの場合、相手チームに試合の主導権を握られることが多くなってしまい、守備的なサッカーになってしまうことが多い。下位チームでは戦術というよりはひたすら点数をとることを求められたと大迫選手が話していることからこの特徴が伺える。

ブンデスリーガのみならず、日本人選手は戦術理解力、また戦術、ポジションに対する順応性の高さが高く評価されているとコーチ T 氏は言う。日本人の身体的な特徴はネガティブな取り上げられ方をする一方で、長谷部選手が攻撃的 MF からリベロ (DF) に、細貝選手がボランチとセンターバックとサイドバックで起用され、原口選手が両サイドウイングでプレーしていることなどから分かるように日本人選手は適応力が高く、またその面を高く評価されていることがわかる。これらのことより、毎試合のように異なるシステムで戦い、試合中にも何度もフォーメーション変更を強いられることに適応できる精神的なスタミナを養っておく必要も今後の若い選手に求められると思われる。

それぞれの監督の特徴を理解した上で、自分のプレースタイルも提示し、売り込みながら監督の望むプレーを発揮できたことが3年以上の在籍に寄与したと考える。

また、試合に使ってもらえないとネガティブキャンペーンを始めてしまう外国人選手がいる中、日本人は出られない状況でもチーム内でネガティブな存在にならず、チームのために行動ができるという点においても高く評価されている。とコーチ T 氏は言う。

一方で、試合に出場していない選手のケア・コミュニケーションができ、チームが負け込んだときに選手のメンタルケアがしっかりできる監督が指示を得ている。また、監督が常に自分のことを見ていると感じさせてくれることも大きな支えとなり、信頼関係につながると原口選手、細貝選手は答えている。

日本人選手が移籍する際に監督、もしくは強化側からのコンタクトがあるのが一般的であるが、移籍前からどうしても欲しいと監督から口説かれた選手もいればそうでない選手もいる。大迫選手は移籍前に猛烈に監督からのアプローチを受けたと答えている。移籍後もその信頼を裏切ることがないようひたすら当たり前のことを当たり前のようにし、日本人であるがゆえにもたれるフィジカルの弱さというイメージを払拭できるよう自身も努力し、今の地位を確立している。言葉のコミュニケーションが上手く成立しない状況でも監督の評価は常に意識していた。と原口選手、細貝選手は口を揃えて言う。それにより原口選手はダルダイ監督から、細貝選手はルフカイ監督から厚い信頼を得て、出場機会を得ている。また、通常であれば言語の壁を少しでも低くするために通訳を付ける選手が多い中、内田選手、大迫選手、原口選手、細貝選手は通訳を付けなかった。これらの精神的な強さは監督からも高く評価されていることはインタビューからも伺える。しかしながら、同時にコミュニケーションを取れるように言語習得、言語以外での

自己表現に努めたことも選手たちは答えている。これらより、言語の習得は絶対条件でないにしても今後海外移籍を考えている選手はあらかじめ言語習得を勧めたい。

監督との関係性が出場機会に直結していることは言うまでもない。細貝選手のように監督からのオファーを受けて移籍を果たし出場機会を重ねる選手もいる。

第4項 監督から求められることに対して柔軟に対応すること

チーム内での立ち位置を自己分析することも重要となってくる。出場時間と選手のインタビューから選手がチーム内での自身の立ち位置を自己分析して行動していることが伺える。大迫選手は移籍後すぐに監督の特徴やチーム戦術、リーグ内での順位を考慮しトレーニングから意図的にプレーを変化させていたという。また FC ケルンでスタメンを確保しブレイメンへ移籍後は、チームでの立ち位置が中心選手となり戦術的なコミュニケーションをチームメイトと交わすなどコミュニケーションの部分でも変化が見られた。

内田選手は7シーズン半の中で7人の監督のもとでプレーしたが、それぞれの監督をインタビューで答えているように、自分に求めることを理解していた。原口選手はチームメイトとの距離感や日頃の練習態度の中やクラブハウスでの挨拶にまで細かい隙を一切見せないところなど自己分析から行動まで、プロフェッショナルに徹していた。

こういったドイツまたは欧州での日本人選手の評価からチーム内での立ち位置まで分析することが移籍選手には必要なことであり、分析からトレーニングから試合までの行動が導き出されることも多いため移籍前後に関わらず、重要な要素であると言える。

第2節 ブンデスリーガへのパスウェイ

第1項 ブンデスリーガにおける日本人選手の活動状況

2010年に香川選手がボルシア・ドルトムントに加入してブンデスリーガ優勝という結果を残したこと。また、セレッソ大阪からボルシア・ドルトムントへ移籍する際、移籍金ではなく育成補償費として4,000万円のみで移籍が成立したことから、ブンデスリーガが日本人選手に注目し、獲得する動きに繋がった。それから約30人もの選手がブンデスリーガへの移籍を果たしている（2019年8月現在）。

ブンデスリーガを運営するドイツサッカーリーグ（DFL）は2017/18シーズンの収益などについて記した「ブンデスリーガ白書2019」を公表した。それによると、昨シーズンにおけるブンデスリーガおよび同2部全36クラブの売上は、過去最高の約44億2000万ユーロ（約5525億円）。前年比では約10%の増加で、直近10年間を振り返ると年平均8.6%の上昇率となった。また売上額は14年連続で増している。ブンデスリーガに限定すると、18クラブ中17クラブが1億ユーロ（約125億円）以上の売上を達成し、総額は前年に比べ約13%アップの約38億1000万ユーロ（約4762億5000万円）。ブンデスリーガは健全な経営をしているために人件費が50%を超えず、人件費は44.2%となっている。これらのことからわかるようにブンデスリーガ総選手の年俸総額が上がっている。ブンデスリーガの経済規模が大きくなり年俸の高い選手をそれぞれのクラブが獲得できるようになってきている。

ブンデスリーガの経済規模は2010年から2019年で2.8倍になり、当然選手の給料であるチーム人件費も高騰しており、日本から直接移籍しにくくなったと言える。またブンデスリーガには日本人選手は、大迫選手、長谷部選手、鎌田選手と3名しかいない（2019年8月現在）。

第2項 Jクラブの海外移籍に対する対応

2010年に香川選手が移籍金0円でドルトムントへ移籍した経緯としては、FIFAの移籍のルールとして所属クラブとの契約が満了したとき、6ヶ月以内に契約が満了予定のとき、というルールに則り海外クラブがこの期間に交渉をしたことによると考えられる。しかし、近年ではJクラブも選手と複数年契約を結ぶ等を行うことで海外移籍に際して移籍金が発生するような交渉を行うようになった。Jクラブとしては選手の海外移籍が一定の収入源になるメリットが生まれたが、ブンデスリーガはじめ海外クラブからすると、日本人選手を安価に獲得することが難しくなってしまったとも考えられる。

つまり、海外のスカウトの目がJリーグまで届かない状況であり日本人選手の評価をすることは難しい状況ではあったが、移籍金が安価であったこと、香川選手等の日本人選手の実績から、ポテンシャルを評価して積極的に獲得をしてきたが、近年ブンデスリーガの発展によってクラブに経済的な体力が付き、実績のあるフランスやイングランド

の若手選手を獲得できるようになったこともあり、わざわざ日本人選手を獲得する必要性がなくなっているとも考えられる。

第3項 ステップアップリーグへの移籍

前項のような経緯から、今後日本人選手がブンデスリーガで活躍する為には、Jリーグから直接ブンデスリーガに移籍することは難しい状況と言え、このような変化に対応する為、「ステップアップリーグ」への移籍を提言したい。

「ステップアップリーグ」とは、リーグで実績を挙げれば5大リーグへの移籍に繋がる可能性が高いリーグと定義し、具体的には、ドイツ2部、オランダ、ベルギー、オーストリア、ポルトガル、トルコ等が挙げられる。栗山(2013)は「世界最高峰のサッカーリーグである、プレミアリーグに移籍する際のルートとしては、ベルギー、オランダ、ドイツの各リーグからの移籍には、欧州以外の選手が多く含まれており、日本選手が経由するリーグとして有効である。」と指摘しているように、ステップアップリーグとして欧州以外の選手が多くプレーしているリーグが良いと考える。

結果を出すという言葉の、結果とは前線の選手であれば、ゴール。ディフェンダーの選手であれば、1体1の守備で負けない、スピードがある。などのはっきりした自分の能力をプレーに出すこと。結果に関していえば、日本のJリーグでの結果はなかなかブンデスリーガのチームでは評価に値しない。ベルギーでは10ゴールを取るとスカウトが注目し始めると代理人もコーチも口を合わせる。また国際舞台や強豪チームとの対戦での結果は、より大きな評価につながることも述べている。実際にザルツブルク在籍の南野選手のチャンピオンズリーグ、リバプール戦での結果が次のステップアップに繋がったと専属代理人でもある代理人は述べる。実際にあの試合からチームの代理人への問い合わせが増えた。

第4項 移籍適齢期

ステップアップリーグへの移籍

FIFAは“未成年の保護”を目的とした移籍条項19条で原則的に18歳未満の選手の国外移籍を禁止している(3つの例外を除く)。よって日本では高校卒業後からが海外へ渡る現実的なタイミングと言える。

海外クラブからするとJリーグクラブから複数のオファーを受けるような選手の獲得が最も好ましい。特に近年では多くの選手がベルギー、オランダに移籍を果たして、活躍したことで日本人選手のニーズが高まっている。

ステップアップリーグへの移籍を果たし、環境に順応することに時間を要し、活躍のうちにブンデスリーガへ移籍することを逆算すると18～23歳までに移籍することが望ましい。大学を経由している選手であればなおさら移籍を早める必要があると言える。

ブンデスリーグへの移籍

日本企業の DMM.com がベルギーシントトロイデンを買収し経営していることも日本人選手のベルギーへの移籍を増加させている一つの要因といえる。実際に鎌田選手や富安選手もシントトロイデンからのステップアップを実現させている。代理人はブンデスリーグ 2 部で結果を出すことがブンデスリーグ 1 部への移籍の現実的なルートであると述べる。ドイツチーム側からすると、ドイツ国内でのスカウト活動が可能となり、また選手の能力の見極めもしやすいためである。選手側からしても、ドイツサッカーに順応するという点においては他国のリーグをステップアップに使うよりブンデスリーグ 2 部からのステップアップの方がよりスムーズである。またコーチ T 氏も述べるように、日本からはもちろん、ステップアップリーグで活躍した選手でも 25 歳以上の選手はあまり見ていない。

また日本での評価（J リーグでの成績など）はドイツでは、当然として同じ数字の評価としては扱われないために再評価をしてもらう必要がある。大迫選手もチームが変わり監督の評価を得るためにトレーニングから監督の求めることを意識し、評価を獲得することに注力した、というように環境への順応には時間がかかる。また原口選手が「移籍のトークで失敗した」というようにチームとの移籍の話し合いで契約期間を残して移籍の意思表示をすると試合で起用してもらえなくなる場合がある。J リーグでスタメンの選手が海外移籍の意思表示をして試合に一切起用されなくなったという例は聞いたことがない。したがって日本とは違う移籍のマーケットであるということを早く理解することも大切である。

若い世代での移籍を経験しておくということも、海外移籍を成功させる大きな要因の一つになりうるといえる。

表 16 アマチュア選手時の出身別在籍期間

アマチュア選手時	在籍期間		合計
	3 年以上	3 年以内	
JFA アカデミー	-	1	1
大学出身	4	3	7
高校出身	10	7	17
ユース出身	6	10	16

実際にブンデスリーグに過去に在籍した 41 名のアマチュア選手時の在籍をまとめた。JFA アカデミーは 1 名のため今回の考察からは除外した。

高卒大卒の選手は若い世代での移籍、つまり大きな環境の変化を経験している。しかしユース選手は環境そのままでの昇格から多くの選手はプロまで加入している。3 年以

内に移籍してしまった人数が、高卒大卒 10 名に対しユース 10 名と同じだ。しかし 3 年以上ブンデスリーガに在籍しているいわゆる活躍している選手で比較すると、ユース 6 名に対し、高卒大卒は 14 名と約 2.3 倍であった。海外移籍は日本のように様々な面での環境が整っていないことが多く若い世代から環境の変化やうまくいかないという経験を重ねてきたことが、移籍後の環境に対応することや順応力の高さ、人間的タフさに繋がっていると代理人 A 氏は述べる。

世界でも稀有な選手の平均年齢の高いリーグであること、およびプロになる直前の育成機関が高校(14.81%)、J クラブユース(37.04%)、高校から大学経由(35.19%)、J クラブユースから大学経由(12.96%)と報告されており、50.0%が高校或いは高校から大学経由という育成機関で育ち J リーガーになっていることが明らかにされている。

第 5 項 評価を得る機会

ステップアップリーグへ行く為の評価

J リーグで活躍することに加えてユース代表になり国際大会で結果を残すことが重要である。国際大会で強豪国を相手に結果を出すことが、ステップアップリーグのチームのスカウトへのアピールになる。海外クラブのスカウトは日本で通用することではなく、海外のサッカーに通用することが見たいからだ。コーチ T 氏によると、対人プレーで負けないことやセットプレーで競り勝てる身体の強さがあるなど目に見えるはっきりしたプレーが評価されるという。一番のアピールは得点をする事だ。

ブンデスリーガへの行く為の評価

ステップアップリーグでの実績が重要である。具体的にはフォワードは 2 桁得点、ミッドフィールダーの選手は 7 ゴール 7 アシストという結果を。または誰にも負けない選手としての個性があることなどを代理人は述べた。それに加え、日本人には仲間の穴を埋めるプレーができることが日本人の良さだと内田選手も述べるように、代理人のいう戦術的理解の高さも評価対象の一つにあげられる。

第 3 節 本研究の限界と今後の展望

久保建英選手は小学生からスペインで過ごし、言葉の壁をなくし、欧州のプレースタイルを身につけそして 18 歳でスペインチームへ移籍したが、このようなケースは今回の研究では対象としていない。今回は自分を含め 5 人の経験からの分析であるが、41 人、そしてこれから先にブンデスリーガに移籍した選手はどのような軌跡をたどるのか、さらに研究が必要である。

第5章 結論

本研究で得られた結果を下に今後ブンデスリーガを目指す日本人サッカー選手に必要な9つの要素をまとめた。ブンデスリーガ移籍の成功には多くの要素が絡み合うが、少なくとも以下の9つ基礎的なポイントが重要である。

1. 移籍の仕組みを理解する

FIFA の移籍条項19条の未成年の保護など移籍のルールを理解し、移籍に関わる利害関係者は誰なのかという移籍のメカニズムに関する知識獲得すること。

2. 海外へのコネクションのある代理人を選択すること

海外移籍における交渉は特に代理人が必要となってくるため、歩みたいキャリアに応じて代理人の特徴を理解し信頼できる代理人を選択すること。

3. 監督を分析し適応する

戦術の特徴把握、監督やチームのニーズを把握し、監督の考えに応じてプレーを変えられる技術力と賢さを身につける。

4. 選手自身が立ち位置を把握する

監督の戦術嗜好もあるが、上位、下位、ベテラン、新人、生え抜きなど監督の評価の中で自分の置かれている立場、状況が異なるということを理解してトレーニングの中から行動すること。また状況がチーム成績、選手の怪我などで常に変化することを理解し、練習も試合のように全力で行動する。日本人選手の移籍マーケットでの価値の変化と世界のサッカートレンドの変化を把握することも重要である。

5. 交渉力

自分の考えを伝えるとともに監督の考え方を引き出し、主体的に自己をアピールできるコミュニケーションスキルを磨く。

6. 知名度を高める

選手としての認知度を高めることが選手の価値になるということを理解する。クラブの商業的利益にもなる。Jリーグでの活躍が海外ステップアップリーグでの活躍より取り上げられる。

7. 若い頃から海外挑戦を行う

ユース世代の国際大会で活躍しスカウトなどの目にとまる。また、ステップアップリーグで経験を積む。

8. 新しい環境に順応する

育成年代からの環境の変化への準備をすることで、海外移籍時にいち早く文化や言語、チームの戦術戦略を理解し、食事、グラウンド、フィジカル、息抜きなどの様々な違いに対応できる力を持つ。

9. サポート体制

海外の環境の中では、日常の生活面のサポートに加え、折れない精神力を支えるメンタル面のサポートも必要になってくる。ピッチ上でのパフォーマンスをあげるため、家族やマネージャーなど周りの支えてくれるサポーターを作ること。

多くの日本人選手が円滑に海外移籍を成功させ、世界でさらに J リーグが注目されることを願う。

謝辞

本研究に際し、指導教官である平田竹男先生に感謝を申し上げます。平田先生の多元的な視点から多くの刺激をいただき先生のご指導の下、本稿の完成にいたしました。また、違った目線で貴重なアドバイスをしていただいた中村好男先生、論文の細部いたるまでご指導をいただいた児玉ゆう子先生、畔蒜洋平先生に感謝を申し上げます。

現役選手と研究生活の両立を認めていただいた浦和レッズの監督、コーチ、フロント、サポーターの皆様感謝申し上げます。

またシーズン中にも関わらずインタビュー調査に快く協力をいただいた細貝萌選手、内田篤人選手、原口元気選手、大迫勇也選手、香川真司選手、代理人 A 氏、コーチ T 氏にも感謝申し上げます。

そして最後に、平田研究室 14 期の皆さん、共に学ぶ仲間の存在は、大きな喜びを与えてくれました。あらためて **Team Work** の大切さを身にしみて体験でき、私の今後の人生 においてかけがえのない時間を共有できました。

ありがとうございました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) Ivon Carballo Badilla : Sport migration in Costa Rica: Motivation and Goals of Athletes' Outflow, 2017 August
- 2) 能智大介, 平田竹男ら : J リーグのホームグロウン制度導入に際する J クラブユースと高校および大学の育成環境の違う選手の人数と活躍の実態, スポーツ産業学研究, Vol.30, No.1(2020), 281 ~ 291
- 3) 能智大介, 平田竹男ら : 大学サッカーにおける新人選手の入学ルートと出身育成機関の調査研究, スポーツ産業学研究, Vol.26, No.2(2016), 165 ~ 169
- 4) 三浦俊也 : ドイツサッカー・ブンデスリーガ監督のステップアップに関する研究, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科トップスポーツマネジメントコース修士論文, 2012
- 5) 栗山 貴行 : J リーグ選手を最終的にイングランドプレミアリーグにステップアップさせるための最初の海外移籍に関する研究, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科トップスポーツマネジメントコース修士論文, 2013
- 6) ブンデスリーガ公式サイト (<https://www.bundesliga.com/jp/bundesliga>) 2020 年 1 月 9 日閲覧
- 7) イングランドサッカー協会公式サイト
(<http://www.thefa.com/news/2016/sep/09/talent-id---richard-allen-interview>)
2020 年 1 月 9 日閲覧
- 8) サッカーダイジェスト Web 「長谷部誠はなぜ「ブンデスリーガで 10 年」生き残れたのか？」
(<https://www.soccerdigestweb.com/news/detail3/id=27895>) 2020 年 1 月 9 日閲覧
- 9) Number Web 「長谷部誠、究極の非日常を楽しむ日々。「命賭けでやるような場に立たないと」
(<https://number.bunshun.jp/articles/-/841923?page=2>) 2020 年 1 月 9 日閲覧
- 10) SOCCER KING 「なぜ、ドイツで 8 年間も出続けられるのか。酒井高德が持つ“無色”の魅力」
(<https://news.livedoor.com/article/detail/15911800/>) 2020 年 1 月 9 日閲覧
- 11) Number Web 「清武弘嗣は「証明書」を持っている！ドイツで確立した“使う側”の評価。」
(<https://number.bunshun.jp/articles/-/825708?page=2>) 2020 年 1 月 9 日閲覧
- 12) Sportsnavi 「マインツ岡崎慎司を成功へと導いた要因ドイツで最も輝く日本人 F W への変化」
(<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201404220001-spnavi>) 2020 年 1 月 9

日閲覧

13) Number Web 「「日本人らしさ」で勝負せず——。岡崎慎司が歩む“清武らと違う”道。」

<https://number.bunshun.jp/articles/-/281263?page=3>

14) Sportiva 「「ドイツとは全然違う」。乾貴士が痛感したスペインサッカーの難しさ」

(https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/wfootball/2016/04/30/post_1009/index_2.php) 2020年1月9日閲覧

15) Sportsnavi 「フランクフルトで輝きを取り戻した乾要因は新監督の配置転換と長谷部の支え」

(<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201410040007-spnavi?p=1>) 2020年1月9日閲覧

16) Sportsnavi 「高原直泰、遠い復活への道のり 不振にあえぐ現状に迫る」

(<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/200904210003-spnavi>) 2020年1月9日閲覧

17) 「越境最前線。～世界から見た日本人の価値～」 Sports Graphic Number 765号、2010年

付録 ① 香川真司選手インタビュー

ドルトムント移籍最初の苦労は？

その時は、日本のクラブも海外行くなら、特にセレッソは支援してくれたから、移籍に対してクラブがって言う問題がなかった。

むしろ好意的だった。あとは自分のタイミング。冬の移籍だったらフェンロとか？ケルンもあった。何チームか選択肢はあったんだけど、半年後に南アフリカのW杯があって、おれも中足骨と内側痛めてたりしたから、まあこのタイミングで行くより、W杯が終わってから夏に海外挑戦しようってセレッソもそれで合意して、

2010年の新しいシーズン始まってから夏には海外移籍でっていう合意で話は決まっていた。

今の時代だったら考えにくいけど、昔は日本人の海外移籍はわりと友好的にサポートしてくれたかな。

真司くん的にはそのタイミングがベスト？

ほんとに1日でも早く行きたいという気持ちあるじゃん？むしろ行かなきゃいけない強迫観念というか周りも海外にという意識が強かったから。でも待つこともよかったなと。新しいシーズンだったしプレシーズンしっかりやれたことが大きかったね。

ドルトムントの移籍前にチームとのコンタクトは？

基本的にクロップとは話はしてない。ただドルトムントのスカウトが3.4回セレッソの試合を見にきてくれてて、その時はトーマスだから、コンタクトはトーマスと常に取りながら。3.4つオファーがあった。

12月の段階でスタジアムも観に行ってて、すごいスタジアムだった。でドルトムントは1番熱烈で興味を持ってくれたから、それで行くことになったね。

今だからドルトムントの選択で良かったけど、よくその選択をした。上位だった。

当時のドルトムントは5.6位で世界のトップクラブじゃなかった。当時知ってる選手なんて、ヌリサヒン、モハメドジダンくらいしかいなかった。でそれくらいの知識で行ったから、逆に構えるものがなかった。できるやろって。クロップだってその時はブンデスでは有名やったけど、世界的な名将ではなかったから。

加入してから戦術理解に苦しみましたか？

クロップも当時3年目で、チームとして80.90%の完成度のチームのやりたいサッカーができて、その最後のワンピースを埋めた感じ。うまくはまった感じ。すごいやりやすかったし、もちろん攻守の切り替えとプレッシングは今のリバプールもそうだけど、やっぱりそこは徹底されていたから、そこに対する要求はシーズン通して唯一言われなかったけど。あの時はいいスタート切れたからあんまり（戦術理解の苦労は）なかったかもしれないね。

プレミア、スペイン辺りと比べてドイツとどうか？

プレミアはやはりこの力が全然違うと感じた。

もちろんだルトムントも若い選手でレバンドフスキとかいたからすごかったけど、そこにさらに経験も増したビッグネームたちがいるから。そういう先入観もあったかもしれないけど。フィジカル的にも一人一人のオーラもやっぱりすごかった。プレミアはより個人の能力で。マンチェスターは特にそうだった。

ドイツはより組織的というイメージ。だから日本人も活躍しやすいのかな。そういう意味では日本に近いものがあるよね。

ドイツの監督たちとの相性は？

クロップと出会ってここまで来れたっていうのはあるから選ばずにはられない。情熱家で選手をコントロールするモチベーターであり、ゲーゲンプレッシングのように組織としてどう戦うかを体現しているその最高峰がクロップ。

戦術としては間違いなくトーマストゥヘル。おれが今までやってきた中でもすごく勉強になることが多かったし。監督もやっぱりいいところ悪いところもあって、クロップのように心と心でつながりを感じる監督、マネジメントが上手い監督もいるし、戦術家としてトゥヘルは抜きん出ているし、彼と出会ってすごく難しい時期もあったし、1番のベストを引き出してくれる監督でもあった。1番成長させてくれる監督。その2人はおれの中では印象に残ってる。

監督との信頼関係は大切？

やっぱりすごくそれは感じる。監督が最終的に決めるわけで監督も人だから、どうまくコミュニケーションとるか、監督のやりたいことを体現するのもそうだし、そういうところで信頼を掴むっていうことはすごく大事で、ましてや日本人っていう意味では、それだけで海外では苦しんでる人もいる。過小評価されたりアジア人として見られたり、それはおれも経験しているし、監督が自分をしっかり評価してくれているというのは1番大事なことであるかなと思う。

海外での日本人の評価？

まあ一時期のドイツに比べたら難しくなってるし、日本のクラブもビジネスとしてお金を取るようになってきて、でも日本の国内の選手に 1.2 ミリオン払うクラブがいるかっていったら居ないわけで。

だから日本人＝安さが魅力としてあったから、より行きやすかったけど、今は移籍は難しくなったかな。

最近はベルギーやオランダのステップアップが増えてきてるが？

ベルギーやオランダへ移籍してステップアップを目指しているが、現状なかなかステップアップに苦しんでいる印象。

若い選手は海外移籍に代理人が必要になってくるが、どんな選び方すべきか？

ほんとに選手のためを思ってやっているところ。選手のマネジメントも含めて。あとは最終的なところは選手が誰と出会って、その出会いからいい信頼関係を築いて、その人を信じていく、一緒にやっていく。その出会いを上の人間や、経験ある選手がいいサポート、いいアドバイスを送ってあげることが大切。おれはやっぱり海外でたら外国人のエージェントはよりチームと密にコミュニケーションが取れるし、その先も考えた中では、おれはいまスペイン人の代理人と組んでるけど。情報やコミュニケーションも含めて、そういう強さは感じる。

なかなか日本人で海外の代理人と組んでる人は少ないのでは？

コミュニケーションがひとつ問題になるからね。

どうやってスペインの代理人を見つけた？

伴野さん通じて。おれはなんせスペインに行きたかったから。スペインに強い代理人で自分のことを評価してくれている人。いろんな代理人がコンタクトを取ってくるからどこが信用できるかという問題もあるが、なかなか難しいけど、伴野さんふくめて周りのスタッフで話し合い、一度代理人とミーティングして、お互いの想いを話し合い、一緒に仕事することになった。

なかなか誰かが間に入らないと難しい？

そうやな。でもおれは日本の将来のことを思うと

日本人同士でやっていくというのは魅力的で、信頼関係という面では、築けることは大きいと思うけど、また違ったルートで、違ったメリットを考えたときに、外国人、その国の代理人、強い代理人はコミュニケーションがクラブと取れてる。監督と、ヘッドコーチと、オーナーと直接話ができてる。はたしてリアルやバルサ、ドルトムントのようなチームのこの役職の人と対等に話が出来ているか。選手は話せてるか分からないから。

おれはここで外国人の代理人とつながることによって、今後若い選手がいるのであれば、そういう選手を繋いでもいいし、そういうところでどんどん日本人が関わりを持ってくれば、いきなり日本からドイツ、スペインも見えてくると思うから。さっきのベルギー、オランダルートの中で、また代理人によって違ったものが生み出せることはあるんじゃないかな。

そういったマーケットのことも含めて若い選手に伝えられたらと思う。

そうやな。人に恵まれる、十代の若い奴が自分一人でするわけじゃないから、周りにいる人たちがいい方向に持って行ってあげられるかが大事になってくるんじゃないかな、誰がマネジメントしてあげられるか。おれは割とそういった人がいてくれたと思うからさ。ましてや若いと経験もない、知識もないというわけで、そういう人たちが身近にどれだけいてくれるのかというのは大事かなと思う。

そればかりは出会いであったり、信頼関係だから簡単に築けるものじゃないからな。

海外挑戦する若い選手にアドバイスはありますか？

おれの経験をもとに言わせてもらおうと、ドルトムントで最高なスタートが切れたから、その中で苦労すること、悩むことはあったけど、試合に出続けて結果もうまくついてきて、上の舞台でやらせてもらってきた。

本当にスタートが大事だと思ってる。それがいいスタートがおれは切れた。おれはヨーロッパきて10年くらいで考えてて。やっぱり今振り返ると、なかなか切れるスタートじゃないなというのを身をもって感じてる。

というのも、今スペインに来てサラゴラでなかなか結果がでず、メディアもファンも仲間も厳しいシビアな部分も感じるし、もし自分が20歳だったら、どうなんだろうって。思ったときに、やっぱり無理なのか、自信をなくすのか。というのも理解できる。

もちろん根性も大事だし、最終的には気持ちで勝ち抜けるか耐え抜けるかというのが大事だと思うんだけど、やっぱりどれだけいいチームじゃないけど、仲間であったりマネジメントであったりサポートしてくれる人間であったり、やっぱり海外きたら孤独感はすごい味わうし、練習場きても結果がでないとすごく孤立を感じやすい。どうしても練

習もプレーも後ろ向きになったり。それは誰もが経験するし。そうなったときに、もう日本に帰ろうかなと思うだろうなと感じてるから。それを一人で抱え込んで一人で戦うのは間違いないんだけど、周りのスタッフや仲間、一緒に戦ってくれてる仲間がいるも思えるだけで全然違うと思うし、そういう仲間たちと同じ目標向かうって。周りで支えてくれる仲間がいるから頑張れるっていうのはあると思ってるから。だから周りにいる人間もすごく大事ななのかなって。

どうしても日本人ってそういう孤独に耐え抜いて頑張って戦い抜いて、おれも若いときはそういう発想もあったんだけど、海外のやつなんて見たらわかるように家族がいて兄弟がいて、そういう中で愛があった中で、スペインとドイツで家族が恋しいよっていうくらい。おまえら2時間で帰れるやろって。笑

それはさ、おれも最近考える中で、やっぱ高校サッカーのやつらって強いよね。才能あるって言われて王道の道を歩んでるやつはやっぱり苦勞してるもんな。

Jリーグ下部組織の選手は、やっぱりこういう経験がないから耐えられなくなっちゃったりというのもあるのかなと。高校サッカーは上下関係があったり根性論を叩き込まれそうなイメージあるからさ。

おれはある意味、街クラブ出身だから街クラブ出身の選手には頑張っって欲しいなって、こういう例があるんだぞっていうのは伝えて欲しい、かずきに。

中1で神戸から仙台行って、後がないって気持ちでやっていたからね、そういう環境は大きいよね、育っていく中の環境でどう鍛え上げられて育っていくか。

かたやイングランドやオランダの若手は12歳で移籍しまくってますよね。

まあたしかに。1番いい例はソウ・フンミンみたいな、今で言う久保くんじゃないけど、ソフンミンが育成年代でドイツ行って身を置いて、いまはトップ10のトットナムに入るくらいでしょ？そこでトップ3の選手に入ってるんだから、てなるとそれが今の正解なのかな、正解というかトップのトップで活躍する上で。

おれもドルトムントマンチェスターいったけど、そこで活躍し切れなかったと思う思いがあるから。

トップのトップを取るために、ある意味19.20以降での海外移籍は、断言はできないけど、遅い可能性もある。

それこそ12.13の成長期に言語も含めて、そう言う環境に行くことの答えをソフンミンが出しているわけで、そこに行かないとそのメンタリティは身につかない。いくら聞いたとしても、その環境を身をもって経験して、若ければ若い方が吸収しやすいわけ

で。当たり前になってくる。それが一つの今見た中で、トップに辿り着けないのかな、メンタリティ含めて。

付録 ②長澤和輝の移籍後の壁とアクション

【直後～半年】

チームに移籍した直後はなかなかトレーニングでも自分の良さを出せず、ストレスやプレッシャーを多く感じていたが、同時にモチベーションも高かった。半年にかけて徐々に環境に慣れてきてストレスを感じなくなっていた。

最初の3ヶ月はほとんど試合に出場できていないが、アマチュアの大学からの移籍ということで、まずは言葉や生活、トレーニングに慣れるということをチームからも言われており、その点意欲的にトレーニングをしていた。

【アクション】

生活面。言葉がわからないため、挨拶から日常で聞く言葉をメモする。

メモした言葉を使ってみる。発音などが正しいかチームメイトに確認する。

ドアの押す、引くなど日常でのドイツ語を行動から覚えていく。

レストランでは、わからない単語のメニューを頼んでみるなど

スーパーで必要な食材がどこにあるのか、洋服屋でサイズを聞くなど、嫌な顔をされるなど、相手に伝わらなくても、自発的にコミュニケーションをとってみる

トレーニングから、声をだす。なかなか最初の方はパスを要求するくらいしかできないが、自分の気持ちを表現してみる。

プレーの後に自分がパスを受けられたのに、パスが来なかった場合は、今のシーンはパスを受けられたとアピールする。

通訳がついた際に、監督に自らコミュニケーションを取りに行く。

監督室に行き、なぜ自分は試合に出られないのか。今試合に出ている人と何が違うのか聞く、自分に足りないスキルを聞く、どのようなプレーを監督は自分に求めているのか聞く。(自己主張でありそれをする事で自分が試合に出たいという意思表示になるし、自分自身何をすれば試合に出られるか明確になる)

仲間に自分の長所を理解してもらう、(このシーンでは裏に走ればこんなパスが出せるから走ってくれ。などと細かいことでも自分のイメージ、できることを伝える)

大学アマチュアからプロになり、ブンデスリーガでプレーできていることに感謝してポジティブにこの環境から吸収しようという気持ちで日頃からトレーニングする。

【半年～1年】

怪我をしたことで、モチベーションも低下していったが、復帰が近づくと徐々にモチベーションも回復していった。

長期の離脱はモチベーションの維持が非常に困難になる。試合に絡まない期間が続くが、生活面では順応していき、ストレスも低下していく。

アクション

次のレベルのコミュニケーションを取れるようになるために、語学学校に通ってみる。

初めての怪我ではあったが、逆に言えば、体を作る鍛える時間ができたので、トレーナーと話し合っ、ブンデスリーガ仕様に体を大きくする。(実際にこの時期に体重を3、4キロ増やした)

復帰後はトレーニングから少しずつできることを増やしてみる。こまめにトレーナーに自分の状態を伝える。

試合に出られない時期続くが、試合に使ってくれというアピールを続ける。

怪我の恐怖心はまだ少し残っている時期なので、無理しないでしっかり治し、焦らずコンディションをあげることを心がける。

【1年～1年半】

試合に出られないフラストレーションが徐々に上がっていくが、同時に復帰してピッチで結果を出したいというモチベーションの向上が見られた。

4月あたりから試合に絡み出したら、モチベーションはさらに上昇した。

ドイツ生活も1年を経過し、生活にも怪我也回復して試合にも出場できる時期に差し掛かると、ストレスは、低くなった。

【アクション】

怪我の恐怖心はなくなってきたので、自分のパフォーマンスを最大化できるように、コンディション向上に心がける（食生活や生活リズム、夜更かしなどコンディションを下げることは避ける）

シーズン最後に向けて、チームの結果次第ではチャンスが回ってくることもあるのでその時に向けて準備しておく。

なかなか自己評価でコンディションとパフォーマンスが上がってきているのに、試合に出られない場合は、再度監督に、コミュニケーションを取りに行く。

【1年半～2年】

3シーズン目に差し掛かり、チームとして新戦力も加入させて、なかなか試合に出場できない時期が続く。

徐々にハーフシーズン終了とともに移籍することが濃厚になり、試合に出られない、結果が残せないというストレスが大きくなり、逆にモチベーションの低下があった。

【アクション】

なかなか試合に出られない時間が増えてしまうと、移籍が現実的になる。そうなると選手はモチベーションを失い、トレーニングに気持ちが入らなくなるが、そこで引退ではないので、次のチームに行ったときに自分が活躍できるように常にコンディションが落ちないように、ランニングを入れるなど、日頃から意識しておく。

練習方法

【直後】

練習方法を完全に理解するために1ヶ月くらい要した。繰り返しの内容も多いため、練習方法を理解すればそこまで苦勞することはない。行っている練習自体は日本のものと大きく異なりはしないが、各選手の練習に対する意識に違いを感じる。パススピード、プレスのスピード、練習から勝利に執着する気持ち等。

内容で違いを感じたのは日本に比べてシュート練習が多かった。内容は非常にシンプルだが一時間ほど様々なシュート練習を行うシュート練習のみを行う日があった。日本では練習でシュート練習だけで終わることはなかなかないので違和感を覚えた。

【半年後】

オンシーズンであったので、毎週ルーティンで同じトレーニングをすることが多かった。試合前日、前々日は相手チームの分析と、それに応じた対策を考えることが一般的だが、当時、F C ケルン は 2 部リーグで首位であったため相手に対する対策というより自分たちの長所をより出す事が勝利に直結していたので戦術練習よりゲーム形式の練習が多かった。

練習の負荷は重い日はハードに、軽い日は本当に負荷が軽く、というように、強弱の差が激しかった。チームとしては個人的なプラスαのトレーニングを嫌った。日本はトレーニング後に自主トレーニングをすることは一般的だが、当時の監督はトレーニングの負荷を全てコントロールしたかったので、練習後の自主トレーニングはするな、する場合は必ずトレーナーに内容を伝えろとのことだった。

監督コーチとのコミュニケーション

【直後】

移籍当初の段階では挨拶程度のコミュニケーションしか取れない状況だった。移籍当初から評価が高くポジションが確約されている状況であったら、移籍直後から監督コーチから積極的にコミュニケーションを求められ、またそれに対してのコミュニケーションを私自身も積極的に返していたかも知れないが、プロ1年目、言葉が通じない、監督自身も私の能力を完全に把握していない、という状況だったためさほど監督コーチからも求められることもなく、コミュニケーションは挨拶くらいに留まっていた。

【半年後】

試合にも出場していたので、ある程度監督に私の能力は評価されていた。

プレーの部分でももちろんだが、パーソナリティーの部分もある程度理解されたのもこの頃からだと思う。

半年経過した時点での監督コーチとのコミュニケーションを日本のチームと比較すると、まだまだ少ない方だが、外国人選手としては普通だと思う。

3ヶ月経過した時点でチームから通訳をつけてもらっていたので、試合中でも監督からの指示等のコミュニケーションは取れていた。

選手同士のコミュニケーション

【直後】

移籍直後はまだ言葉が話せないなので、挨拶程度しかコミュニケーションが取れない。

サッカーなので言葉が伝わらなくても、身振り手振りで、『ここにパスを出したかった』というようにアクションが取れるが、それに対してチームメイトが、僕はこうしたかったというようなことを言われても、その先の改善策のコミュニケーションが続かない。食事に行っても終始会話に入れないので、一言も発しない日もあった。

【半年後】

チームメイトの個性が練習中、試合中のプレーを通じて理解できるようになってきたため、よりオンザピッチでのコミュニケーションは理解できるようになってきた。

ワンプレイが終わった後も改善のコミュニケーションは少しずつ片言で議論できるようになってきた。食事に行ってもなんとなくコミュニケーションを取れるようになるので、精神的な距離は縮まった。

ドクターPT とのコミュニケーション

【直後】

週に一回くらいのペースでメディカルスタッフに体をチェックしてもらう。ケアとしてマッサージを受けるということをしていたが、マッサージも東洋医学の指圧ではなくオイルで流す程度のものだった。

当時、日本人選手は個別に現地の日本人が開院している整骨院に週1くらいで通っている人が多かった。コミュニケーションとしては、疲れているか？痛いかなど簡単なものに限る。

【半年後】

試合に出場することも多くなってきていたので、PTとのコミュニケーションも増える。半年後の右足内側靱帯損傷をした時に、どのように治していくかという議論になった。ドイツ国内にも素晴らしい医療体制があるのだが、外国人選手は基本的に自国に能力のある素晴らしいドクターや施設があり、自国での手術やリハビリを望むことが多い。

しかしドイツ人ドクターやメディカルスタッフからすると、自分のチームに所属している選手を海外で治療させることはしたくない。

ここで議論になるのだが、私の場合は、怪我後12日間は一泊帰国して日本ナショナルトレーニングセンターでリハビリをし、その後はドイツに戻りチームの意向に従ってリハビリをした。

戦術理解

移籍当時はそこまで戦術的な決まりごとはなかったもので、意図的な戦術の理解に苦しみことはなかったが、基本的にゴール前自陣ピッチではよりシンプルにプレーすることや、ボールを奪った後のカウンターに移るスピードなどドイツにおいて誰もが小さい頃から当然のこととして身につけてきた無意識的な戦術の違いがあるように感じた。W杯のベルギー戦の失点のように切り替わった瞬間にスプリントして最短時間で相手ゴールを目指す、このプレーは日本にはない感覚的なプレーのひとつと言える。

相手チームの把握

相手チームの把握はミーティングで通訳が入り、理解できていた。試合中の相手チームの把握は個人的にはできていたが、チームメイトとの共有が完全ではなかった。

気晴らし、リフレッシュ

【直後】

コミュニケーションが取れないことにストレスを感じるが多かったので、コミュニケーションを取ることが気晴らしになっていた。

ケルンや隣町のデュッセルドルフという街は日本人が比較的によく、日本人のコミュニティを開拓することはそこまで苦労はなかった。大学サッカー出身のドイツ下部リーグの選手も、他チームにブンデス日本人プレイヤーもいたので、その仲間と食事へ行って、それぞれの境遇を愚痴ることが気晴らしになっていた。

【半年後】

街の暮らしにも慣れてきて、新しいレストランに食べに行く、近くの街や国に観光や買い物に行く、あとは日本人の友人とあって話す。

日本からの友人が来るといろんな話ができて気晴らしになっていた。

要点として

1、監督へのアピール（移籍してすぐ試合に出場できるような、ある程度評価がある選手の場合は、コンディションの調整の方が優先順位では上に行くかもしれないが、自分の場合は評価が低かったため、最初にこれがくる）

2、勝利（自分が試合に出ているときに限るが、当時の監督はリーグ戦で勝っている試合の次の試合はメンバーを変えないというタイプの監督だったので、試合では必ず勝つことを意識する、逆に出場できない試合で負けると次の試合で先発出場する可能性があるがあるので、アピールを怠らない）

3、怪我の回避（もちろん怪我をするとサッカーができなくなるので、重要だが、怪我を恐れていると本来のプレーができなくなるので、優先順位は高くない）

こういったことを実際に経験した選手が伝えることで、今後の選手の活躍につながると考えた。